テイルズ オブ ザ ワールド

なりきりダンジョン3

フリオとキャロの大冒険 下



工藤 治
Osamu Kudo

テイルズ オブ ザ ワールド
なりきりダンジョン3

SPECIAL STORY

ファミ通文庫

工藤 治
Osamu Kudo

7月25日生まれ、奈良県出身。少年ジャンプノベル・ノンフィクション大賞で受賞後に作家デビュー。演劇的な熱血台詞まわしが『工藤節』と呼ばれ、お芝居好きの人たちから根強く支持されている。『アトリエ』シリーズ（ファミ通文庫・全4冊）、『モエかん～緊急指令！　妹島を攻略せよ！～』（ファミ通文庫）、『テイルズ オブ ザ ワールド・なりきりダンジョン2』（集英社刊）など著作多数。

中嶋敦子
Atsuko Nakajima

横浜市生まれ。フリーのアニメーター。『らんま1／2』、『逮捕しちゃうぞ』、『ゲットバッカーズ』等、多数の人気アニメシリーズでキャラクターデザイン・作画監督を担当。『ガンナー』（ファミ通文庫）、『テイルズ オブ シンフォニア 久遠の輝き』（全4巻・ファミ通文庫）、『テイルズ オブ シンフォニア 青翠の器』（ファミ通文庫）、『逮捕しちゃうぞ』（講談社）など小説イラストも手掛ける。

カバーイラスト　中嶋敦子

テイルズ オブ ザ ワールド

なりきりダンジョン3

フリオとキャロの大冒険 下

工藤 治

ファミ通文庫

テイルズ オブ ザ ワールド

なりきりダンジョン3

フリオとキャロの大冒険 下

Tales of the World
NARIKIRI DUNGEON 3







目次

テイルズ オブ ザ ワールド

なりきりダンジョン3

フリオとキャロの大冒険 下

工藤　治

ファミ通文庫

イラスト　中島敦子

第五章　未来に遭う冒険

＊＊＊

「なあキャロ。エターニア伝説に、いつの間にか続きの物語が書き加えられてるんだよ」
「あら、いつものように血相を変えないで余裕あるわね、フリオ」
町はずれの孤児院あすなろ園の食堂で、みんなの夕食の食器を片づけていたキャロが言った。
かの『テイルズ　オブ』シリーズの伝説が語り継がれるミナクルの町に住む少年と少女。
フリオとキャロである。
古代遺跡から発見された万能スーツ《なりきり服》を着用することができた二人は、
同じく古代遺跡から発見された時空転移装置ドリーム号に乗って歴史をねじ曲げようと

する泥棒夫婦のポニーとクライトをやっつけて、ミナクルの町で唯一の英雄になるはずだった。でも今は、その予定が少し狂い始めている……。

「どれどれ、ちょっと見せて」

キャロは、あまり緊張感なさそうに話しかけてきたフリオから英雄伝説を借りて開いた。

『主(あるじ)とともに消えた《絶望の宮殿》が、再び現れたと知ったリッドたちは急いで絶望の宮殿へ駆けつけました。しかし、そこには思いがけないワナが……』

「……か。ふ〜ん、それで?」

「リッドたちが駆けつけたって書いてあるから、心配いらないし――この絶望の宮殿に行けば、きっとリッドたちと合流できるぜ!!」

「だと、いいけど」

キャロは、楽観的なフリオに釘(くぎ)をさした。

自分たちの追っていた泥棒夫婦のポニーとクライトは、すでに捕えた。

今は二人とも、

「あ～ん、許しておくれよ～。アタシら、レミ遺跡であいつらに話を持ちかけられただけなんだからさ～」
「そうなんですよ～、悪いのはすべてあいつらでさ～」
などと、保安官事務所の留置場で必死に弁明を続けている。
自分たちのことを棚に上げて、手下として使っていた二人に罪をなすりつけようとするとは――なんという身勝手な夫婦なのだろう。
しかし保安官コバーンの調べで、新たな情報を掴むことができた。
ポニーとクライトは、こう証言したのだ。
「なんでもレミ遺跡の一番下の階には、ナントカ王の宝があるとかって話でしてねぇ～」
「そうそう。だからアタシらは、レミ遺跡の扉を開けるカギを集めてたってわけさ～」
「墓室に続く部屋のカギ自体が、『テイルズ　オブ』世界でも名のあるお宝だもんなァ～」
「王様の副葬品は、もっと凄いモンに決まってる、そう思うのが人情だしねぇ～」
「で、あいつらに裏切られて……〝飼い犬の手を噛む〟ってやつさ」
クライトが得意の〝オレ様流の格言〟を使ったとたん、
「おまえさん、犬なら手じゃなくて脚だろ？」
「ああ、ごめんちゃい母ちゃん！」

「そんな謝らなくていいんだよ、父ちゃん♥」
「……母ちゃん♥」
そこからあとは、仲むつまじい夫婦の世界に二人とも入ってしまった。
保安官事務所で、得られた情報は以上だった。

＊＊＊

「レミ遺跡の地下に眠るお宝かぁ……そのために鍵を……」
思い返していたフリオが、あすなろ園の天井を見つめてつぶやく。
「そうね……」
食器を片づけ終わったキャロも、考え込んでいる。
泥棒夫婦の自供から、フリオとキャロはあらためて事件を整理した。
今までポニーとクライトの手下だと思っていた男と女のコンビこそが——実は、黒幕だった。
その二人が泥棒夫婦をそそのかし、歴史の改悪を行っていたのである。
いや、本当の目的は——

「石版に記(しる)されていた『テイルズ オブ』世界の貴重品の数々が、実は遺跡の封印を解く鍵になっていたというわけなのね。それを手に入れるための行動が、たまたま歴史改悪のように見えたってことなんだわ……」
そう、歴史への干渉(かんしょう)が目的ではなかったのだ。
「お宝かぁ……レミ遺跡の地下に……」
「何うらやましそうな声あげてるのよ、フリオ？」
「だってよぉ、お宝だぜお宝！　オレたちの町のすぐ足下(あしもと)に、お宝が眠ってたんだぜ♪」
「まさか、自分が欲しくなったんじゃないでしょうね？」
キャロは、キッとフリオを睨(にら)んだ。
「な、なんだよ……そういうキャロだって、キンキラキンに輝くお宝を目の前にしたら気が変わっちまうかもしれないぜ？」
「何言ってるのよ！　そんなことになったら、私たちも泥棒夫婦と変わらないじゃないの！」
「夫婦？　オレたち、まだ夫婦なんかじゃないぞ？」
「まだって、当たり前でしょ！」
「あ～あ、オレはキャロみたいにうるさいのと結婚するのはゴメンだぜ！」

「なんですって！　こっちだって、あんたみたいな単純お気楽バカはごめんよ！」
「なっ！　単純お気楽バカだとぉ～？」
「まあまあ、お二人さん――話を途中で脱線させないで」
食堂に、凛（りん）とした女性の声が響いた。
振り返ると、銀髪に理知的な顔だちの女性が立っていた。リフィルである。入り口で聞いていたのか、すべて察した顔で二人に近寄ってくる。
「いいこと？　今ここで大事なのは、レミ遺跡の地下にお宝が眠ってるかどうかじゃなくて、鍵を手に入れるためにいろんな時空を荒らし回っている、あの迷惑な二人をどうやって捕えるかということよ」
「あ、そうだよ！　仮面なりきり師野郎！　顔を隠してヒーロー気取りで、気に入らないぜ！」
フリオがそれを聞いて、とたんに熱血する。
悔（くや）しさがよみがえってきたのか、じっとしていられなくなる。
「くそ、どこだ！　どこにいやがるんだ！　出てこい！」
「ちょっとフリオ、そんなにウロウロしないでよ。気が散るでしょ」
右に左に、食堂の中を行ったり来たりし始めたフリオに、キャロが注意する。

でも、フリオの気持ちもわかっていた。

今や敵は、泥棒夫婦から仮面なりきり師コンビへと変わった。むしろ、そちらのほうが強敵だった。

何しろ自分たちと同じ《なりきり服》を着て、いろんな職業に変身できる——しかも、実力は向こうのほうが上なのだ。

「キャロ、安心しろって」

ウロウロするのをやめて、いきなりフリオが真顔になった。

「今度こそオレたち英雄(ヒーロー)が、あいつらをとっ捕まえてやるからよ！」

「オレたち英雄？　フリオ、いつから英雄の仲間入りをしたのよ？」

「決まってるだろ。なりきり服を着たときからだよ！」

「なりきり服を着たときから？　じゃあ、この私も英雄だってことになるじゃない？」

「そうだよ、そうなんだよ！」

フリオは力強く答えた。

「オレたちは英雄なんだよ——だからリッドたちを追って、絶望の宮殿に向かうんだ！」

それは、心の中にある不安を打ち消そうとしているようにも聞こえた。

あの仮面なりきり師コンビが——百日後の自分たちだという不安を。

「ミナクルの町で英雄になるのは、オレたちだ！」

そう言い放って、フリオは食堂から出ていった。

気にしていないように見せかけているけど、実はすごく気にしているのだろう。

表面的には仮面なりきり師コンビが百日後の自分たちだということを、フリオは鼻で笑うように否定していた。

そんなバカなことがあるわけない。

憧れの『テイルズ オブ』世界の歴史を狂わせてまでもレミ遺跡の地下に眠る宝を手に入れようとする——そんなセコイ考えの持ち主が、自分たちの未来の姿だとは思いたくない。

自分たちこそ、ミナクルの町で唯一の英雄になる——なりきり師なのだ。

フリオはそう信じていた。

もちろんキャロも、それを信じたいと思っている。

だけど——。

どこで何が変わるかなんて、誰にも予測がつかない。

英雄伝説に書かれていた『テイルズ オブ』世界の歴史だって、あるひとつの出来事

がなかっただけで、その未来は大きく方向が変わってしまうのだ。
例えばラグナ遺跡で、カイルとリアラがもしも出会わなかったら――。
その先の結末は、英雄伝説に書かれてあるものとは全然違ったものになっていたかもしれない。
それを思うと、自分たちだって同じことだ。
フリオは仮面なりきり師コンビのことを許さないつもりでいる。しかし、彼らが目的としているレミ遺跡の地下に眠るお宝については、当のフリオ自身も心を揺さぶられていた。フリオは、そんな危なっかしい台詞を自分で口にしてしまったことを忘れてしまっている。
そんな強がって余裕を見せたがるフリオを、キャロは心配していた。
問題に立ち向かうというより、どこか避けているような印象を持ち始めていたからだ。
もちろん、キャロのほうもキンキラキンのお宝を目の前にしたら――フリオが言ったとおり、心変わりしないと言えるだけの自信が少しなかったりする。
困った英雄たちである……。

＊＊＊

「世界と歴史のレスキュー隊！　絶望の宮殿に向けて出動！」
「ドリーム号――発進せよっ！」
翌朝、古代史研究所の中庭に、ブラウン博士とホワイト博士の号令が響き渡る。
フリオとキャロの活躍によって、泥棒夫婦の手から回収されたドリーム1号が駆動音を唸らせる。
「よみがえった絶望の宮殿に向けて、発進！」
中では、操縦席に着いたキャロがレバーを引いた。
「よし、行くぜ！」
隣の席に着いたフリオもレバーを引いた。
操縦席の前にある窓の外が真っ暗になった。時空転移が始まったらしい。
超古代文明の機器が一斉に稼働する緊張感が漂う中で、
「なぁ、キャロ――」
ふいに、後ろから新デスティニー世界のカイルが話しかけてきた。

キャロは時空転移するドリーム1号を自動操縦に切り換えて、カイルのほうに振り返った。
「あ、あのさ……明日は今日より大変って、あれはキャロの口ぐせなのか？」
「どうしてそんなこと、いきなり聞くの？」
「いや、ちょっとね……なんだか聞きたくなっちゃったもんだから。忘れないうちに聞いておこうと思ってさ」
カイルは父親ゆずりの黄金の髪をかき上げながら笑った。屈託のない笑顔は、デスティニー伝説の英雄スタンのそれにそっくりだった。
「ねえ、キャロ。教えてよ」
「そうねぇ……」
「なんであんなふうに、いつも言うの？　何か意味でもあるの？」
名のある英雄といっても、まだ少年のあどけなさを残している。キャロはそんなカイルのことが可愛らしいと思った。
「忙しいほうが面倒なことを思い出してる暇がなくて、いいのよ」
「面倒なこと？」
「うん。たとえば『なぜ私には親がいないの？』とか悩んでも、しょうがないものね。

だから、今日より明日のほうが大変——悩んでる暇なんてないのよって、自分に言い聞かせているの」

「ああ、そっか……キャロは強いんだな」

ぽつりと、カイルが言った。

「……キャロに比べたらオレは恵まれてるのかもな。なんてったって二人分うるさい母さんがいたから」

ぼやいたカイルに、

「ちょっと、うらやましいかな……」

キャロは微笑(ほほえ)んだ。

すると、

「ちょっと！　あんたたち、何しみったれた話してんのよ！」

威勢(いせい)のいい声とともに、ルーティが寄ってきた。

そのとたん、カイルは母親に叱(しか)られたような引きつった顔になる。しかし当のルーティはまだスタンと結婚もしておらず、さらに目の前の男の子が未来の自分の子供だってことも知らない。

「泣き言並(なごと)べたって、１ガルドにもならないわよ！　欲しいモノがあるなら、お金を貯(た)

めて好きなだけ買えばいいじゃない！」

いや、そういう話をしていたんじゃないんだけれども……。

怒鳴られて、つい言い返したくなったが――カイルは口をつぐんだ。自分の母親があまり年の差がない若いお姉さんだと、どうもやりにくくてしょうがない。

「いい、わかった？　世の中お金よ！　お金さえ貯めれば、誰だって幸せになれるのよ――わかったわね？」

一方的にまくし立ててルーティは自分の席に戻るなり、まだ怒っているかのようにドスンと腰を下ろした。

「……ねえ、キャロ……あれでもうらやましい？　なんだったらお安くしとくけど？」

カイルは恥ずかしそうに小声で、キャロに伝えた。

「あ、あはは……」

キャロも引きつった顔になっていた。

＊＊＊

「ここか……エターニア伝説に出てくる、人の絶望が造りし迷宮って……」

時空転移を終えたドリーム1号から降り立ったとたん、フリオはさすがに緊張した面持ちになった。

異空間に、迷路のように入り組んだ岩場が浮かんでいるのだ。構造的には『時の吹きだまり』と似ていたが、しかしここには視界を遮る霧はなかった。そのぶん、現実感のない冷たく枯れた世界が隅々まではっきり見えた。

「気味悪いな……殺風景で、なんか生きた心地がしないよ」

フリオは生きている実感を得ようとするかのように声に出した。

まるで死の世界と言い表したくなるような、身の毛のよだつ空間だ。

「だからこそ、絶望の宮殿と呼ぶのかもしれんな……」

ドリーム1号から降り立ったファンタジア世界のクラースが言った。続いて降り立ったデスティニー世界のフィリアも、同感とばかりに静かに頷く。

「よし、みんな集まろう！」

フリオは指揮官らしく号令をかけた。

なかなかサマになってきたようね――と、シンフォニア伝説のリフィルは微笑ましそうにフリオの前に整列した。

ファンタジア世界のクラース、アーチェ、チェスター。

デスティニー世界のフィリア、マリー、ルーティ。
新デスティニー世界のカイル、ロニ、リアラ。
シンフォニア世界のロイド、コレット、リフィル。
そしてフリオとキャロ。
先の『転生の門』から生還して、力の回復を待つリオンを除いた十四名の英雄たちが、勢揃いしていた。
と、そこに。
「お～い！　お～～～い！」
不気味な世界には似つかわしくない威勢のいい男の子の声が近づいてきた。一同が振り返ると、赤毛で軽装なスタイルをしたリッドがこちらに向かって走ってきた。
「リッド！」
フリオとキャロは出迎えるように、慌ててリッドのほうに駆け寄った。
「ファラさんとキールさんは？」
さっそくキャロが訊ねる。
走り疲れたのか、リッドは息を切らせながら答えた。
「はあ、はあ……いや、あのドリーム号で飛ばされたときは、一緒にいたんだぜ……で

も、気づいたらオレひとりだし、怪しいヤツらはうろついてるし……」

「まさか!? 捕まったってこと?」

「じゃあ、二人の救出が先だな!」

「……すまねえ」

ぶっきらぼうにリッドが言うと、

「あやまらないでよ、仲間でしょ――」

キャロは、いつもの口癖で胸を張った。

「それに明日は、今日より大変って決まってるんだから!」

「でもよ、キャロ……英雄伝説には、リッド、キール、ファラたちが絶望の宮殿に向かったって書いてあるんだぜ。ちょっとおかしくねえか?」

「う～ん……フリオが英雄伝説を読み飛ばしただけなんじゃないの? 本当は、途中でリッドだけがはぐれてしまいましたって書いてあったりしてね」

「そんなことないぞ! どれどれ……」

フリオはムッとして、いつも懐(ふところ)に携帯している英雄伝説を取り出した。

「あ～、いやだ。また服の下に入れてるの?」

「決まってるだろ」

「いいかげん英雄伝説が汗臭くなっちゃうわよ？」
キャロが鼻をつまみながら片手を振る。
フリオは平然と、英雄伝説を開きながら言った。
「へへ～んだ、そう言うだろうと思って。こっそり、さくら食堂のジュディさんに内ポケットを作ってもらっていたんだぜ！」
「ええっ！　フリオったら、なりきり服に手を加えたのぉ？」
「まあな。これも生活の知恵ってやつ？　へへッ」
笑って自慢するフリオに、キャロはムッとする。
「なりきり服に勝手な変更を加えたりなんかして――本来の能力が出せなくなっても、私は知らないからねっ！」
「大丈夫だって！　そのくらいの改造はやっても構わないって、あのなりきりショップの店長コンビにちゃーんと確認とってあるから」
「変なところで気が回るのね……フリオったら」
「へへッ、どうだまいったか！」
キャロは、やれやれとため息をついた。
「それより英雄伝説に書いてあることは？　見落としはないの？」

「おお、そうだった……えーっと、どれどれ……」
英雄伝説を開いたフリオは、ページをめくりながらその場に座り込んだ。
「ふむふむ、なるほど……」
「で、どうなのよ？」
「う〜ん、スゲェ！　こいつは！」
フリオはいつの間にか熱心に読みふけっていた。
「こらぁー、今は読書に熱中してる場合じゃないでしょ！」
とたんにキャロの一喝が飛んだ。
「アハハ、悪ぃー悪ぃー。つい、いつもの癖で〜」
頭をかきながらフリオが愛想笑いを浮かべる。
「もう、緊張感がないんだから……それで、なんて書いてあったのよ。またどこか新しく書き換わったりしてなかったの？」
キャロが質問すると、フリオは頷いて立ち上がった。
「何も変わってなかったよ。ここに来る前とおんなじだ。リッドたちは絶望の宮殿に向かった、とだけしか書かれてないぜ」
「ということは——ファラとキールも、この迷路みたいな岩場のどこかにいるってこと

ね」
「そういうことになるな」
フリオとキャロが頷き合い、周りに自分たち以外の人影はないかと見渡したときだった。
「おい、あれを見ろ！」
シンフォニア世界のロイドが叫んだ。
一斉にその方向を見ると、向こう岸の岩場に人影があった。それは四、五人が列をつくって行進する不気味な光景だった。全員が黒いマントに全身を包んだ装いは、明らかに魔物のオーラを発している。
そいつらは、誰かを取り囲むようにして連行しているらしい。よく見ると女の子のようだ。深緑の髪に、ラシュアン染めの衣装をまとっていた。
「あ！　あれは——ファラさん！」
キャロが気づいた。
「やべーっ、ファラさんが！」
フリオが駆け出す。全員が後ろについてきた。しかし渡る橋もなく、ファラと魔物たちとは反対側に出てしまった。向こう岸に渡るには、どこかでつながっているところを

探すしかない。

しかし、

「あれ？　向こう側に行けないぞ！」

立ち止まったフリオがきょろきょろしてしまう。

どこまで走っても、迷路のような岩場は向こう側とつながっていない。

どこだ、どこから行けばいいんだ？

右往左往（うおうさおう）してしまう指揮官に、

「渡り石だよ！」

後ろからリッドが教えてくれた。

「あれに乗って向こう側に渡るんだ。さっき試しに使ってみたらうまくいったよ！」

説明しながらリッドが指さした方向には、岩場の縁（ふち）に張りつくように円形の小さい岩場があった。おそらくそれが、人を乗せて向こう岸へと運んでくれる移動装置なのだろう。フリオは確信して、教えてくれたリッドに言った。

「よし、それに乗っていこう！」

「ちょっと待ってフリオ！　あんなに小さいんじゃ、みんなは乗れないわよ」

駆け出そうとしたフリオをすぐさまキャロが呼び止める。

「チッ……そうだな。言われてみれば五人も乗れないぜ、あの岩場……」
またフリオは立ち止まって考え込む。
すると、英雄たちの輪の中から鍔（つば）の広い帽子を被（かぶ）った男が一歩前に出てきた。
「代表で何人かが、向こう岸に渡るしかないな」
ファンタジア世界のクラースだった。
「こちら側に残った者たちは、その間にほかの渡り石がないか手分けして探す――それでどうだ、フリオ？」
クラースは、フリオを立てるように提案した。
「ありがとうクラースさん」
「さすがクラースさん、冴（さ）えてるわ♪」
フリオに続いて、キャロがお礼を述べようとしたときだった。チョンチョンと、キャロの肩を後ろから指で叩（たた）く人がいた。振り返ると、それはクラースと同じファンタジア世界のアーチェだった。
「ねえキャロ、あたしたちは空から行こうよ」
「えっ、空から？」
「そうだよ、これを使って♪」

と、アーチェは手にしたホウキを持ち上げてみせる。
「あ、そうか。なりきり服に着替えろってことですね？」
「そうそう♪」
赤毛のアーチェが笑って頷くと、キャロは片手を天にかざして変身のポーズを構えた。
「なりきりチェンジ！」
キャロが叫ぶと、その全身が光に包まれ――瞬く間に服の形状が変化していった。
なりきり服を着用した者の〝未来の姿とその力〟が、時空転移の力によって現在に転送されてくる。たとえ子供でも、大人の力――つまりその道で熟練した、達人並みの力を瞬時にして得ることができてしまう。
それが、なりきり服の力なのだ。
光が収まると、《ウィッチの服》に着替えたキャロが立っていた。アーチェと同じようにホウキを手にしている。そんな二人が並んで立つと、まるで姉妹のようにも見えるから不思議だ。
「じゃあ、行こうか♪」
「はい、アーチェさん♪」
キャロは頷き、ホウキに跨がった。とたんに体が軽くなったように上昇し、フリオた

ちを見下ろす高さへと舞い上がる。
「フリオ、私たちは先に行ってるからねっ！」
「おう、わかった。見失うなよ！」
「フリオじゃないんだから大丈夫よ！」
得意そうな顔で言い返したキャロは、魔物に連行されるファラを追ってアーチェとともに飛び去った。
「くそっ、キャロのやつ……言ってくれるじゃないか。よぉーし、こっちも負けずに追っかけるぞ！　まずは先発隊の編成だ！」
キャロを見送ったフリオは、悔しそうに伝説の勇者たちに向き直った。

＊＊＊

「きゃ〜〜〜、あ〜れぇ〜〜〜」
女の子の悲鳴(ひめい)が、絶望の宮殿に響く。
キャロとアーチェが空から到着したとたん、ファラを連れていたドルイドが慌(あわ)てだしたのだ。ファラは腕を強く摑まれ、キャロたちに奪われないよう囲まれ始めていた。

そこに、

「ファラ、大丈夫か！」

リッドの声が飛んだ。渡り石で移動してきたフリオたちが追いついたのだ。リッドを先頭に、フリオ、ロイド、リフィルが走ってきて、ファラを取り囲む魔物の群れと対峙する。

「ファラを返せ！　お前ら許さねえぞ！」

リッドは素早く剣を抜いた。

フォ、フォ、フォッ……。

黒頭巾を被った魔物が不気味な笑い声をもらす。

「くそっ、とにかくみんなで突っ込め！」

フリオが号令を出した。

「行くぜぇぇぇぇっ！」

リッドとロイドが同時に飛び出した。グワァーッと唸り声を上げて、黒衣の魔物が目の前に躍り出る。

その刹那、

「でりゃあああっ！」



リッドがそいつを斬りつけた。魔物はもんどり打って倒れる。
「なかなかやるじゃないか、リッド！」
「当たり前だ！　ロイド、そっちを頼む！」
「任しとけって！」
ロイドは頷くと、脇から現れたタランチュラの大群に向かっていった。
「あ、ひとりじゃ危ないわ、ロイド！」
教え子のあとを追って、リフィルも怪物の群れに向かっていく。
その横で、
「なりきりチェンジ！」
キャロと同じかけ声を使って、フリオは《格闘家の服》に早変わりした。
目の前には、いかつい巨軀のオーガーがいる。そいつとの接近戦に挑むつもりだった。
「うりゃあああああっ！」
フリオは跳躍し、怪物の頭上で空中回転した。回転しながら片足を伸ばし、そいつの顎を蹴り上げる。命中したとたん大きな体がぐらりとよろめき、呻き声を上げた。
着地したフリオは、
「今だ！　《掌底破》！」

気をこめた掌底で、巨大な怪物をさらに攻撃する。
そんな中で、
「ファラ！　無事か！」
黒衣の魔物たちの輪に飛び込んでいったリッドは、ようやくファラの前に接近していた。
「どけ、邪魔だ！」
ファラとの間に立ち塞がる魔物を、リッドは剣で薙ぎ払っていく。
「――ファラ！」
やっと彼女にたどり着いた。
リッドに喜びの表情があふれたとたん、
「うん、イケるイケる！　今度は私が相手よ！」
「えっ？」
いきなりファラの表情が険しくなった。リッドを睨み上げて、敵意を剥き出しにしてきたのだ。
「フ、ファラ？」
戸惑うリッドに対して、ファラは襲いかかってきた。

「《三散華》！」

格闘技の修行に励んでいたファラの攻撃である。前進しながらリッドに蹴りを三回くり出してくる。

「お、おい、よせよファラ！　オレだって！　リッドだよ！」

かわしながらもリッドは、ファラに呼びかける。

「このーっ、すばしっこい奴ね！」

ファラは身構えて、リッドの隙をうかがった。

「どうしたんだリッド！」

オーガーを倒したフリオが駆け寄ってきた。

「な、なんかわかんねえけど、ファラの様子がおかしいんだ！　オレのことを、怪物だと思っているみたいなんだ！」

「なんだって！　まさか――」

フリオはファラを見て、ハッとした。

これまでの冒険でも遭遇した、英雄同士が闘う光景――それが、この絶望の宮殿でも起こっているのか。

「フ、ファラはどうしちまったんだ？」

リッドが、震(ふる)えた声を上げて固まっている。
慌ててフリオが説明した。
「聞いてくれリッド！　ファラは多分、記憶の一部を失っているんだ！」
「記憶を？」
「ああ、術にかけられたみたいに――オレたちのことを怪物だと思って、攻撃してきてるんだ！」
「そんなバカな！」
「リッド、ファラの意識が目覚めるように話しかけろ！」
フリオがそう説明した直後だった。
走ってきたファラが、跳躍して蹴りをフリオの横(よこ)っ面(つら)に見舞った。
「ぐわあああああっ！」
顔面を蹴られたフリオが吹っ飛ばされる。離れた場所にある岩場に頭を打ちつけ、そのまま気を失ってしまった。
「な、何するんだファラ！」
「うん、イケるイケる♪」
ファラは笑いながら、リッドにも拳(こぶし)をくり出してくる。今度はよけようとはせず、両

手でその拳を受け止めた。
「目を醒ますんだ、ファラ！」
拳を受け止めたリッドが、フリオに教えられたとおり訴える。だが、次の瞬間——ファラは、リッドの腹めがけて膝蹴りを浴びせた。
「うぐっ！」
痛みに顔を歪め、受け止めていたファラの拳を離してしまった直後、
「三散華っ！」
またもや三連続の蹴りをくり出してきた。
リッドはよけきれず、もろに食らった。
「ぐあっ！　あうっ！　はうっ！」
岩場の崖っぷちに追いつめられ、リッドは苦しそうに膝をつく。
「ハア、ハア……ど、どうしてだファラ……どうして、目を醒ましてくれないんだ？」
息苦しさの中で、言葉を吐いた。
——このままでは自分がやられてしまう。
だけど、ファラを傷つけることなんてできない。
身動きが取れなかった。

どうすればいいんだ――オレの声は、ファラに届かないっていうのかよ！
リッドは心の中で叫んだ。
「うん、イケるイケる！　もうすぐイケるイケる！」
ファラが、勝利の笑みを浮かべて近づいてくる。遠くのほうではファラに顔面を蹴られたフリオが気絶している。さらに離れた場所では、ロイドとリフィルがタランチュラの群れと激戦している。
ファラの目の前にいるのは、リッドだけだった。
今ここで、オレがやれることはなんなのか――。
そう思った直後だった。
「フフッ……イケるかも！　イケるか～もねぇっ！」
ファラが、いつもの口癖とはちょっと違う言葉づかいになった。
「……？」
リッドは首をかしげた。
なんだか変だ、今の口調(くちょう)……ファラじゃないような気がした。
「フ、ファラ……その話し方は……」
リッドは訝(いぶか)しげな表情で考え込む。

その様子を見たファラの顔に焦りが灯った。

「じ、地獄に落ちろ！」

そう叫んで、リッドを崖っぷちから蹴り落とそうとした。

「たあっ！」

渾身の力を振りしぼって、間一髪でリッドは脇へ逃れる。地面を転がって体勢を立て直した。

「おのれ、今度こそ！」

蹴りが空を切ったファラが、悔しそうに向き直る。そのままリッドめがけて駆けてきた。

「くそっ、やめろって言ってんのがわかんねえのかよ！」

リッドは立ち上がって、迫りくるファラの頬を平手で引っぱたいた。

「きゃっ！」

不意をつかれたファラが倒れる。

「ファラ！　お前はそんな奴じゃない！　いいかげん目を醒ませよ！」

怒鳴り声が、絶望の宮殿に響き渡る。

一瞬の間があった。

　地面に突っ伏したファラはしばらく動かなかった。
　それは闘いというよりも、リッドが気持ちの強さを見せた格好になった。
「うっ、ううっ……」
　やがてファラは地面に顔を伏せたまま泣き声をもらす。
「……フ、ファラ？」
　心配になったリッドが近寄ろうとしたときだった。
「わ、私だって……ホントはこんなことしたくないのよ……でも、私たちは試練を越えなきゃ……強くならなきゃ……あいつには勝てないのよ……」
　ゆっくりと立ち上がりながら、ファラは意味不明なことをつぶやいた。
　ますます本人らしくないと感じられた。
「な、なんの話だ……ファラ？」
　問いかけながらリッドが、さらに近づこうとすると、
「――近寄らないで！」
　ファラは後ずさりし、いきなりリッドの前から脱兎のごとく逃げ出した。
「お、おい、ファラ！」
　絶望の宮殿の奥へと逃げ去るファラを追いかけようとすると、

「リッド！」
ロイドの声が呼び止めた。
立ち止まって振り向くと、タランチュラの群れを全滅させたロイドとリフィルがこちらに向かってくるところだった。
「まあ、フリオ！　しっかりなさい！」
途中でリフィルは気絶しているフリオに気がつき、そちらのほうに駆け寄った。リッドの前には、ロイドだけがたどり着いた。
「おいリッド、なんであの子は——お前の前から逃げ出したんだ？」
ロイドの質問に、
「わからねえよ……」
リッドはうまく答えられなかった。
「フリオが言うには、ファラは記憶の一部が消えているかもってことらしいけど……オレには、何か違うような気がするよ……」
顔をそむけて、苛立ち（いらだ）を吐き出すようにつぶやいた。
なぜだかわからないが、はっきりしない何かが胸の中に込み上げてくる。
ロイドは、そんなリッドを励ますように肩を叩いた。

「元気だせよ。オレも『神託(しんたく)の聖堂』でサナトスに操(あやつ)られていたクチだからな……」
「えっ？」
「逆の立場の辛(つら)さってのが、痛いほどわかるぜ」
「ロイド……」
リッドは顔を上げて、照れくさそうに笑うロイドを見つめた。
「まあ大変だけど、最後まであきらめずに頑張ってやれよ」
「……」
「……あの子のためにも」
ちょっと恥ずかしそうに言ったロイドの言葉に、リッドは真顔で頷いた。

＊＊＊

ファラは、『時の吹きだまり』のときのように記憶の一部を失っているのだろうか。
それとも操られているのか。
いや、それはないだろう。人の心を操る能力を持つサナトスは、すでに神託の聖堂で倒している。サナトスがもう一度、別の時空に復活してくるとは考えにくい。

だとすると――やはり時の吹きだまりと同じく、記憶をなんらかの理由で失ったとみるのが正しいようだ。
「とにかく、確かめてみるしかないわね――」
考え込んでいたリフィルが思索を打ち切った。
意識を取り戻したフリオとともにリッド、ロイド、リフィルたちは、走り去ったファラを追跡した。
「こっちよ、フリオ！」
ホウキに跨がって宙に浮かぶキャロが導いてくれる。
キャロとアーチェは空からファラの逃げた方向を確認していた。二人ともリッドとファラが闘っていたときは、その上を旋回しながら胸を痛めていた。特にキャロは、英雄伝説でリッドとファラの関係を知っているだけに辛かった。もちろん危なくなったリッドを助けたかったが、ファラも助けたかったからだ。
そのため――どうすればいいかわからず、ただ宙に浮かんでいるだけだった。
アーチェも、そんなキャロの様子を察していた。そして自分にキャロが命令するまで、黙って見ていようと思っていた。いや、リフィルからの提案で、二人の指示どおりに動くことになっていたのだ。

なりきり師を育てるために――。
その目標があったから、懸命に堪えようとした。『テイルズ オブ』世界の英雄たちは、よほどのことがないかぎりアドバイスを慎んでいたのだ。
「あそこよ、あの柱の前よ！」
ホウキに乗って飛翔するキャロが、後ろを走ってくるフリオたちに指さす。
迷路のように入り組んだ岩場の先には、六本の太い柱が立っていた。そこで待っていたキールの許に、ファラは駆け寄ったのである。
「見て！　その奥にドリーム２号が置かれてあるわ！」
「なんだって！」
頭上を飛ぶキャロに、フリオが走りながら叫ぶ。
キャロはホウキに跨がったまま頷き返した。まっすぐ前を見つめると、向かう先の一番奥に奪われたドリーム２号が存在していた。青と白の幾何学的模様の入った黒い球体の上に、大小二つの輪っかを載せた大きな時空転移装置。その姿は、けっして忘れはしない。
「――ということは、やっぱりここにも、あの仮面なりきり師コンビがいるんだな！」
フリオの位置からはまだドリーム２号が見えないのか、推測するような言葉が返って

きた。
「決まってるでしょ！　泥棒夫婦のポニーとクライトは捕まえたんだもの。この『テイルズ オブ』世界の歴史を改変しようとするのは、もうあいつらしかいないわ！」
キャロが確信して答える。
やがてフリオを先頭にした先発隊は、柱に囲まれた場所へとたどり着いた。
六本の柱が並んでいる中央には、ファラとキールが立っていた。二人とも、こちらを睨んでいる。
「キール！」
先頭のフリオを追い越してリッドが叫んだ。
だが仲間の呼びかけに対して、二人は冷たい反応を返す。つまり、邪魔な連中が来やがったと言いたげな表情だったのだ。
それでもリッドは——彼らに向かって、懸命に呼びかける。
「ファラ、キール！　オレだ、リッドだ！　頼む！　目を醒ましてくれよ！」
「失礼ね、ちゃんと起きてるわよ」
「寝ぼけているのは、お前のほうだろ」
ファラとキールが続けざまに返事する。

二人は、明らかにリッドのことをバカにした笑みを浮かべる。そして敵意を剥き出しにして歩み寄ってきた。

「お、おい、やめろよ……オレには、ファラやキールと闘う理由なんてねえよ……」

「リッド、ダメだ！　二人ともやる気だぜ！」

隣に立ったフリオが後ずさる。

「くそっ……」

リッドも後ずさりながら、唇を噛みしめた。

「みんな、気をつけて！」

空を舞うキャロが、心配そうに呼びかけたときである。

「あ〜〜〜、もう我慢できない！　その二人をやっつけちゃいなよ！　気絶させて、ここから連れて帰ればいいんだよ！」

上空を旋回するアーチェが、とうとう助言した。禁を破ったのだ。とはいえ、アーチェ本来の性格からすれば、今まで静観していたことのほうが不思議だったぐらいだ。

「フリオ、アーチェの言うとおりよ！　二人を怪我させないように闘いなさい！」

それを聞いたリフィルも、禁を破って指図する。

「で、でも……」

フリオは、横目でちらりとリッドを見た。やはり、闘いたくないと言いたげな横顔だった。そんなリッドの気持ちがわかるだけに、胸が痛い。
「おい、どうするんだよフリオ！」
ロイドがたまらず指示を求めてきた。
「そ、そんなこと言っても……」
なかなか決心がつけられない。
フリオがまごついている間にも、ファラとキールは歩み寄ってきた。
「いつまでも、時代遅れの正義にしがみついている場合じゃないんだ！」
「私たちは変わったのよ！」
ファラのその言葉をきっかけに、二人がリッドたちに飛びかかってきた。
「行くぞ！」
キールは杖をくり出し、《ファイアボール》を放つ。
「うわっ！」
リッドとフリオが慌ててよける。
「くそっ、防戦一方なのかよ！」
ロイドは剣を抜くこともできず、苛立っている。

「ハアッ！」
ファラが地面を蹴ってジャンプし、ロイドの前に降り立つ。
「うっ！　なんだと？」
ロイドがぎくりとする。
ファラが身を翻（ひるがえ）し、ロングスカートの中から回し蹴りを見舞う。
「うがぁっ！」
顔面に食らって、ロイドが地面に薙ぎ倒された。
「——ロイド！」
リフィルが杖を構え、教え子を助けようとする。
「そうはさせるか！」
キールがその隙を狙って《アクアエッジ》を放った。
水の塊（かたまり）が、リフィルを襲う。
「きゃああああっ！」
「リフィル先生！」
空から見ていたキャロが悲鳴を上げた。
その直後、隣で浮遊（ふゆう）するアーチェが声をかけてきた。

「キャロ！　あたしたちでやっちゃうしかないよ！」
「で、でも──」
キャロは不安そうな表情を浮かべる。ファラたちを傷つけずに倒す自信がないからだ。
「しっかりしなよ！　ここであたしたちが何もしなかったら──みんな負けちゃうかもしれないんだよ？」
キャロはそれを聞いてハッとする。
「二人でやってみようよ！　なぁ～に、簡単よ。術を使っても当てなきゃいいのよ♪」
「当てなきゃいい？」
「そうそう♪　わざと、かする程度に術を放つんだよ♪」
「……………」
笑顔のアーチェを見つめて、キャロは引きつった笑みを浮かべた。
どこが簡単なんだか……。
わざとかする程度に狙うほうが、よっぽど難しいのに……。
キャロがそう思ったときだった。
「もう許さねえ！」
リッドの怒声（どせい）が響いた。

「これ以上、みんなを傷つけるな！」
ほかの伝説の勇者たちに迷惑をかけたくない――そんな思いが、リッドを突き動かしていた。
「やるなら、オレだけを狙えよ！」
そしてリッドは、ついに剣を抜いた。
「リ、リッド……」
フリオが緊張の息をもらす。ほかのみんなも、リッドの姿に注目していた。
「オレは……オレは……時代遅れの正義でもなんでも構わねえよ。一緒に旅してきたファラやキールの、そんなふざけた態度が許せねえだけだ！」
捨て身の覚悟で剣を構え、二人に向かって駆け出した。
「――いけない、リッド！」
リフィルが叫んだ。
「まさか、相討ち覚悟なのか――」
ロイドが止めようと追いかける。フリオはどうすればいいかわからず、ひとりでキョロキョロしてしまう。
「たあああああぁぁーっ！」

リッドの雄叫(おたけ)びが炸裂(さくれつ)し、二人めがけて剣がくり出される。
その瞬間――。
「《サンダーブレード》！」
空からアーチェの声が響いた。
たちまち地面に巨大な稲妻の剣が現れ、それがキールめがけて弧(こ)を描くように倒れてくる。
「くはっ！」
キールはそれに気づき脇によけようとした。しかし、そのよけた方向に――なんと、巨大な稲妻の剣は振り下ろされてきた。
「うわあああああああああっ！」
電撃で攻撃されたかのように、キールがもんどり打って倒れる。
見事な命中だった。
「ありゃりゃ～、スレスレで外したつもりだったのに……すごいねえ、一発目で当たっちゃったよ～」
「……あの、感心してる場合じゃないと思うんですけど？」
空に浮かぶアーチェの隣で、キャロはやれやれと頭を抱(かか)えそうになった。

威嚇のつもりで外したはずなのに、なんとキールはアーチェの外した方向に、自分から逃げ込んでしまったのだ。
「かわいそうに……キール、黒コゲになっちゃったかもしれないよ～」
「……あの、だからやめておこうって言ったんですけども……」
アーチェの隣で、キャロは冷や汗をかきながらつぶやいていた。

＊＊＊

「へ～、なかなかやるねェ……だが、本番はこれからだぜッ！」
キールが立ち上がった。アーチェの攻撃を受けたダメージが癒えたのか闘志を剥き出しにして、目の前のリッドを睨みつけてくる。
だが、
「お、お前……誰だ？」
リッドは目をぱちくりさせながらキールを見つめていた。
「無礼な！　僕のことを忘れたと……ん？」
キールは、隣に駆け寄ってきたファラのほうを見た。

「どうしたんだファラ？　僕の顔に、何かついているのか？」
「逃げたほうがいい――服が破けてる！」
「服が破けてる？　それがどうした――あっ？」
キールは、自分で胸元を見て驚いた。
おそらくアーチェのサンダーブレードを受けた際に、破けてしまったのだろう。胸部に走った斜めの裂け目から変化が解けてしまい、胸から下はキールではなく、なりきり服に戻ってしまっていた。
「うわああっ！　こ、これは！」
うろたえてキールは自分の服を隠したが、もう遅かった。胸から下はどうやっても隠しきれていない。
目の前のリッドには、怒りが込み上げてきていた。
「……キ、キールじゃなかったのか……許せねえ」
唸るようなリッドの口調に誘われて、フリオやロイドたちも歩み寄ってくる。その表情には騙されたことに対する怒りが満ちていた。
「ちょ、ちょっと待て！　なりきり服が破けてるなんて、聞いたこともないぞ！」
キールの表情のまま、キールもどきの男は喋った。

隣にいるファラが答える。
「たぶんね、《ルーツ》が不完全だったのよ」
「不完全？」
「即興で作ったから、強度が充分じゃなかったのかもしれないわ」
キールもどきに話しかけるファラの口調も、本物とは微妙に異なっていた。こちらも本物かどうか怪しくなってきた。
「あ、あら残念――もう時間みたいね。アハハハ……」
「そ、そうだよな。そろそろ帰らないとな。ハハハ……」
もどきたちは懸命に本人を演じ続けようとした。リッドたちに愛想笑いを浮かべながら、逃げ出す隙をうかがっている。
「逃がすもんですか！　みんな、二人を捕まえて！」
空から舞い降りてきたキャロが、偽者のキールとファラを指さした。
もはや、ここまでか――。
二人はまとっていた服を、大きな布でも取り払うようにバサッと広げた。中から現れたのは、変身を解いた仮面なりきり師コンビだった。
「やっぱり――お前たちだったか！」

フリオが、今にも飛びかからん勢いで怒鳴りつける。
「へへーんだ！　今まですっかり騙されていたくせに！　何がやっぱりだ！」
「そうよ、そうよ！　キールの服が破けてなかったら、ず～っと本物だと思ってたくせに！」
仮面なりきり師コンビは見下したかのように笑いだした。猫のような大きな耳を持つ流線形の仮面に、全身を覆い尽くすような大きなマントを羽織っている。実に不気味な格好の二人だ。彼らは正体を現すと、堂々とした態度で立ち去ろうとした。
「次はゆっくり遊んでやるよ」
「お楽しみにね♪」
「――待ちやがれ！」
フリオが呼び止めた。
「お前たちは、いったい何者なんだ！」
「何者？」
立ち去りかけた仮面なりきり師コンビが振り返る。
「何者って決まってるじゃないか。お前たちと同じなりきり師だよ」
平然と、仮面なりきり師の男が答えた。

「だったら、どこで手に入れたんだ！　そのなりきり服を！」
「さぁーて、どこかな？」
「当ててみなさいよ。フフッ」
男女の仮面なりきり師コンビがニヤついている。
フリオは、カッとなった。
「お前たちは、一体どこのどいつなんだよ！」
「……………」
フリオの言葉で、仮面なりきり師コンビから笑みが消えた。
「どこのどいつだよ！　いいから名前を言ってみろよ！」
フリオは、声をはり上げながら体が震えていた。
泥棒夫婦のポニーとクライトから聞いた話を疑っているが——でも、本当の正体を知るのがちょっと怖い。見れば、仮面なりきり師コンビは、自分たちと背格好も年齢も一緒ぐらいだ。もしかしてやっぱり、あの話は本当なのかという恐れが込み上げてくる。
それはキャロも同じだった。地面に着地できる高さまで舞い降りてきたキャロも、ホウキに跨がったまま息を殺して見守っていた。フリオが向かい合っている仮面なりきり師コンビは、本当に自分たちなのだろうか。

赤い仮面を被った彼女は、私なのか。
そしてその隣に立っている青い仮面の男は、フリオなのか――。
私たちは、未来の自分たちと対峙しているのか――。
さらに私は、未来のフリオと闘わなければならない運命なのか――。
不安が駆けめぐり、キャロの胸は張り裂けそうになっていた。
「言えっ！　お前たちの名前を！　誰なんだよ！」
フリオが、まるで泣いているみたいに訴える。
黙って聞いていた仮面なりきり師コンビは、互いに顔を見合わせ、フッと肩の力を抜くように笑った。
「オレたちの名は……」
仮面なりきり男のつぶやきに、フリオは緊張の息を呑んだ。
一瞬の間のあと、
「――フリオとキャロだ」
あっけらかんと、仮面なりきり男は答えた。
「う、嘘だ……」
フリオが首を振って、静かに笑いだす。

「嘘なもんか。オレたちの名前はフリオとキャロだ！」
今度は強調してきた。
それを聞いたとたんフリオの表情から笑みが消え、怒りへと転じた。
「だ、黙れ！　黙れ黙れ！　嘘を言うな！　お前らなんかとオレたちは違うぞ！」
かぶりを振ってフリオが声を荒らげる。
「どう違うって言うんだ？」
仮面なりきり男の問いかけに、
「違うに決まってるだろ……だってお前は〝悪フリオ〟じゃねえか！」
「わ、悪フリオ……？」
フリオの唐突な命名に、仮面なりきり男は突如にして機嫌が悪くなった。
「おいおい、もうちょっとマシな名前をつけられないのかよ。なんだ、そのイケてない名前は！」
「ヘン、バカタレがっ！　歴史の改変だとか、あちこちの『テイルズ オブ』世界から貴重品を盗んできたり――やってることは、悪いことばかりだろ！　だからお前なんか、悪フリオでいいんだよ！」
「ハン、アホタレがっ！　だとしてもセンスってものがあるだろ！　例えば神に近い

〝ゴッド・フリオ〟とかよ！　そういうカッコイイのつけてくれよ！」
「うるせェ、お前なんか悪フリオで充分だよ！　一緒にされてたまるかってんだ！」
「やかましい！　お前なんか、オレに服を奪われてスッポンポンになるくせによォ！」
「はあ？　スッポンポンになる？」
言い合いしていたフリオが、ふと我に返った。
「スッポンポンになる――どこかで聞いたことのあるフレーズだなぁ？」
首をかしげていると、
「聞いたことがあるもないも、それって――ついこの間、フリオが言ったセリフじゃないの！」
後ろからキャロがツッコミを入れた。
「あ、ああ！　そうか！　そうだったよな、忘れてたよ――っていうか、おい！　なんでお前が知ってんだよ、悪フリオ！　さては、あすなろ園で盗み聞きしてやがったな！　許せねえ！」
フリオは怒りを爆発させて叫んだ。
しかし仮面なりきり男は、そこでクククッと笑った。
「フフッ……オレが悪フリオなら、いずれお前もそうなるってことなんだよな！」

「なんだと？」
フリオの問いに、代わって仮面なりきり女が答えた。
「まだわからないの？　私たちは、あんたたちから服を奪ったなりきり師なのよ」
「はあ？　何言ってんだ！　オレたち、なりきり服を今でも着てるだろ！」
その仮面なりきり女に言い返したときだった。
「違うわよ、フリオ！　やっぱり思ったとおりよ——未来の私たちから奪ったのよ！」
後ろのキャロが、きっぱりと言い切った。
「そのとおり。いいカンしてるぜ！　お前たちは——そのうちオレたちが、この手で始末してやる」
「あんたたちは、自分たちの力のなさに絶望しながら——みっともなく死ぬのよ」
「そうさ！　『ねこにんの里』で、墓に入るのはお前たちのほうだ！」
「はあ？　ねこにんの里？　墓？　どういう意味だ！」
フリオが二人に聞き返す。
「つまり、未来を変えるのはオレたちだってことさ——んじゃ、あばよ。今日は楽しかったぜ♪」
「あ、そうそう。本物のキールとファラは、柱の陰に残しておいてあげたから。感謝し

なさいよ――じゃあね♪」

そう言い残して、仮面なりきり師コンビはドリーム2号に向かって駆けだした。

「待て！　待ちやがれ！」

フリオが追いかけようとしたが、背後でリッドたちの声がした。

「ファラ！　キール！　しっかりしろ！」

仮面なりきり女の言ったとおり、柱の陰に本物のキールとファラがいたらしい。

振り返って、そのことを確かめようとしているうちに――仮面なりきり師コンビの乗り込んだドリーム2号が、駆動音を上げて時空転移を開始した。

「……くそっ、また逃してしまったぜ！」

見送ったフリオが悔しそうにつぶやく。

心の中では、あいつらの言ったことをまだ疑おうとしていた。

でも不安がよぎる。

彼らは、未来のフリオとキャロだと――確かに言った。

もし、それが事実だとしたら――。

第六章　運命を知る冒険

＊＊＊

フリオたちの住むミナクルの町は、平和でのどかな町。
緩(ゆる)やかな川がぐるりと町を囲むように流れていて、緑と調和のとれた美しい町だった。
その川で隔(へだ)てられた森の中には、フリオたちが通(かよ)い詰める古代史研究所がある。
今朝は、そこからホワイト博士の大きな声が響いてきた。
「わしは知らん！　いや、知っていても喋(しゃべ)るわけにはいかん！」
「どうしてだよ！　ちょっとぐらい教えてくれたっていいだろ！　なっ？　なっ？」
フリオは、中庭でドリーム１号を整備していたホワイト博士に詰め寄っていた。
ホワイト博士はドリーム２号に乗って、百日後の未来からやってきた古代史研究所の所長である。
現在の自分——ブラウン博士と区別するために自らホワイト博士と名乗っているが、

その名のとおり、茶褐色の髪をしたブラウン博士に比べ、ホワイト博士は見事な白髪になっていた。
わずか百日で、どうしてそこまで変わってしまったのか。前からおかしいとは思っていたが、本人が気にしているといけないので、あえて聞かないようにしていた。
しかし今は違う。
百日後の自分たちだと名乗る〝仮面なりきり師コンビ〟が現れ、しかも自分たちのことを殺すと言ってきたのだ。
白髪のホワイト博士といい、未来の自分たちに殺されるという予言といい――百日後には何かとんでもない出来事が起こるという予感だけはする。
フリオとキャロは、自分たちの未来に何が起こるのか教えてもらおうと朝から古代史研究所を訪ねていたのだった。
「なあ、頼むよホワイト博士、教えてくれよ――百日後のオレたちは、どうなってしまうんだ？」
「うっ……そ、それは……」
眼鏡をかけた恰幅のいいホワイト博士は、言葉に詰まった。
フリオに真顔で聞かれて、気持ちはどんどん辛くなっていく。フリオの後ろではキャ

ロが複雑な表情で立っていた。声を荒らげたフリオを止めたいが、でも本心では彼女も本当のところを聞きたいのだろう。

その隣ではブラウン博士が背を向けて立っていた。彼もまた辛そうだった。未来の自分を庇いたいが、でも今のフリオの気持ちもわかる。どうしようもなくなって、背中を向けて黙っている——そんな後ろ姿だった。

「お願いだ、ホワイト博士——」

訴えるフリオの目に、うっすらと涙が滲み出していた。

「ううっ……」

すべて話してしまいそうな自分がいる。いや、喋ってしまえば楽になれるだろう。みんなで知恵を出し合って、百日後の危機を回避する——それも悪くないなと思えたりする。

だが、

「フリオ……気持ちはよくわかるが、察してくれんかのう。お前たちに未来の話を教えすぎてしまうと、それは歴史の改変をしようとしたポニーやクライト、それから百日後のお前たちと一緒になってしまう……むやみな歴史改変は、世界の消滅をも招きかねんのじゃ」

それを聞いたフリオの表情が変わった。

「……や、やっぱり、あれは……オレたちだったんだ……仮面なりきり師は、百日後のオレたち！　や、やっぱりそうだったんだな？　なあ、そのくらい教えてくれたっていいだろ！」

「ううっ……」

フリオの熱意に負けて、ホワイト博士がそこだけは頷いて認めてしまう。

一瞬の間があった。

キャロはホワイト博士の頷く姿を見て、悲しそうに俯いた。

フリオも勢いが止まった。

「そ、そんな……」

できることなら否定して欲しいという顔つきだった。それだけ重いショックを受けたのだろう。

神妙な表情でキャロが言う。

「じゃあ、私たち……百日後のあいつらの手で殺されてしまうのね……」

「……」

ホワイト博士は、そのキャロのつぶやきを耳にして何も答えられなかった。

するとと突然、またフリオが声を荒らげる。
「──あいつらなんかに、やられるもんか！　絶対に未来を変えてやる！」
「フリオ……」
キャロが顔を上げた。そんなことできるの、と言いかけた言葉を飲み込んだ。以前のフリオだったら考えられないくらいのたくましさが、そこに輝いていたからだった。
「ほ、本気なのか……」
ホワイト博士が恐る恐るフリオに訊ねた。
「ああ、本気だぜ！　何を企んでるのか知らないけど、あいつらが未来のオレたちだって言うなら食い止めなきゃならない──そうだろ？」
「……………」
ホワイト博士はとうとう何も言えなくなった。
フリオだけでなく、キャロもその気になった顔をしている。
未来は常に揺れ動いている。
自分はそのわずかな可能性を信じて、百日後の未来からここにやってきたのではないのか。
ホワイト博士は深く息をついた。

そして決心したように口を開いた。
「わかった……命をかけるお前たちには、真実を知る権利があるじゃろうな」
「ホワイト博士……」
フリオとキャロが神妙な顔をして寄ってきた。
話してみよう。何がどう変わるかわからないが——そしてリスクの多い行為だという
ことも承知の上で、あえてスレスレのところまで話してみる気になった。
ホワイト博士は深呼吸してから言った。
「実は……百日後、何者かが魔王の封印を解くのじゃ」
「魔王？」
フリオが眉間を寄せる。
「魔王の封印って、この町にあるんですか？」
キャロの問いに、ホワイト博士はゆっくりと頷き返す。
その瞬間、フリオとキャロはお互いを見た。
そして、
「も、もしかしてその封印を解くのは——百日後の私たちなんですね？」
キャロが肩をわずかに震わせて訊ねてくる。

ホワイト博士はかぶりを振った。
「それは、わしにもわからん……いや、今から話すことは、本当の真実とは異なるかもしれん……確認できておらんのじゃ……だが確かなのは、わしが乗り込んだドリーム2号から見えた光景じゃ……あれは恐ろしいものじゃった」
思い出すように、ホワイト博士は遠くを眺めてつぶやいた。
「よみがえった魔王の圧倒的な力によって……大地が消し飛ぶのが見え、ミナクルの町の家も、森も、人も……残さず、すべてが……ううっ……」
そのときを思い出したかのように、ホワイト博士は頭を抱えて苦悩し始めた。
茶褐色だった髪が真っ白になってしまったのは、その光景を目の当たりにしてしまったからなのだろうか。
フリオとキャロは言葉を失ったかのように佇んでいた。
古代史研究所の中庭に、一陣の冷たい風が吹いた。
ブラウン博士はすでに知っていたのか、ドリーム1号の本体に手をついて自分の身を支えるようにして立っていた。その背中はかなり辛そうにも見える。
やがて、フリオが静かに言った。
「このミナクルの町が、百日後に……あいつら二人は、そのことを知っているのか？」

「おそらくな……」
ホワイト博士は残念そうに答えた。
「あの二人も、辛かったじゃろう……」
「辛い？　なんでだよ！　自分たちが魔王の封印を解かなければ——そんなことにならなかったのに！　無責任だぜ！」
フリオが声を荒らげる。
それに対して、ホワイト博士は否定するように首を振った。
「違うんじゃ！　あの二人も、今のお前たちのように驚いておったんじゃ！　さらに百日後の自分たちと出会ってな——」
「なんですって！」
キャロが大きく目を見開いた。
「ま、まさか——」
「そうじゃ。今から百日後のそのまた百日後、つまり二百日後のフリオとキャロが現れたんじゃ——その二人が、レミ遺跡の地下に眠る魔王の封印を解いたという話らしいんじゃ」
「！」

また冷たい風が吹いた。
「……そ、それって……つまり二百日後の私たちが、なんらかの理由で百日後の時間に戻って、それでレミ遺跡の地下に眠る魔王を倒そうとしてたってことなの？」
キャロが信じられないという顔で聞いた。
「わしが直接、聞いたわけではないのでな……真相まではわからん。とにかく二百日後のフリオとキャロに会った百日後の二人は、そのような話を聞かされたと言っておった。そしてこのわしに、ドリーム2号に乗って脱出してくれと言い出しおったんじゃ」
「………」
フリオとキャロはその話に黙り込んでしまった。
信じたくない未来の出来事——それを回避する方法は果たしてあるのだろうか。
重苦しい雰囲気の中、フリオとキャロにできることは——。
本来の自分たちを見失わないようにすることだけだった。

＊＊＊

それからフリオたちは、百日後の自分たち——仮面なりきり師コンビを追って、様々

な時空世界を横断した。

まずは、ファンタジア世界にある『水鏡ユミルの森』の奥に位置する、エルフの集落に出かけた。

水鏡ユミルの森はハーフエルフの侵入が禁止されていた。ゆえにアーチェとリフィルの二人が出撃できなかった。

そのぶん、フリオたちは頑張ろうと思った。

今までエルフの集落への唯一の通り道は、森を守る精霊たちによって守られ侵入者を防いできたのだが、今回は何者かの企(たくら)みによって、その精霊たちが暴走し始めたのだ。

術がほとんど効(き)かないユミルの森では、直接攻撃に自信のある英雄(ヒーロー)たちの出番となった。そしてその森の中ではファンタジア世界のクレスとミント、デスティニー世界のスタン、新デスティニー世界のナナリーと出会い、彼らが闘いに加わってくれた。

「ああッ、スタン！　もォ、心配したわよ！」

森の入り口で、ルーティは声をはずませて駆け寄った。

スタンは照れくさそうに言った。

「ここで待ってれば、みんなに会えると思ってさ……あ、こっちはクレスにミント、それからナナリー。みんな、この世界に飛ばされてから知り合ったんだ」

スタンに紹介された、ファンタジア世界のクレスが挨拶（あいさつ）した。
「君たちが、噂（うわさ）のヒーロー軍団だね？　僕たちも仲間に入れてもらえるかな？」
「もちろん大歓迎よ！　でも……あれ？　ここは、ファンタジア世界よね？」
キャロが首をかしげる。
「事故で飛ばされたスタンはともかく、ナナリーさんは新デスティニー世界の人のはずじゃ……」
フリオも首をかしげた。
当のナナリーも、
「そうなんだよねェ……そこんとこが、あたしにもよくわからないのさ」
と、ため息をついた。
「もしかして、博士たちが言っていた〝時空のねじれ〟が原因かも？」
キャロは古代史研究所で聞いた仮説を口にした。
それは、英雄たちは時空のねじれによって、あらゆる世界に飛ばされているのではないかという説だ。
でも、キャロがその難しい話を続けようとするのを、ナナリーは止めた。
「ま、あれこれ考えるより――今は、狂った精霊をとっちめるのが先だろ？」

「皆さん、逃げ遅れたエルフの方々も助けてあげてくださいね」

最後にミントが優しい気遣(きづか)いを見せる。

新たな仲間の加入で、フリオたちは勇気百倍となった。

深い森の中に丸太を並べて造られた細い通路を移動しながら、アクアスピンやエッグベアなどの怪物を倒し、奥へ突き進んだ英雄たちは、暴走したすべての精霊を片づけることに成功した。

だが、ここでも仮面なりきり師コンビを捕えることはできなかった……。

そして。

次にフリオたちが訪れた世界は、エターニアのセレスティア世界『バリル城』であった。その総領主(そうりょうしゅ)の館(やかた)を占拠(せんきょ)した怪物の群(む)れは厄介(やっかい)な相手だった。何しろ倒しても倒しても、生体コピー機によって大量生産されてしまうのだ。

伝説の英雄たちは、館の中で出会った新デスティニー世界の天才科学者ハロルドの協力によって生体コピー機を停止させることに成功した。

すべての敵を倒したあと、ハロルドはキャロに言った。

「はい、おしまい！　こういう場合、お礼を言わなきゃ失礼よね？」

「いえ、別にそんな……お礼だなんて……」

「何勘違いしてるの？　ハロルド特製スーパー携帯コンピュータ『解析君二号改(かいせき)』と、私によ？」
「へ？」
高飛車(たかびしゃ)とも取れるハロルドの言動に、キャロは目が点になった。
しかし、天才の言うことなのだから間違いはないのだろう。キャロがフリオと一緒になって、ハロルドとその彼女の所持する機械に向かって丁寧(ていねい)に頭を下げたあとだった。
「たいへん、たいへんだヨー！　みんなが戦てる間にナ——別のところのセレスティアが、大事の《クレーメルケイジ》が盗まれたヨ！」
エターニア世界のメルディが駆け寄ってきた。
晶霊技師(しょうれいぎし)の卵であるメルディは幼い外見で、そして人なつっこい感じだった。
「……メ、メルディ？　わあ！　エターニア伝説のメルディかぁ!?」
本物に会えてフリオはビックリした。だが今までの英雄に会えたときの感動とは違って、珍しいものでも見るような表情になっていた。
「メルディ——クレーメルケイジ取り返したいヨー」
幼さを感じさせる言葉づかいで、メルディが訴えてくる。どうやら大事なものらしい。
キャロは、ハッと気づいた。

「あっ！　まさか、こっちはオトリだったの？」

怪物の群れに気を取られている隙に、あの仮面なりきり師コンビは、また『テイルズ オブ』世界の貴重品を盗んでいったというのか。

ミナクルの町の保安官事務所に捕らえられているポニーとクライトの自供によると、仮面なりきり師コンビは、レミ遺跡の地下に眠る魔王の封印を解く〝鍵〟を集めているという。そしてその鍵は、すべての『テイルズ オブ』世界に存在する貴重品の数々だという。

この話が真実なら、仮面なりきり師コンビは魔王を復活させるための鍵のひとつを——またもや手に入れたということになる。

「あんたも来るといいわ。そのナントカは必ず取り返すから！」

「はいナ！」

ハロルドに言われて、メルディは素直に返事した。

こうして、フリオたちの仲間は続々と集結し始めていた。それなのに仮面なりきり師コンビには、毎回のごとくうまく逃げられていた。

そんな悔しい思いが募る、ある日のことだった。

フリオたちは訪れた『ねこにんの里』で、彼らの残していったものに触れる機会を得

ることになった。

　そのねこにんの里は、フリオたちが奪い返したドリーム1号の移動記録の中にルートが残されていたのだ。

「たぶん、あいつらが行ったんだろうな……」

　古代史研究所の中庭に安置されたドリーム1号の中で、たまたま移動先の履歴を確認し直していたキャロが見つけて、それをフリオに報告した。

「特に今、そのねこにんの里では事件が発生(はっせい)していないけど……ねえフリオ、行ってみない？」

「えっ、ねこにんの里にか？」

「あいつら――いえ、百日後の私たちについて、何か手がかりが得られるかもしれないから」

「そうだなぁ……事件解決以外でドリーム号を使うのは、博士たちから禁じられてるけど……でも、百日後の魔王の復活も立派な事件――いや、大事件だからな。ちょっとだけなら博士たちも特別に許してくれるよ」

「うん、行こうフリオ！」

　賛成してもらえたことが嬉(うれ)しかったのか、キャロはフリオの手を取ってドリーム1号

へと引っぱる。

「お、おい、キャロ――」

キャロのいきなりの行動に、フリオはちょっぴり照れた。

＊＊＊

「へ～！　ここが、ねこにんの里か～。なんだか幸せだな～♪」

「ちょっと、フリオ！　遊びに来たんじゃないのよ」

時空転移によってあっという間に着いたねこにんの里は、ミナクルの町以上にのどかで素朴（そぼく）な村だった。

妙にのんびりしていて緊張感がない。

屋根に猫の耳をつけた小さな家が点在し、色とりどりの猫の着ぐるみをまとった住民たちが思い思いの場所で日向（ひなた）ぼっこをしていて、なんだかそれに誘われて自分も時間を忘れて眠ってしまいそうな不思議な所である。

そんなねこにんの里で、

「おー、お待ちしてましたにゃ！」

「わぁっ！　あんた誰っ？」
いきなり住民のひとりに話しかけられ、フリオは飛び上がって驚いた。
「ねこにんの里の、ねこにん長老ですにゃ」
「は、はあ……長老……」
よく見ると、猫の着ぐるみから出ているのは、おじいさんの顔である。
しかし長老と言われても、格好からして威厳があるんだかないんだかよくわからない。
「また今度も、お墓参りにいらしたのですにゃ？」
「えっ？」
長老からそう言われた瞬間、フリオとキャロはこの里に来た目的を思い出した。
キャロがさっそく訊ねる。
「お墓参りって、誰のですか？」
「はてにゃ？　誰のお墓かと申されても、ご自身がよくご存知のはずですにゃ？」
「――私たちが？　よく知ってる？」
キャロはハッとして、フリオを見た。
「あいつらだ――仮面を被った奴らのことだろ？」
フリオが確信して聞くと、長老はまた不思議そうに首をかしげた。

「はてにゃ？　あなたがたは、その方たちとは違うんですにゃ？」
「あ、悪ィ――オレたちとは違うんだよ」
「そうでしたかにゃ。では、兄弟か親戚の方ですにゃ？」
一瞬、答えに詰まったが、キャロがすかさず話を合わせる。
「ま、まあ、そんなトコね――ねえ長老さま。実は私たち、ここに初めて来たものだからよくわからなくて……あの～、よかったらそのお墓に案内してくれませんか？」
「はいですにゃ。こちらですにゃ」
と言って、あっさり長老は案内してくれた。
フリオとキャロは頷き合い、のんびりした里の中を歩む長老のあとを追った。そして小声で話しだす。
「ここに墓参りに来てる二人って、百日後の私たちよね？」
「ああ……たぶん、そうだろうな」
歩きながらフリオが小声で答える。
「でも、変よねぇ……」
「ああ……」
二人は思い返していた。

先日、仮面なりきり師コンビが言った言葉を――。

「お前たちは――オレたちが、この手で始末してやる！」
「あんたたちは、自分たちの力のなさに絶望しながら――みっともなく死ぬのよ！」
「そうさ！　ねこにんの里で、墓に入るのはお前たちのほうだ！」

――ねこにんの里で墓に入るのは、自分たち。
つまり、まだ死んでもいないのに墓がすでに用意されているというのか。
しかも、なぜか――ねこにんの里で。
「……違うよね、あれはただの脅(おど)しよね？」
「当たり前だろ」
「それなら、誰のお墓なのかしら？」
「う～ん……あいつらが、墓参りに来るほどの相手といったら……未来のブラウン博士は、ホワイト博士になってオレたちの時代に戻ってきてるから、ほかの誰かかもしれないな……」
「ミナクルの町で、ほかに私たちが親しい人といったら……」

キャロが歩きながら俯いて、声を震わせる。
「よせよ、縁起でもないこと考えるなよ」
「だって、百日後の未来から脱出したホワイト博士は、ミナクルの町が吹き飛ばされたところを見たって言うのよ」
声の震えが、さらに大きくなった。
「だからよせよ、そういうことを考えるのは」
フリオの声に苛立ちが滲んだ。
キャロは小さな声で「ごめん……」とだけ答えた。そして二人は、押し黙ったまま歩いた。
やがて、
「着きましたですにゃ」
ねこにんの里の長老が、小高い丘の上まで来て言った。
丘の頂には一本の大きな樹木があり、その根の木陰のあたりに、二つの墓標が並んでいるのが見えた。フリオたちは草原の丘を木のほうへと歩きながら、すがすがしい気分に包まれた。風も陽の光も心地よくて、また幸せな気持ちになって眠くなる。
そして頂にたどり着いたとき、

「うわぁ〜、見晴らしがい……なっ！　なんだこれっ!?」

突然、フリオは眼下に広がる光景を目の当たりにして引きつった表情になった。

それはフリオだけでなくキャロも同じだった。

二人とも墓標に近づくことを忘れてしまったかのように、その悲惨な光景に目を奪われていた。

「ひ、ひどい……」

やっとキャロが声を出した。

樹木は枯れ、草原は焼け焦げて黒ずんだ大地をさらし、デコボコになっていた。

何かが激しく闘った跡を思わせる荒れ地だったのだ。

おそらく炎や雷など、あらゆる巨大な術が激しくぶつかり合った跡なのだろう。

自然の力でそうなったとは思えない、過剰な術合戦の痕跡がいたるところにあった。とても自然の力でそうなったとは思えない、

「……こ、こりゃスゲェ……ものスゲェ〜闘いがここであったとしか思えないぞっ！」

フリオが、丘の上からの眺めに釘づけになりながら声を高ぶらせたときだった。

「あれは……恐ろしい闘いでしたにゃ……」

長老がそのときのことを思い出すように語り始めた。

「別の世界から現れた魔王が、この里を襲ってきたのですにゃ……するとそのときです

にゃ、あなたがたのご親戚に当たる英雄さまが現れ、里のみんなを助けてくださったのですにゃ」
「魔王がって……まさか」
あのレミ遺跡の地下に眠るという、魔王のことだろうか。フリオは隣に立つキャロを見た。彼女も驚いた顔をしていた。
長老は、大きな樹木の下に並ぶ二つの墓標に向かってお祈りした。
「ありがたかったですにゃ……助かったですにゃ。お二人のおかげで里のみんな、無事だったですにゃ」
「つまり、死んだってこと？　魔王と闘って？」
キャロが聞いた。
長老は振り返って、こっくりと頷いた。
「里のみんなの命の恩人ですにゃ。お二人はこの丘の先で、魔王と相討ちになったですにゃ」
「！」
フリオとキャロに衝撃が走った。
——魔王と相討ち。

だから丘の上から広がる大地がこんなにも荒れ果てたのだ。
どこかの世界の英雄と魔王が相討ちになるほど、ここで激しく闘ったのか——。
ねこにんの里を守るために。
そしてその英雄は、長老の話だとフリオとキャロの親戚だという。
わけがわからない。
「いったい、何がどうなってるんだ？」
フリオはかぶりを振りながら、長老の前に立つ墓標に近づいた。だが目の前まで来て、墓標に刻まれた文字を目にしたとたん、凍りついた。
「こ、これは……っ！」
「どうしたの？」
キャロが後ろから近づいてくる。フリオと一緒になって墓標を見つめると、すぐさま息を呑んだ。
墓標に刻まれていたのは——
『スゲェ～が口癖の英雄、ここに眠る』
『明日は今日より大変が口癖の英雄、ここに眠る』

しばらく声が出なかった。何度も何度も、見間違いじゃないかと確かめた。
だが、墓標に刻まれた文字に間違いはなかった。
「なあ、キャロ……これって、オレたちのことなのか……？」
「……みたいね」
「ということは、仮面なりきり師野郎は……ここで死んだのか？」
「いつ？」
「……」
フリオは答えられなくなった。
いまだドリーム2号で時空を転移し続ける彼らに対して、その問いは愚問のように思えた。
しかし、ひとつだけはっきりしているのは――彼らが再び、魔王の封印を解こうとしているということ。
それは再戦を意味しているのか。
今度こそ、相討ちではなく勝利するという決意なのか。
「自分で自分の墓参りするって、妙な気持ちだろうなあ……」

墓標を見下ろしながらフリオがつぶやいたときである。
「お二人はよくお墓参りに来る、とても優しい人たちですにゃ」
長老が感心したように言った。
「英雄さまも、たくさんの親戚の方々が墓参りに来られて寂しくないですにゃ」
「たくさんの親戚？」
キャロが聞いた。
「そうですにゃ。よくお墓参りに来るお二人も、英雄さまのご親戚とおっしゃられてましたですにゃ」
「英雄の……親戚？」
そこで、キャロが合点のいったような顔でフリオに話した。
「わかったわ！　このお墓は、百日後の私たちじゃなくて――私たちから見て、二百日後の私たちかもしれないわ！」
「百日後が、二百日後？　おい、キャロ。何ワケわかんないこと言ってるんだよ。あ～あ！　オレ、もう頭の中がグチャグチャになるぞぉ～っ！」
フリオはムシャクシャして、自分で頭を掻きむしった。

＊＊＊

「つまり、歴史が無限ループの状態に入っているってことなのね――」
古代史研究所の書斎で、リフィルが腕を組みながら頷いた。
目の前にはブラウン博士とホワイト博士、そしてファンタジア世界のクラース、エターニア世界のキール、新デスティニー世界のハロルドたちがいる。
「まず最初のフリオとキャロがレミ遺跡の地下に眠る魔王の存在に気づき、鍵を集めた。そして封印を解き、魔王と闘ったが敗北した――それでドリーム号に乗って百日前の過去に飛び、今から百日後のフリオとキャロに警告を与えた」
「ああ、そうじゃ。今から百日後のフリオとキャロは、未来の――確か二百日後の自分たちと出会ったと言っておった」
ホワイト博士が神妙な顔をして答える。
「じゃあ、仮面なりきり師になったのは、その二百日後か百日後のどちらかのフリオとキャロということになるわね？」
「おそらく、そう見るのが正しいだろう」

クラースが同意した。

「仮に今から二百日後のフリオとキャロだと仮定して、彼らはなぜか、過去の時間に戻り、もう一度魔王の封印を解き、チャレンジした――だけど、もっと最悪な結果を招いた。魔王の力は強大で、ミナクルの町を消し去ってしまった」

リフィルの説明に頷いていたホワイト博士が口を開く。

「そうじゃ……あのとき、わしにドリーム2号に乗ってここから脱出しろと言ってきたのは、今から二百日後のフリオとキャロだったかもしれん」

「そうなると二百日後のフリオとキャロは、もしかしたらまた自分たちが負けるかもしれないと予感していたことになるわね。負けるかもしれない恐れを抱いていながら、どうして……」

リフィルが疑問を抱くように唸る。

「……これは推測だが、二百日後のフリオとキャロが過去に戻って魔王を倒さないと、百日後のフリオとキャロがまた魔王の封印を解いて敗北してしまうと、恐れたからではないのかな」

鍔の広い帽子を深くかぶり、壁にもたれかかっていたクラースが口を挟んだ。

「なるほど。歴史を繰り返さないため、その手前の過去で食い止めようとしたわけね。

あの子たちが考えそうなことだけど、少し早まったわね。ミナクルの町が消し飛んだのは、歴史を無理に変えようとした反動なのかもしれないのに……」
「同感だ。このままいくと歴史のループなどという生易しい（なまやさ）ものでは済まなくなるかもしれない」
「そう、少なからず私たちの世界にも影響を与えちゃうかもね」
クラースの話を受けて、ハロルドが言った。
「私たちがこの世界にいて、百日後に魔王の復活に立ち会ってしまったら、帰れるものも帰れなくなってしまうから」
キールがそれを受けた。
「ここで僕の考えを説明させてもらいますが、難しく考える必要ないと思います。帰れない未来があるとするなら、どちらかが消えるだけ。例えばブラウン博士に対するホワイト博士のように、フリオとキャロも未来の自分を倒すだけです」
「それで連鎖が断ち切れる？」
「理論的には可能でしょう」
リフィルは深い息をついた。
「とにかく今のフリオとキャロに、魔王の封印を解かせないようにするだけね」

「だったら鍵はどうする？」
クラースが訊ねる。
「もちろん集めさせないわ――」
「では奪い返すんだな？」
「何を言ってるのよ、クラース。すべて奪い返さないとダメなのよ。私たちが元の世界に戻れないわ」
「ええ、ハロルドの言うとおりね。正常な状態に戻すには、彼らがそれぞれの世界から奪っていった貴重品を元に戻してもらうしかないわ。そのために、あの二人との闘いが避けられなくなっても――」
リフィルが覚悟を決めたように言い直す。
「しかし、簡単に渡すでしょうか？　彼らが」
「よく聞きなさいよ、キール――だから、これは避けられない闘いなの。歴史を元に戻すためのね！」
ハロルドが言った瞬間、場の空気が重くなる。
フリオとキャロが、現在と未来に分かれて闘う――。
そんな場面を見たくないブラウン博士とホワイト博士は、重苦しい表情に包まれてい

た。

両博士の気持ちを察してか、リフィルたちも言葉が続かなくなる。
だが、ハロルドは違った。
「未来の自分と闘うなんて、ホント残酷な話よね……」
と、わざとおどけてみせる。
「ほんとね――」
リフィルだけがつぶやいた。

＊＊＊

「あの二人とのお話し合いは、無理なのでしょうか……？」
フィリアが哀しそうにつぶやいた。
そこはミナクルの町の、さくら食堂の店内。
丸テーブルの席に着いて、お茶を飲み終えたフィリアが遠くを見つめて言ったのである。
隣の席にはカイルが座っていた。

「ねえ、あの二人って……フリオとキャロが追っかけてる二人のこと？」
「はい……そうですわ、カイルさん」
「う～ん、難しいことはよくわからないけど、でもあの二人はフリオとキャロの敵で、しかも悪党だっていうんだよ？」
フィリアは眼鏡の奥の瞼を閉じ、
「それはわかっていますが、争わずに解決する方法はないものかと……」
ストレイライズ神殿の司祭らしく、平和的な解決を心から望んでいる。
そのときだった。
「フン、相変わらず甘いな。自らの前に立ちはだかるものは、すべて敵……その敵を理解する必要があるとすれば、それは倒すため――ほかの理由はない！」
「リオンさん……」
隣のテーブルに着いていたリオンが、相手を威圧するような鋭い目をこちらに向けていた。
実は『転生の門』でフリオたちと出会ったリオンは、このミナクルの町に降り立っていたのだ。
カイルはそのとき、ジューダスも一緒に行こうと誘ったのだが、彼には断られてしま

った。

「僕は一足先に元の世界に戻っている。カイル、お前とはそこで出会うだろう……安心しろ。僕もこの転生の門で受けた借りは、お前が元の世界に戻ってくればきっちり返してやる……だから死なずに、無事に戻ってこい」

ジューダスはカイルにそう告げて、転生の門からひとり消え去った。

おそらく新デスティニー伝説の世界に戻っていったのだろう。

カイルとロニがその世界に戻れば、ジューダスと会った記憶は消え、また一からやり直すことになる。カイルはそのときにジューダスのことを一切覚えていないのは残念だけど——しかし再び会えるのだからと、納得して見送ることにした。

——待っててよ、ジューダス。

こっちの世界のことを片づけたら、必ず自分たちの世界に戻るから——。

心の中でそう誓ったのだった。

そしてミナクルの町に戻ってきてから、カイルはやたらリオンと目が合うようになった。

特に会話らしい会話はないのだけど、なぜか視線がよく合う。

気のせいかリオンのまなざしが、時折ジューダスのそれに似ているような気もしてい

た。
そしてこのときも、リオンはカイルのことを意識しているかのように感じられたのだ。
「フッ、世間知らずのおめでたい女には、一生わからないことだろうがな……」
リオンはため息をつき、席を立った。
「リ、リオンさん……」
フィリアが呼び止めようとしたが、彼は何も答えなかった。
ただ立ち去るとき、またちらりとカイルのことを見て、さくら食堂の外へと出ていったのだった。
「………」
カイルは見送ったあと、フィリアの哀しそうな声を耳にした。
「……また、リオンさんに叱(しか)られてしまいましたね……やはり、わたくしは甘いのでしょうか？」
すると、別のテーブルで食事中だったスタンが声をかけてきた。
「そんなことないさ、フィリア」
「スタンさん……」
「気にするなよ。そういうのはたぶん、優しいって言うんだよ」

と言って、スタンは眩しい笑顔を見せた。
フィリアも、ほっとしたような笑みになって頷き返す。
続いてカイルが、励ましの言葉を口にしようとしたときだった。
後ろから長身の男が近づいてきた。
「あ、あのう……」
「……は、はい？　どうかなさいましたか？」
フィリアは、カイルの後ろに近づいてきた青年を見上げて訊ねる。
「えーっと、お名前は確か……」
「あ、うっ……と、え～っと……あの……オ、オレの名前は……ロ、ロニって言います！」
らしくない緊張した面持ちで、ロニは挨拶した。
「どうしたの、ロニ？　なんか変な汗かいてるよ？」
振り向いたカイルがきょとんとした。すると、
「カイル――」
「何、急に怖い顔して？」
「ちょっと来い――」

「うわっ！　な、なんだよ!?」
ロニがカイルの腕を引っぱって、フィリアのいるテーブルから引き離した。そして小声でカイルに言った。
「いいか、カイル――あの四英雄のフィリアさんが目の前にいて、しかも若いんだぞ？」
「う、うん。そうだね……すごく若くて綺麗（きれい）だよね」
「だろ？　今この瞬間の幸せ！」
カイルに話すロニのテンションが、どんどん上がっていく。
「なあなあ、カイル！　お前もそう思うだろ？　あのフィリアさんが、すぐ目の前にいるんだぞ！　これはもう奇跡だぞ！」
「……ロニ、ホントにどうしたの？　大丈夫？」
だんだんカイルは心配になってくる。
しかしロニの盛り上がった気持ちは止まらない。
「ん～、わかってないなカイルは！　まあ子供だから仕方（しかた）ないか！」
「ロニ！　オレは子供じゃないってば！」
「あ～、あの上品な口調！」

「はあ～、聞いてないよ……」
「聞いたかよ、カイル！　このオレに、どうかなさいましたかだってよ！　ふははは
は！　フィリアさんが、そんなお優しい言葉をかけてくださるなんて！　あの優雅な物腰（ものごし）、そして知的な眼鏡！　やっぱり噂どおりだ、素敵（すてき）だぜ！」
「あら、スペアでよろしければ差し上げますわよ」
「へっ？」
ロニが後ろを見ると、フィリアが席を立ってすぐ近くまで来ていた。
「げげっ！　フ、フィリアさん！」
ロニの心臓が止まった——いや、止まりそうになった。
どうやら、いつの間にか自分が大声で喋っていたことに気づいてなかったらしい。そばまで歩み寄ってきたフィリアがにっこりして、スペアの眼鏡を差し出してくれる。
「はい、どうぞ」
信じられない出来事が起きた。
「うげげっ！　い、いいんですか？？」
「ええ、構いませんわ」
ごくっと息を呑んで、ロニは恐る恐るフィリアの手のひらからスペアの眼鏡をつまみ

取った。
大事そうにそ〜っと、そ〜っと手にする。
ロニの手の中で、キラキラとその眼鏡が輝いている。どうせ元の世界に戻ったら、すべてあっさり忘れてしまうことなのだが、このときばかりはロニもあこがれの人と会話している幸せで胸がいっぱいだった。
「あ、ああ〜……ありがとうございます！　ご恩は一生忘れません！　このロニ、これからはこの眼鏡をかけたまま冒険に出かけ……あ、いやいや、そんなもったいない！　これからは、この眼鏡を後生大事（ごしょうだいじ）にお守りとして、肌身離さず……」
「ねえ、ロニ――フィリアさん、もう行っちゃったよ？」
カイルの声がした。
酔いしれていたロニは、ぱっちりと目を開けた。
「……へっ？」
我に返った。ロニが振り返ってみると、フィリアはさくら食堂から出ていったあとだった。
「ああ、フィリアさん……」
感謝の気持ちで、店の出口を見つめたときだった。

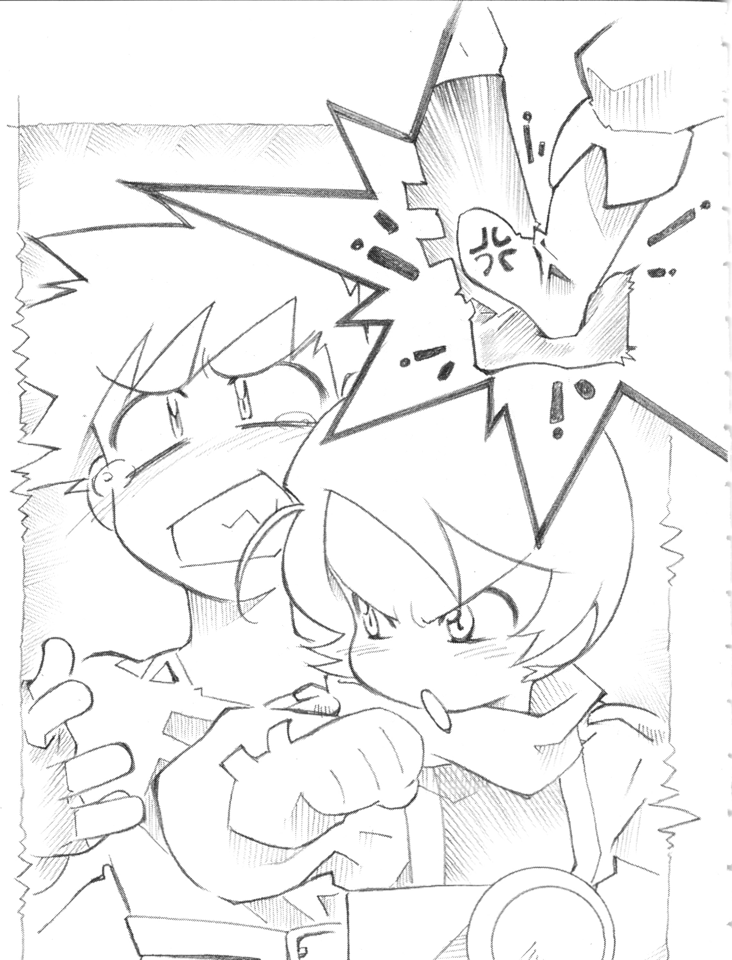
「ふーん、これがロニのナンパ術ってやつなんだ？」
「なっ！　カイル！　フィリアさんに対してナンパなど！　なんて失礼なことを言ってるんだ！」
ロニは取り繕おうとしたが、
「ふーん、そういうふうにすればいいんだ～。好きな人から大事なものをひとつもらえばいいんだね？　よし、わかったよ！　オレも、リアラから何かもらってくる！」
カイルはひとり納得して、さくら食堂から飛び出していった。
「あ、待てよカイル！　勘違いするなって！　あ～、カイルのやつ、またひとつ変なことを覚えてしまいやがったぜ～っ！」
慌ててロニもカイルを追っかけて、さくら食堂から出ていった。
その直後、店内に残ったスタンたちの『テイルズ オブ』世界の英雄たちが、ドッと盛り上がるように笑った。

＊＊＊

「なあ、コレット……お前まで一緒についてきて、ホントによかったのか？」

ミナクルの町の、夕焼け橋の上でロイドが言った。橋の上で欄干（らんかん）にもたれている。隣ではコレットが寄り添うように立って、暮れ始めた空を見上げていた。
静かなひとときだった。
そんなところに、フリオとキャロが通りがかった。
キャロはハッとして、すぐに立ち止まった。
フリオも二人に気がついた。
「あ、ロイドとコレットだ——おお——っ……うぐっ！」
キャロは、二人に声をかけようとしたフリオの口をいきなり塞いだ。
「二人ともいいムードじゃないィ〜。ちょっとだけ見ていきましょうよ！」
「キ、キャロ……」
乙女のような顔になって二人を眺めるキャロに、フリオは「まいったな、またかよ〜」という困った顔をする。
しばらくして——。
黙って夕焼けになりかけた空を見上げていたコレットが、隣のロイドに返事した。
「ロイド……全然、大丈夫だよ」
「コレット……」

「私はね、今までと同じように……これからもずっとずーっと、ロイドの横を一緒に歩けたらいいなって思ってるんだ……だからね、一緒に来ちゃった。エヘヘッ」
コレットの恥ずかしそうな笑みに、ロイドもつられる。
なんだか、あたたかさを感じる——そんな表情になっていく。
「……そっか、わかった！」
ロイドは宣言した。
「じゃあオレたちは、ずっとずーっと一緒だ！」
「うん！」
コレットも明るく答える。
二人が見つめ合う。
空はすでに茜色に染まっている。
素晴らしい光景だった。
橋の途中で立ち止まったフリオとキャロは、まったくもってあてられていた。
「はあ～……キャロに、コレットの素直さの十分の一でもあればなぁ……」
思わずフリオがため息をついたときだった。
「イ、イテテ！　足踏んでるって、キャロ！」



隣に立っていたキャロが、遠慮なくフリオの足を踏んづけていた。しかもグリグリと足首を回して、メリ込ませるかのように。

「どうしてあんたは、せっかくのいいシーンをブチ壊しにするのよぉ～っ！」

キャロの怒りが、さらに踏んづける力となっていく。

「イテテテ！　わ、悪かったたって！」

フリオが悲鳴を上げていると、後ろからクレスたちが近づいてきた。

「やあ、フリオ――どうしたんだ？」

「あ、クレスさん！」

キャロが振り返って、サッとフリオから足を引いた。

「ふ～、助かった～」

命拾いしたような声だった。

フリオが振り返ると――クレス、ミント、アーチェ、チェスターたちの姿が見えた。

彼らも、仮面なりきり師たちのことで心配しているのだろう。

「まさしく『明日は今日より大変』に、なっちゃったね……」

と、神妙な顔でクレスが切りだした。

「私たちでお役に立てることなら、なんでもおっしゃってくださいね」

続いて、ミントも優しく声をかけてくれる。
キャロはにっこりして、
「ありがとう。でも私たちなら、へっちゃらよ～」
と、明るく片手で力こぶをつくるような真似をしてみせた。
フリオも頷いたが、覚悟を決めた表情で答える。
「シスターポーラが、いつも言うんだ……」
珍しく真剣な声だった。
「辛いことや哀しいこと、それは『もっと成長しなさい』って、神様がくれた祝福なんだって」
「そう、だから『明日は今日より大変』なら、それは幸せなことなのよ──」
キャロもつけ加えた。
クレスたちは感心して聞いていた。
そんな中で、
「でもさあ、あすなろ園の神様って……少しへそ曲がりだよね？」
アーチェがちょっと意地悪な質問をした。
キャロはそれを聞いたとたん、クスッと笑いだした。

「そうそう！　実を言うとね――私も、前からそう思ってたの！」
「あ、やっぱり？」
「うん！　アハハハ！」
キャロが笑いだし、それにつられてフリオやクレスたちも笑いだした。
やがてロイドとコレットも近寄ってきて、そこに楽しそうな輪が出来上がっていく。
その光景を離れた場所から見ていたのは、マリーとルーティだった。
「ここは、いい所だな……ルーティ」
くつろいだ笑みでマリーが言った。
隣のルーティはしんみりした表情になっていた。
「なんだか、私が育った孤児院の……明るい雰囲気を思い出すよ……」
故郷の孤児院を再建するため――レンズハンターとして荒稼ぎ(あらかせ)するルーティが見せた、寂(さび)しそうな横顔だった。
マリーはそのことに触れず、微笑んでみせた。
「そっか……こんな平和な町が、いくつもの世界の存亡をかけた闘いをする最前線基地だなんて、私にも信じられないな――」
と、空を見上げてつぶやいた。

本当に穏(おだ)やかで、嘘みたいな光景だった。
空は燃えるように赤く染まって、美しかった。

第七章　争奪戦の冒険

＊＊＊

「それでオレ様に化けたつもりか？　ぜんぜん気品がねえんだよ、クソ野郎！」
赤いウェーブのかかった長い髪を垂らし、キザっぽく構えたゼロスが、もうひとりのゼロスに食ってかかった。
「シッポを出しやがったな、クソ野郎！　オレ様には、元々気品なんてないんだよ！」
「な、なんだと!?　クソ野郎！」
「てめえ！　誰に断ってオレ様のマネしてんだ、コピー野郎！」
そこはシンフォニア世界で、多くの人々を収容した忌まわしき『牧場』の中だった。
冷たい鉄格子の牢屋が並んだそこに降り立ってから、フリオたちは呆気に取られていた。なんと牧場の中には、たくさんのゼロスとしいなが放し飼いにされて――いや、争い合っていたのだ。

「何すンのさ！　このニセモノがっ！」
「ホンモノに向かって、その台詞（セリフ）――許さないよ！」
薄紫（うすむらさき）の忍び装束（しょうぞく）をまとったしいなが、手にした符（ふ）をしいなにくり出す。それをしいなは避けた。
二人のしいなが壮絶（そうぜつ）にぶつかり合う。
「《生吸符（せいきゅうふ）》かい？　残念だけど見切ったよ！」
「だったら、これさ――《精吸符（しょうきゅうふ）》！」
再び、しいなが符をくり出す。
するとしいなは宙空で回転して、その攻撃をかわす。
そんな闘いが、牧場のフロアのあちこちで繰（く）り広（ひろ）げられているのだ。さすがに目が回りそうな光景である。
「ああ……な、何がなんだか、さっぱりわかんないぞ！」
フリオがあちこちで繰り広げられている闘いを見て、すでに目を回しそうになっている。
「もう、しっかりしなさいよフリオ！　ブラウン博士とホワイト博士から聞いてきたでしょ？　生体コピー機というので、ゼロスとしいなが大量生産されちゃってるのよ――

本物はひとりしかいないわ！」
キャロが言ったとたん、目の前にひとりのしいなが走り寄ってくる。
「信じて！　あたしがホンモノのしいなだよ！」
「えっ？　そ、そう言われても――」
突然の訴えにキャロが戸惑っていると、フリオのほうにも、もうひとりのゼロスが駆け寄ってきた。
「よく見ろ、騙されるな！　オレ様がホンモノのゼロス！」
親指を立てて自分を示したのだが、
「……なわけ、ねえだろ！」
突然、剣を振りかざしてゼロスが襲いかかってきた。
「うわっ！」
フリオが慌てて脇に逃げる。その後ろからスタンが飛び出し、振り下ろされたゼロスの剣を自分の剣を振って受け止める。カキンと、刃のかち合う音が響く。
「オレ様の剣を受け止めるなんざ、なかなかやるじゃねえか？」
「ニセモノなら、ニセモノらしく――早く正体を現せ！」
「はあ？　正体もクソも、ねえってんだよ――オレ様は、オレ様だ！」

ゼロスが一旦剣を引いて、またくり出す。
見切っていたのか、それを再び素早く剣でスタンが受け止める。
「くそっ！　こっちにも来たぞ！」
「ひゃああ～、どうするのぉ～？」
「どうするったって、どうするんだぁ⁉」
「やらなきゃ、こっちがやられるぞ！」
伝説の英雄たちはなりゆきで、闘いの輪の中に巻き込まれていく。
「な、なんだ……本当にどうなっちゃってるんだ？」
ゼロスの攻撃から逃げたフリオは、さらに周りから伝説の英雄たちを取り囲むようにして集まってくるゼロスとしいなの群れに、目を白黒させた。
「でひゃひゃひゃひゃ！　周りを見りゃあ、わかるでしょーよ！　生体コピー機よ！どこかにオレ様たちを複製している装置があるってわけよ！」
「て、てめえら！　ドサクサに紛れて、いい加減なことぬかすんじゃねえ！」
「それはこっちのセリフだ！　観念して正体を現せ、コピー野郎！」
集まってきたたくさんのゼロスがまたまた言い争って、剣で闘い始める。ゼロス同士に敵も味方もない。とにかくごった煮の状態だ。

「おいおいおい、こりゃあキリねーぞ。さすがのオレ様もマズいんじゃねえの？」
「この悪夢みたいな状況、いったい、どうしたもんかねぇ」
中には、困った表情を浮かべているゼロスとしいなもいた。闘いの輪から離れた場所で、腕を組んで見守っている。彼らは呆れていたというか、怒っていた。
「冗談じゃねーぞ！　まったく誰だ!?　こんな面倒なモン、置きやがったのは！」
すると、
「なあ……ぶっ壊そうぜ！　オレたちも手伝うから！」
フリオは、その冷静そうな様子のゼロスに近寄って話しかけた。もしかしたら、本物かもしれないと思ったからだ。そのゼロスの隣にいた本物らしいしいなも、フリオのほうににこにこした顔で寄ってきた。
「そいつはありがたいね。じゃ、善は急げだよ！」
しいなは牧場の奥に導こうとした。
こうしてフリオたちと本物らしいゼロスとしいなは手を組み、施設の中に隠された生体コピー機の発見を急いだ。
「先に行け！　ここはオレたちに任せろ！」
別のゼロスたちと闘っているロイドやリッドたちが叫ぶ。

伝説の英雄たちは、次々に襲いかかってくるゼロスとしいなの群(む)れを相手にして闘ってくれた。そうすることで、フリオたちの活路(かつろ)が開けた。

「悪(わり)ィ！　頼んだぜ！」

「おう！」

フリオとキャロ、そして本物らしいゼロスとしいなは、施設のさらに奥へと向かった。

そして大勢の二人の複製が言い争う騒がしい中で、それらしい機械が鎮座(ちんざ)する部屋を見つけることができた。

しかし、その部屋の中にも――本物らしいゼロスとしいなが二人いたのだ。

「フリオ!!　騙(だま)されないで！　こっちがホンモノのゼロスとしいなだよ！」

「えッ！」

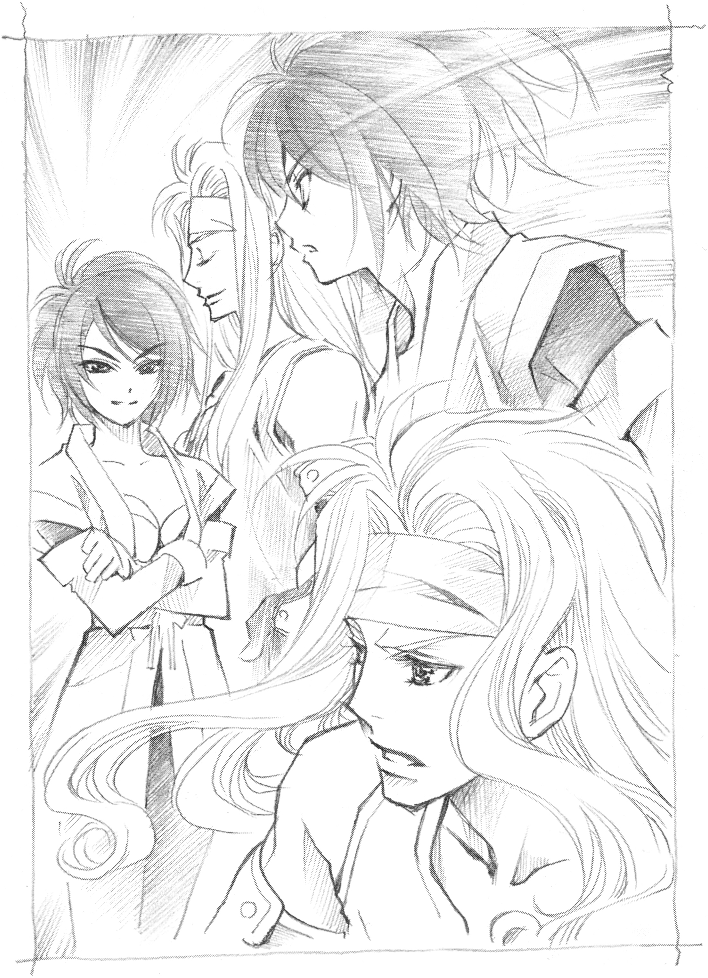
自分の名前を呼ばれたフリオが、戸惑いを露(あら)わにする。不思議なもので名前を呼ばれると、そっちのほうが本物に思えてくる。

するとフリオの隣に立っていた、もうひとりのしいなが叫んだ。

「ニセモノが！　この期(ご)に及(およ)んで……な、なに、今さらほざいてんのサ！」

「ホンモノはオレ様たちのほうだ。よく見ろ、キャロ！」

一緒にその部屋までついてきたしいなとゼロスが、フリオたちのほうを向いて訴える。



またまた迷いが生じる。
「そ、そんなこと言われても……」
とうとうキャロも判断がつかなくなってしまっている。
生体コピー機の部屋にいたゼロスは、恐れ入ったように言う。
「困るよなあ、こんなに似てちゃ……たばかられたのも無理ないぜ」
「チッ、このままじゃラチが明かないねェ、この際……」
一緒に行動してきたしいなが身構える。
一触即発の空気が高まる。
「こ、この際?」
フリオは、四人のゼロスとしいなに注目されて緊張した。それもそのはず。一緒についてきたしいなは、とんでもないことを言い出したのだ。
「フリオとキャロに、白黒決めてもらいましょうか――」
と、さらりと言ってのけた。
「オ、オレに!?」
「名案だねぇ、ニセモノにしては」
「オレ様は異存ねえぜ」

二人のゼロスが同時に答えた。
「で、でも……もし間違えたら？」
キャロの声が震える。
しかし二人のゼロスは、まるでゲームでも楽しんでいるかのように不敵な笑みを浮かべながら促した。
「だったら、残ったほうも倒せばいいだけだろ？　さあ、ニセモノを指さしてくれ！」
もう決めたと言わんばかりに、四人のゼロスとしいなが見つめてくる。
「………」
フリオは焦った。自分がそんな大役を押しつけられるとは思ってもみなかった——しかし、ここで自分が決断しないと状況は平行線のままだ。本物のゼロスとしいなを、助けることもできない。
落ち着け、落ち着け……。
フリオは心の中でつぶやいた。
そして本物かどうかを見極めようと、四人のゼロスとしいなをあらためて眺めた。
だが、四人とも寸分の狂いなく同じ顔だちをしており、同じ髪型に同じ服装。その違いは何ひとつ見当たらない。

――くっ、わからないぞ！
やっぱり、落ち着いてもわからないのだ。
おかげでフリオの判断は迷走した。決める手がかりは何ひとつない。残された道は当てずっぽうに決めるだけだ。
しかし、それで本当にいいのか。フリオの心の声がブレーキをかける。
いつもなら楽天的に物事を決めるはずなのだが、こればっかりはそうもいかない。
以前に『神託の聖堂』で、ロイドとコレット、カイルとロニが闘う姿を見て困惑したことがある。あのときの辛さを二度と繰り返したくないと思っていたのだ。ここで判断を誤れば、下手をすると本物のゼロスとしいなを攻撃することになるかもしれないのだ。
それだけは避けたい。
だが、どちらが本物かを選ぶ決め手がない。
「ほらほら、どうしたんだフリオちゃん？」
「早く決めてくれないとオレ様たち、別の方法で決めちゃうことになっちゃうぜ？」
二人のゼロスが催促(さいそく)してきた。その隣に立つ二人のしいなも、それぞれに同意するように頷いている。
困ったものだ。こちらの苦労など気にもしてない。返答する側の身にもなって欲しい

ものだ。しかしそれを言ったとして、問題が解決するわけでもない。
フリオはもう一度、冷静になって考えてみることにした。
――生体コピー機の部屋にいたほうが本物なのだろうか。
いや、自分がもしも敵の立場なら、最も大事なところに罠を配置するはず。
だったら、この部屋まで一緒に来た二人が本物のゼロスとしいなということになる。
だが、二人がここまであまり迷わずにたどり着いたのは少し変だ。フリオとキャロを陥れるために、偽者の二人がわざと導いたとも考えられる。
――ああっ、ダメだっ！
考えれば考えるほど、余計にわからなくなってきた。
フリオは助けを求めるようにキャロを見た。すると「私はわからない」と、首を振られてしまった。というより、あんたが決めなさいよ、と責任を押しつける顔だ。失敗すると、あとが怖い。そういうときのキャロは容赦ないのだ。いや、今はそんなことはどうでもいいんだ。考える内容が違う。あらためてフリオは悩みに悩んだ。
しかし、結論は出なかった。
もうどうすることもできない。
自分が決めるしかない。

フリオはやけっぱちに決断した。
「偽者の、ゼロスとしいなは……そっちだ！」
と、指をさした。
それは生体コピー機が隠されてあった部屋に元からいた、ゼロスとしいなのほうだった。
しばしの沈黙のあと、
「おいおい、どうしてオレ様たちのほうがニセモノだと思うんだ？」
偽者に選ばれたほうのゼロスが、揺さぶりをかけるように聞いてきた。
それに対してフリオは自信を持って答える。おかしなことに、決めた直後にひらめいたのだ。
「簡単なことだよ。二人が生体コピー機を壊そうとしてないからだ――」
吹っ切れたような顔で言い放った。不思議なもので、行動したあとに考えがまとまってしまった。そしてそれを口にしたら、みんな黙り込んでしまった。どうやら的を射た理由になったらしい。
そんな沈黙のあと、
「はあ？　たったそれだけでか？」

偽者に選ばれたゼロスが言い返してくる。
フリオは怯まなかった。
「ああ、そうだよ。オレたちより先に探してて見つけたんなら、すぐに壊すはずだよな？　それを二人は、オレたちが到着するまで待っていたように見えたぜ？」
疑いをかけた理由を説明すると、その偽者に選ばれたゼロスは語気を強めた。
「だから、ちょっと待てってて。これから壊そうと思ってたのに、タッチの差で来られたら――そんな暇なんてないでしょーが。わかる？」
「うん、わかるよ。だったら、今すぐ壊せばいいじゃん」
「へ？」
「今から壊せば？　オレたち、ここで見てるから。偽者じゃなかったら壊せるはずだよね？」
「うっ……そ、それは……」
偽者に選ばれたほうのゼロスが顔を強張らせた。隣のしいなも同様である。
「どうしたんだよ？　壊さないの？　二人がやらないんなら、オレたちが――」
フリオが、部屋の奥のコピー機に向かおうとしたときだった。
「ま、待て！」

疑われていたゼロスが止めた。隣のしいなも、フリオの行く手を邪魔するように立つ。

「どいてくれよ」

「いや、まあ……あせるなって。ハハハ……」

「そ、そうだよ……あせってもよくないだけだよ。フッ、フフフ……」

二人の、その冷や汗をかいているような表情が合図となった。

「やっと正体を現しやがったぜ！」

「手間かけさせんじゃないよ！」

この部屋まで一緒に来たゼロスとしいなが、フリオの前に立ち塞がる二人に飛びかかった。

＊＊＊

「さすがいいカンしてるな。お前らを信じちゃいたが……こっちを指さしたらどうしようかと、ちょっとばかしドキドキしたぜ」

ゼロスは闘い終わったあと、冗談とも本気ともつかない笑みを浮かべて言った。思えば時空を超えて初めて会ったのに、信じるとはおかしな話である。

「とにかく、その面倒なコピー機を今すぐに壊しとくれ」
符の術で大活躍したしいなも、厄介ごとを払うようにフリオたちに頼んだ。
「これ以上ニセモノどもが入ってこないよう、オレ様たちはこの入り口を見張ってるからさ」
「そうだね、さっきみたいな場面はもうコリゴリだよ」
しいなもゼロスに頷き、二人して生体コピー機のある部屋から出ていこうとする。
二人の背中を見送ったキャロが言った。
「任せて！　解体方法は、ハロルドさんにしっかりコーチしてもらったから！」
「そうそう。簡単、簡単！　え〜っと……赤、青、黄の順でコードを切るんだったよな？」
と、さっそくフリオが生体コピー機のカバーを外して中を覗き込んだときだ。
「違うわよ！　黄、青、赤よ！」
キャロが慌てて駆け寄ったが、
「えッ!?　もう切っちゃった……」
「ひェ〜〜〜〜!!　ば、爆発するわ、みんな逃げて〜！」
生体コピー機から一目散に逃げ出し、部屋の外で立ち止まった二人にも声をかけた。

逃げ遅れたフリオは、とっさに床に伏せた。

間髪を入れずに、耳をつんざくような爆発音と衝撃がフリオの全身を襲った。

しかし爆発は思っていたほど大きなものではなかった。

短く終わり、フリオも特に大きなダメージを受けるほどでもなかった。しばらくして顔を上げると、生体コピー機の本体が二つに割れて煙を吐き出していた。そしてその煙の中に人影が見えた。

「ゴホゴホ……うへェ……オ、オレ様じゃなかったら、死んでたぜ～」

「ゴ、ゴホゴホ……お、およしよゼロス！　命の恩人にケンカ売るもんじゃないよ」

「ゼロス？　それにコピー機の中に、どうして人が……？」

キャロが驚いて訊ねた。

「お～け～お～け～、オレ様はゼロス……で、こっち、しいな」

自慢の赤い長髪が少し焼け焦げてチリチリになったゼロスが、二つに裂けた生体コピー機の中から余裕の顔で出てくる。ただ、その足取りは少しふらついていた。続いてしいなも、目の前に漂う煙を手で払いながら辛そうな顔で出てきた。なんだかわからないが、今までで一番本人らしい雰囲気が感じられる。

「……ほ、本物の？」

思わずフリオが訊いた。
「コピー機の中に入ってるのが、もちろんオリジナルに決まってるでしょーが！」
あっけらかんと答えたゼロスに、キャロがハッとした。
「——じゃあ？　さっき倒されたのも偽者で、その偽者を倒したのも偽者だったたってこと？」
キャロが混乱しかけたようなことを口にしたが、言ってることに間違いはなかった。
実は全員、偽者だったのだ。
「つまり、ゼロスとしいな……最初から本物は、どこにもいなかったんだ」
そうつぶやいて、フリオが部屋の出口のほうに視線を向ける。
だが部屋を出ていったゼロスとしいなの姿は、すでになかった。
騙されていた。完全に今まで、偽者の言葉に乗せられてしまっていたのだ。
「また、やられた……悔しィィィ!!」
キャロが後悔したように叫んだときだった。
「くそっ、まだ近くにいるかもしれないぜ！」
フリオはいまだ爆煙のせいで咳き込んでいるゼロスとしいなを残して、部屋から飛び出していった。

「あ、待ってよフリオ！」
キャロもそのあとを追いかける。
二人で生体コピー機のあった部屋を出て、多くの人間を苦しめていた牧場の出口に向かった。
通路を抜けて大きなフロアに躍（おど）り出（で）たとたん、
「うわっ、お前は――っ！」
フリオが驚いて、つんのめるように足を止めた。その背中に追ってきたキャロが体をぶつけてしまう。
「何やってんのよぉ、フリオ！　のろいわね！」
「違うぜ！　それより前を見ろよ！」
「えっ――」
フリオに促されて、キャロがフロアの先に目を向ける。
二人の前に立っていたのは、男女の仮面なりきり師コンビだった。
「あっ！」
キャロが目を丸くさせる。
「フッフッフッ……」

二人の仮面なりきり師は堂々とポーズを決めている。
「さ、さっきのゼロスとしいなに化けていたのは、お前たちだったんだな！」
フリオは怒りをぶつけた。
「違うわよ。ここにいたゼロスとしいなは全部、偽者――生体コピー機の中に入っていたのが本物よ。うふふ。よかったわね、きちんとゲームクリアできて。おめでと～。私たちの作ったコピーはみんなやられちゃったけど、でも楽しかった♪」
「そうそう。ヒーローVSヒーローだもんな。スゲー好カードだったぜ！」
女の仮面なりきり師に続いて、男の仮面なりきり師もはしゃぎだしている。
「このイカサマ野郎！　お前たち、何が目的なんだ⁉」
「イカサマ野郎？　オレの名前は〝悪（わる）フリオ〟じゃなかったのかよ？」
悪フリオのなりきり師が首をかしげる。
「うるせェ！　そのときの気分によって呼んでるだけだ！」
勢いづくフリオを見て、悪フリオはため息をつく。
「へっ、これが百日前の自分の姿だとはね……もっと大人になれって言いたいよ」
「なんだと！」
悪フリオは、フリオに対して厳しい口調で言った。

「いいか、よく聞け。オレたちの目的は魔王の復活だ！」
「魔王の復活？」
「そうさ。オレたちは魔王の復活を企む、正義の味方！　フッフッフッ……」
悪フリオの隣で、悪キャロがおどけてみせる。
「そう言い残し、正義の味方はさっそうと立ち去るのであった……な〜んてね♪」
挑発的な態度をとる悪フリオたちは、ついに自分たちの目的が魔王の復活にあると秘密を明かした。
——やはり、ポニーとクライトの言っていたとおりだ。
フリオは泥棒夫婦の自供を思い返していた。
いや、それよりも今ここで言ってやりたいことがある。
「そんな物騒なものを復活させて、どうしようってんだ！」
「魔王を復活させたら、世界が大変なことになるじゃない！」
キャロも続いて説得し始めた。
しかし二人は、まるで聞いてない。
「オレたちは英雄になるんだよ！　魔王を倒してな！」
悪フリオは自慢げに答えた。

「そうよ。だから倒すために、復活させるのよ！」
悪キャロも平然と言ってのける。
フリオは面食らった。
「……す、すげえ、なんだそりゃあ⁉」
「百日後の私たちって……そこまで自己中で、ナルシストだったの？」
キャロも残念そうに俯く。哀しくて涙が出そうなしぐさに見えた。
フリオは大事な相棒のそんな姿を見て、ますますカッとした。
「やっぱ、偽物だぜ、コイツらオレたちじゃない！」
そう決めつけようとした。
だが、
「何とでも言え！　もう魔王の復活の段取りはついている！」
「えっ？」
「魔王の封印を解くための鍵――それは、もうすぐ全部そろうんだ！　お前たちが『テイルズ オブ』世界の歴史を元どおりにしようと躍起になっている間にな、オレたちは全部集めてきちゃってるんだよ！」
悪フリオの言葉に、フリオがハッとする。

「鍵？　それは『テイルズ オブ』世界の、貴重品のことだな？　やい、それを元に戻しやがれ！」
「やなこった！」
　子供のように返事した悪フリオは、やがて同情を誘うように言った。
「なあ。もっとオレたちに感謝してくれよ――ミナクルの町は、今のまま進むと百日後に滅亡してしまうんだぞ？　それを避けるためには先手を打って封印を解き、魔王を倒すしかない――そのために、オレたちがこんなに苦労してるっていうのによ～。ヘッ、お前たちこそ未来を知らず、てんで呑気なもんだぜ！」
　次第に、悪フリオの語気が荒くなっていく。
　そこに逃れられない運命への苛立ちが感じられた。
　たぶん彼だって、本当はそんなことしたくなかったのだろう……。
　やっぱり今のフリオにも通じるものがあると、キャロは顔を上げた。
「ねえ、別の方法を考えましょうよ……」
　無駄であろうとも訴えてみることにした。キャロは、彼らを理解したかのような哀しみのこもった声で話しかける。
「私たち、ねこにんの里で見たのよ。あなたたちより、さらに百日後の二人が魔王と戦

って相討ちになった場所を」
「それがどうしたっていうの？」
悪キャロが、平然とキャロに言い返す。
しかし、あきらめる気はなかった。
「二百日後の彼らと同じ運命になっても、いいっていうの？」
「覚悟の上よ――」
「えっ？」
キャロは息を呑んで、悪キャロを見つめた。
未来の自分は、もっとさらに強い意志を秘めていたのだ。
それを証明するかのように、彼女は語りだす。
「私たちより百日後のフリオとキャロも、そしてまたさらに百日後のフリオとキャロも……みんなみんな、努力して少しずつ歴史を変えてきてるのよ。もし私たちが失敗したら、そのときはあなたたちが――この役目を引き受ける番よ」
「――嫌よ！」
悪キャロに対して、キャロは間髪を入れずに叫んだ。
「そんなの……歴史をずっとずっと繰り返してるだけじゃない！　どうして私たちがそ

なら今すぐ聞かなかったことにしたくなっていた。
しかし彼らは違った。
悪フリオは、神妙な声でなだめてきた。
「だけど受け入れなきゃしょうがないんだ。本当はお前らに迷惑をかけないよう、仮面を被って正体を隠していたけど……もう知ってしまった。お前たちも、あとには引けない——だって嫌だろ？　ミナクルの町が一瞬にして消し飛んでしまうなんてよぉ！」
「やめて！　そんなこと聞かせないで！」
悪フリオの言葉に、キャロは今にも大声を上げて泣きだしそうになる。
フリオは、そんなキャロを庇うように割って入った。
「とにかくオレたちは、魔王を復活させるのは反対だ！　お前たちとは違うんだ、違う歴史を歩んでやる！」
「フッ、バカだね……なんの努力もしないで、平和が手に入ると思ってる平和ボケ野郎

め！」

「うるせェ！　世界を破滅させるスリルを楽しんでいやがる、ギャンブラーバカに言われたくないぜ！」

震えていた。フリオの声が震えていた。

それは未来の自分たちが本気だったことを知ったからだ。

本気の覚悟がそこにあったからだ。

でも認めたくなかった。

だからフリオは、未来の自分に対してきっぱりと言い放つ。

「いいか！　魔王の復活は——オレたちが止めてやる！　鍵も、これ以上は集めさせない！」

それは未来への反抗だった。

運命というものに抵抗しようとする宣言でもある。

しかし悪フリオは、動じていなかった。

鼻で笑ったのである。

「フフッ、だから無駄だって！　お前たちも、いずれオレたちと同じ運命をたどる——オレたちが失敗すれば、次はお前たちが鍵を集める番になるんだよ」

「違う！　絶対に同じことはしない！」

必死に逆らった。まだ取り戻せると信じたかった。

だからフリオは、ここで誓おうと思った。

だがそんな決意も、悪フリオには茶番にしか聞こえなかったようだ。

「さあ、それはどうかな……まあ、せいぜい頑張ってオレたちの邪魔をしてみろよ――じゃあな！」

捨て台詞を残して、仮面なりきり師コンビはフリオたちの前から姿を消した。

＊＊＊

その日から、魔王の封印を解く鍵を手に入れるための競争が始まった。

宣言したとおりの闘いに、身を投じたのである。

フリオたちは遅れてなるものかと、いろんな時空に旅立った。

仲間も続々と集まってきた。『ねこにんの里』からの帰りに出会ったフォッグをはじめ、ジーニアスとクラトスを救出した『裏切りの砦』、仮面なりきり師コンビを追いつめようとした『レミ遺跡の最下層』、藤林すずを救出した『魔科学研究所』、蛮族にさら

われたチェルシーと、彼女を救出に向かったまま行方不明のウッドロウを探す『炎の迷宮』の冒険、そしてコングマンと対戦した『闘魂コロシアム』での挑戦。そこでは、探していたウッドロウとさらに吟遊詩人のジョニーと出会うことができた。

そのどれもが、出会った伝説の英雄たちの力添えもあって解決した。

しかし競争には負けていた。

目的の鍵は、すべて悪フリオたちに奪われていたのである。

そんなある日のことだ。

思わぬ報せが飛び込んできた。

「なんだって！　また、『時の吹きだまり』が現れたんだって？」

古代史研究所の中で、フリオが声をはり上げる。

「そうなんじゃ。困ったことにまた現れてしまったんじゃ……」

二つ並べた書斎に仲良く向かっていたブラウン博士とホワイト博士が、同時に頭を抱え込む。

「まあ、あれだけ歴史の改変をしてきたのじゃから……必要なくなった時間のゴミが溜まって、新しい時の吹きだまりが生まれることは予測しておったんじゃが……こんなにも早く現れるとはのぅ」

ブラウン博士はやりきれない表情で腕を組んだ。
「おそらく、そこに迷い込んでしまった『テイルズ オブ』世界の英雄たちもいることじゃろう……」
「ということは、鍵もそこにある可能性が？」
「うむ。そこには《みらいのカギ》があるようじゃ」
ブラウン博士が答えた。
「よし、わかった！ さっそく出発しようぜ——」
「ちょっと待って、フリオ！」
研究室から出ていこうとしたフリオを、キャロが止めた。振り返ったフリオに対して、いつもより厳しい視線が射る。
「わかってる？ 鍵は、あと二つなのよ」
「二つ？」
わかっているくせに、あえてフリオは聞き返した。
キャロは真剣な表情で頷いた。
「ええ、そうよ。ブラウン博士が石版を解読して作ってくれた宝物リストによると——《時のペンダント》《神の眼》《ソーサラーリング》《黄金のカギ》《セイファートキー》

《エレメントオーブ》《クレーメルケイジ》《神子の宝珠》《ひかりのカギ》《たびだちのカギ》《みらいのカギ》《きぼうのカギ》……私たちはことごとく悪フリオと悪キャロに持っていかれてしまってるわ……残るは、このみらいのカギときぼうのカギだけ……」

「だからなんだって言うんだよ？」

リストを見ながら説明したキャロに、フリオは苛立ちを露わにした。

今まで『テイルズ オブ』世界の歴史改変は、二人と英雄たちの努力によって食い止められてきた。しかし肝心の魔王を復活させる鍵は、すべて仮面なりきり師コンビの手に落ちた。残るはキャロの言うとおり、あと二つ。

つまり、崖っぷちなのだ。

そんなこと今さら説明されなくてもわかってる――。

「今度こそ――あいつらを、間違いなく倒せってことだろ？」

フリオが強い口調で言う。

「そう。わかってるんならいいわ――行きましょ！」

キャロもムッとして宝物リストを乱暴に脇に置いた。

書物がぎっしり詰まった両博士の研究室を、気まずいムードのまま二人して出ていこうとする。お互いに謝るタイミングも失い、こんなことでは作戦も失敗するのではない

かと思われた、そのときだった。
「むむっ、解けたぞ！」
書斎に向かっていたホワイト博士が、いきなり大きな声を上げた。
「わかったぞ！　石版の続きが、また解けたんじゃ！」
「本当か、ホワイト博士！」
隣の席のブラウン博士が急いでそばに寄った。
両博士は、レミ遺跡の地下から発見された石版の古代文字をずっと解読し続けていたのである。
その二人が肩を叩き合って喜んでいるのだ。これは何か、新しい成果があったに違いない。研究室の入り口で、ポカンとしていたフリオとキャロも自然と確認し合うようにお互いの顔を見た。でも、まだ腹の虫が治まらないのか、すぐにフンと、横を向き合った。
そんな二人に、ホワイト博士が報告する。
「聞いてくれ――遠い未来社会に、時空転移装置を乱用（らんよう）した科学者がいたそうじゃ！」
「なんだって！」
フリオとキャロも研究室の扉前から、ホワイト博士の机に寄ってくる。二人とも、解

読の結果が気になって仕方ないのだ。
「遠い未来に？」
さっそくフリオが訊ね返す。
「そうじゃ――前に、魔王の封印が破られないよう、古代人は封印の鍵のひとつひとつを別々の世界に運んだ、と説明したのを覚えておるか？」
「ああ、そのときに使った時空転移装置が、ドリーム号のことなんだろ？」
フリオは確認するように答えた。
思い返せば、両博士はレミ遺跡の地下に眠っていた石版の古代文字をおそろしいスピードで解読してきた。
それはもちろん部分的な解読で、まだ完全にひとつの文脈までには至らないが、しかし今日までにかなりのことが判明してきている。
たとえば魔王を封印した古代人は、鍵をいくつも用意し、それをいろんな『テイルズオブ』世界に置くことにした。つまり、時空を超えて鍵のありかを散らせたのだ。
そんなことまでがわかっていた。
「でも賢い古代人も、未来のことまでは予想できなかったんだな」
フリオがつぶやくと、

「まさか、ドリーム号を使っていろんな世界から、忌まわしい鍵を集めようとするバカが後世に現れるなんてね」
皮肉のようにキャロが続けた。
するとフリオも、さっきまでの気まずいムードを忘れたかのように調子づく。
「頭がいいヤツってさ、頭が悪いヤツの行動力をたいてい侮ってるからなァ～」
「ふ～ん、フリオが言うと猛烈に説得力あるわね」
「なんだよ？」
ふと我に返った瞬間、さっきの腹立たしさがフリオの中によみがえってきた。
キャロがとぼけるように話をそらす。
「別に……で、ホワイト博士。解読の続きは？」
ホワイト博士は「おお、そうじゃった」と、話を続ける。
どうやら両博士も、二人が仲直りできないのを気にしているらしい。なんとなくフリオたちの様子をうかがっていたのだが、まだ無理だとあきらめたみたいだった。
ホワイト博士は解読の結果を綴った記録書にあらためて視線を落とした。
そして解読した内容を読み上げた。
「その科学者の名前はジャババ——時空管理局に指名手配され、時空転移装置に乗って

逃亡したそうじゃ」
「時空転移装置？　ドリーム号のことかな？」
「そこまで詳しくは書かれておらんが、まあ似たような装置なんじゃろう——で、ジャンプを繰り返したジャババを誰も追いかけられなかった、と書かれてある……ここから先は、まだ解読ができておらん」
そう言ってホワイト博士は記録書を閉じた。
「……なんで、そいつを誰も捕まえに行かなかったんだ？」
「何度も何度も時空を飛んだら、元の世界に帰れなくなるものね……」
キャロは他人事（ひとごと）とは言えないような口調になる。
自分たちも同じなのだ。
泥棒夫婦のポニーとクライトが起こした『テイルズ オブ』世界の歴史改変を食い止めようとして、今まで何度も時空を飛んだ。
だからこそ、いらなくなった歴史の時間が捨てられる時の吹きだまりなんてものが生まれたりしたのだ。今回も、またそれが誕生して、二人はそこに迷い込んだ伝説の英雄たちの救出と、それから悪フリオたちと競争している鍵の争奪に向かわなければならない。

使命の達成もあるが、こう何度も時空を超えることは――いずれ元の世界に戻れなくなる危険もはらんでいる。

悪フリオと悪キャロのように、自分たちも覚悟しておかなければいけないことなのだ。

だが、そんな不安を二人とも口にするつもりはない。

なかったけれども、キャロはつい口をすべらせてしまったのだ。

以前に「このままでいい」と言った彼女の本音……フリオは、それを思い返していた。

すると、この言葉を無性に言いたくなった。

フリオは久しぶりに――といっても数分ぶりにだが、キャロの顔を見つめた。彼女もすぐに大きな瞳で見つめ返してきた。

そしてフリオは伝えた。

「でもキャロが、オレに『どうしても』って言うなら、たぶんオレは――どんな世界にでも付き合うぜ」

「当たり前！」

キャロは怒ったように答える。なぜか、その顔は少し赤くなっていた。

＊＊＊

その日、フリオとキャロは同行する伝説の英雄たちを選ぶと、ドリーム1号を稼働(かどう)させて——新たに生まれた時の吹きだまりへと向かった。
そこは、不気味な空間であった。宙空に浮かぶ岩場の迷路、深い霧に覆(おお)われた薄暗い環境……。
そんな場所にドリーム号から降り立ったのは、次の十二人の英雄たちだった。
ファンタジア世界のクレス、ミント。
デスティニー世界のウッドロウ、リオン。
エターニア世界のファラ、メルディ。
新デスティニー世界のカイル、ロニ。
シンフォニア世界のロイド、ジーニアス。
そしてフリオとキャロ。
このチームの選抜は、フリオとキャロで決めた。本当はもっとあれこれ協議して特色のある編成にしてもよかったのだが、二人とも自分の主張を譲らずじまいで、なかなか

決まらなかった。結局はブラウン博士のアドバイスで、正統派に近い編成で落ち着くことになったのである。

「さて、どう動くかだけど――」

フリオが濃い霧に閉ざされた周囲を眺めて、考え込んだときだ。

「よお、オレ！」

霧の中から、突然声をかけられた。

「げげッ！　なんだよ、いきなりだな！」

現れたのは仮面なりきり師の男だった。大胆にもひとりでやってきたのだ。

「な、なんだよ――」

フリオは警戒するが、この日の悪フリオはやけに機嫌（きげん）がよかった。なんと近寄ってくるなり、自分から仮面を外してしまったのである。

「――ああっ！」

フリオをはじめとして全員が息を呑んだ。

仮面を脱いだ男の顔は――まぎれもなくフリオそのものだったのだ。

予想していたことだが、実際に目の当たりにすると言葉が出ない。

全員が何も言えなくなった。

いや、言えなかった。

未来のフリオを、敵にしているという現実を前にして――。

そんな凍(こお)りつくような緊張感の中で、悪フリオは口を開いた。

「フフッ……これでわかっただろ？　オレは間違いなく百日後のお前だってことが！」

わかりきったことをあえて口にする。

それだけ追い詰めようとしてきているのだ。

フリオは反発した。

「だ、だけど！　心までは違うぜ！　オレは百日後に、魔王を復活させようなどと考えたりしないぞ！」

仮面を脱いだ悪フリオを睨みつけ、フリオはあらためて宣言した。

それは自分自身に確認させるような言い方だった。だが、いくぶんか汗も滴(したた)り、表情には焦(あせ)りが垣間(かいま)見えていた。何しろ自分自身である証拠を見せつけられたのだ。平常心でいられることのほうが難しい。

「フッ、その心意気(こころいき)――どこまで続くか見物だな」

百日後のフリオは不敵(ふてき)に笑って、本題に入った。

「今日は、宝探し勝負に付き合ってもらうぜ！」

「はァ？　宝探しィ？」
キャロがなれなれしい口調で聞き返す。あまりにもフリオとそっくり――いや、同一人物すぎて、なんだか普段の会話のようになってしまう。それを自覚してキャロはいけないと、ハッと我に返った。
悪フリオは、気にしてない素振り（そぶり）だ。
そして英雄は、一同がいる前で、宝探しについて説明した。
「ここにいるモンスターか人間がみらいのカギを持ってるはずだ」
「カギを？」
「ああ、そうさ――どいつが持っているのかはわからない。だけど、倒せば持っているかどうかがわかる」
「倒せば……」
フリオは神妙な顔になる。
「だから、この時の吹きだまりにいる人や怪物を片っ端から倒して、先に鍵を見つけたほうが勝ちだ。いいな？　どっちが早いか勝負だ！　んじゃ、よ～いドン！」
悪フリオは踵（きびす）を返して、霧の中へと走り去った。そのすばしっこさは、確かに自分とよく似ている。

「あ、おい！　待てよ！　くそっ……オレって、あんなにジコ中だっけか？」
追いかけようとしたフリオは、自分で自分に腹を立ててしまいそうになった。しかし言ってるそばから、未来の自分に対して自己弁護したくなる感情も込み上げてくる。そんな不思議な感覚を味わっていると、
「あいつより、早くたくさん敵をやっつけないと鍵を取られちゃう！」
キャロが冷静に言った。
「グズグズしてらんないわよ。とにかくやらなきゃ！」
そして英雄たちに振り返り、号令（ごうれい）をかける。
彼らが頷き返す。
「よし、わかった！　手分けして倒そう――」
ファンタジア伝説のクレスが真っ先に答える。すると隣のミントも「お供します」という顔で、彼のそばに寄る。この二人は別行動にさせないほうがいいだろう。そう思って編成したカップルなのだ。
「まさか、一緒についてくる気じゃないだろうな？」
隣のウッドロウに言い放ったのは、デスティニー伝説のリオンだった。
「リオン君、たとえ好（この）まない相手だとしても、協力し合えばよい結果をもたらすことも

ある」
広い視野と見識を持つ、ファンダリア王国のウッドロウ王は諭すように答えた。
「フン、僕はひとりでも充分だが、ついてきたいのなら勝手にしろ――」
と、リオンはひとりで歩き出す。
ウッドロウは黙ってついていった。
「じゃあ、私たちも――メルディ、行こう！」
「あ、待ってナー、危ないヨー」
「大丈夫、イケるイケる♪」
エターニア伝説のファラとメルディも、行動を開始した。
「じゃあ、ジーニアス。オレたちはあっちの方向に行こう！」
「うん、わかったよ――ロイド！」
東を指さしたロイドに従って、ジーニアスもあとに続く。これでシンフォニアチームも出発した。
それぞれに思い思いの方向へ散っていく。
残されたのは、
「ねえ、ロニ、オレたちはどっちの方向に行く？」

「あン？　どっちの方向って、子供じゃないんだからどっちでもいいに決まってるだろ」

長身のロニが面倒くさそうにカイルに答えた。

「また子供って！　ロニは、オレのこと子供扱いばっかりして！」

「ああ、わかったわかった。ほら行くぞ！」

ロニは機嫌が悪かった。それもそうだろう。カイルのせいで憧(あこが)れのフィリアさんからもらった眼鏡を、本人に返す羽目(はめ)になってしまったのだから――。

事の起こりは、ロニのナンパ術とやらを試してみたくなったカイルの勘違いによって勃発(ぼっぱつ)した。リアラに大事なものをくれと言いに行ってしまったカイルの中途半端な口説(くど)き文句に、よく事情を呑(の)み込(こ)めないリアラが、大事なものをプレゼントするってどうすればいいのかと、フィリア本人に質問しに行ってしまったのだ。もちろんフィリア本人も何の話だかよくわからない。わからないから話の出発点であるロニに直接聞きに来てしまった。

「あの、リアラさんにお訊ねされたんですけれども……わたくしどういう意味なのか、よくわからなくて……もし、よろしければロニさんに事の真意を教えていただこうと思いまして」

丁寧（ていねい）な言葉づかいで質問してくるフィリアに、ロニはたじたじになった。
結局うまく答えられずに、フィリアからもらった眼鏡を本人にありがたく返すということで話を丸く収（おさ）めるしかなくなっていた。
だからそのことがあって以来、ロニはなんとなくカイルに対して機嫌が悪かったのだ。
「さあ、行くぞ！　カイル！」
「うん！　待ってよ、ロニ！」
ズンズン霧の中へ進んでいくロニを追いかけて、カイルがフリオたちの前から走り去った。
これで、新デスティニー世界のチームも出発した。
「さぁ～て、オレたちも行くか！」
フリオがめざす方向を決めると、
「おーっ！」
後ろからキャロが勇（いさ）ましく拳を振り上げる。
それを見てフリオは、ため息をついた。
「もっと可愛く返事してくれよ……でないと、すっごく頼もしく見えちゃうじゃないか」

「え？　何か言った？」
「いや、何も……」
フリオは黙って、霧の中へ歩み出した。

＊＊＊

「チッ、ムダな闘いさせやがって！　こいつハズレかよ！」
メガデスを倒した直後に、悪フリオは舌打ち（したう）ちをした。
フリオとの競争を始めてから、霧の中から現れる怪物どもとずっと闘い続けていたのだ。
しかし肝心（かんじん）の鍵が、まだ手に入らない。
悪フリオは焦って霧の中を駆けた。次の怪物のサンダーソードが現れる。
「食らえ！」
跳躍（ちょうやく）してなりきりチェンジを行う。悪フリオは《剣士の服》に変身して、サンダーソードに刃の一撃を浴びせる。怪物はたまらず砕け散った。
着地して期待のまなざしで歩み寄ったが、

「くそっ、またハズレかよ！　どいつがみらいのカギを持ってんだ!?」
そのサンダーソードも、鍵を所有してなかった。
競争といえど、これは運に左右される。
「お〜い、オレェ！　こっちはハズレだ！　そっちの首尾は、ど〜だ〜？」
大声をはり上げて、霧の中をさまよっているであろう過去の自分に呼びかける。ちょっと不安になっていた。もちろん競争に負けた場合は、百日前の自分を倒して鍵を奪ってしまえばいい。それだけのことだと、余裕で考えるのだが、ふと胸の内に過去の自分に対する同情心も湧(わ)いてくる。まだ弱くて情けないが、百日前の自分であることは確かなのだ。そう思ってみると、少しは可愛らしいとも感じられてくる。
しかし使命は使命だ。
やらなければならないことがある以上、情(じょう)に流されてしまってはおしまいだ。
「そらそら！　次だ、つぎィ！　次は、ハズレんじゃねェぞ！」
悪フリオは過去の己(おのれ)に負けてなるものかと、また新たな敵を求めて霧の中をさまよった。

そして別の場所では——。

「知り合いのマネをしても、敵であることくらいわかります」
と、赤い髪をした小さな女の子が、クレスとミントのことを睨み上げていた。彼女は自分の体と同じ大きさぐらいの、巨大な斧(おの)を手にしている。シンフォニア伝説のプレセアであった。
「敵、確認……攻撃を開始します」
無表情に抑揚(よくよう)のない声で、プレセアが斧を構える。
「よせ、よすんだ！」
クレスが、小さな女の子に対して攻撃するのをためらった。だが、そんなことでプレセアが遠慮するはずがない――いや、容赦なく斧を振り上げて襲いかかってきた。
「うわぁ！」
クレスはよけるので精一杯だった。仕方なく抜刀(ばっとう)し、剣を構える。するとプレセアは、脇に立っていたミントのほうに狙いを定めて向かっていった。
「やめろ！」
クレスが脱兎(だっと)のごとく駆け出し、ミントを助けに向かう。
「《ピコハン》！」
ミントは術を使った。自分の身を守るためでもあるが、プレセアをおとなしくさせた

いという願いのほうが強かった。だがミントの術で投げられたハンマーを頭に受けても、プレセアは気絶しなかった。むしろ戦闘的な顔つきになって、ミントのことを追いかけてきた。

「きゃあっ！」

たまらずミントが逃げ出したときである。

「——プレセア！」

そう叫びながら霧の中からジーニアスが駆けてきた。すぐあとからロイドも駆けてくる。フリオとキャロも一緒だった。

「待ってよ、プレセア！　落ち着いて！」

駆け寄ってくるなり、ジーニアスはプレセアに必死になって呼びかけた。

その瞬間、プレセアの動きがピクリと止まる。

ジーニアスの声に反応(はんのう)したのだ。

「……え？　ここは？」

不思議そうな顔になって、次第に心細そうな表情を浮かべる。

「私、何を……していたの？」

「こんなとこにいちゃダメだ。一緒に行こう、プレセア！」

畳みかけるようにジーニアスは訴えた。
その無垢な情熱に打たれたのか、プレセアは次第に戦闘的な表情を解きジーニアスに頷き返す。それを見てジーニアスは幸せいっぱいの安堵感に満たされる。そして、一緒にこの場に駆けつけてくれたフリオたちのほうに向き直った。
「構わないよね？　フリオ、キャロ？」
後ろで様子を見守っていたフリオが歩み寄ってくる。
「もちろん！　オレはフリオ！　よろしく、プレセア！」
「え～っと、じゃあああらためて、ボクはジーニア……」
ついでに自己紹介をしてしまおうと考えたが、途中からキャロに話の腰を折られた。割り込むようにキャロがジーニアスを押し退けたのだ。
「私はキャロ！　さ、プレセア、あっちのドリーム号の中で休んでて、ね？」
「了解です」
小さなプレセアは可愛く返事する。
脇に追いやられたジーニアスには、さらなる悲劇が訪れようとしていた。
「ボクはジーニアスって……あれ？　ねえ、待ってってば、プレセア！」
気がつくと、彼女の姿がない。

すでにキャロが、連れていってしまったあとだった。

そして、また別の場所では――。

「お友だちのマネをしても、私はダマされないですよゥ」

と、弓使いの女の子がファラとメルディに向けて矢を放とうとしていた。

「ちょ、ちょっと待ってよ！　私たちはモンスターなんかじゃないわよ！」

ファラが、女の子を正気に戻そうと叫ぶ。

だが、彼女の心には届かない。その女の子はデスティニー伝説のチェルシーである。

またここでも、英雄同士が争う危機が訪れていた。

「あ～ん、ウッドロウ様ァ～、助けて～」

そう言いながらも、チェルシーは弓を引く。

「きゃっ！」

「ひゃあぁ～」

すんでのところでファラとメルディが、飛んできた矢をかわす。

「危ないじゃない！　助けを呼びながら矢を放つなんて！」

「びっくりするヨー」

二人は怒って訴えたが、チェルシーはまた新たに矢を番えていた。なんという戦法だ。これはもう話し合いなどする余地はなさそうだ。

──仕方ない、術を使うしかないわ！

ファラがそう決心したときだった。

「チェルシーっ！」

霧の中から男の声がした。

一同が振り返ると、ウッドロウがこちらに向かってくる。その後ろにはリオン、フリオとキャロもいた。

「チェルシー！　探したぞ！」

ウッドロウは、弓を構えた状態のチェルシーに構わず駆け寄る。それは傍目には、彼女の矢で射貫かれても構わないと言わんばかりの無謀な行動に見えた。

「また、迷子になっていないかと心配していたのだ……チェルシー」

落ち着いた声で、ウッドロウは話しかける。

すると彼女は、

「ぶー！　ち、違いますッ！　迷子なんて、そんなこと……私は、ただモンスターさんたちとお話ししていただけ」

急に無邪気な顔になって、構えた弓を下ろす。
なんと、ウッドロウの声が届いたのだ。
その姿に、ファラたちは信じられないという顔で目をぱちくりさせた。
チェルシーはあっけなく正気に戻って、
「みんなが帰してくれないいんだもの。私、子供じゃないいんですからねーだ」
と、ウッドロウに甘えるような声を出している。そのときのチェルシーの姿はとても幸せそうだった。
「フン、くだらない——」
リオンは、これ以上見ていられるかと背を向けた。
ほかのみんなも、リオンと同じような気持ちになりかけた。
なんだったのだろう……。
あっけなさすぎて、どっと疲れが出てくる。
「最初からこうすればよかったのね……」
初めて時の吹きだまりを訪れたファラは、肩の力が抜けたようにつぶやいた。見ると
チェルシーは、ウッドロウのそばでまとわりつくようにはしゃいでいる。
そんな二人っきりの世界が出来上がってしまうのかと思われたとき、チェルシーはふ

と後ろで見守っているファラやフリオたちの姿に気がついた。
「……っと、ウッドロウ様。こちらの皆さんは？」
チェルシーがきょとんとした目で、ウッドロウに訊ねた。
「ああ、フリオ君にキャロ君だ……今は、彼らと一緒だ」
ウッドロウが紹介した。
「はじめまして。私は、チェルシー＝トーン。以後、お見知りおきを」
彼女は軽く一礼（いちれい）して、フリオたちに挨拶した。
フリオたちは、力の抜けたような笑みをチェルシーに返した。

＊＊＊

「私の友に姿を変えて現れるとは、いただけないな！」
別の場所では、また新たな争いが起こった。
インフェリア王国元老騎士のレイスが、カイルとロニに剣を構えたのである。
ただならぬ殺気（さっき）があたりを支配する。
「ねえ、ロニ……どうする？」

あどけない表情で、カイルが親友に訊ねた。

「どうするって、たぶんオレたちと同じ、別の世界から来た人なんだろ？　事情もわからずに闘うわけにはいかないぜ」

長身で気のいいロニが、弟のように可愛がっている相棒に答えた。

無用な闘いは避けるが一番。

腕は立つが楽天的に物事を考える、陽気な二人らしい結論だ。

ゆえにカイルとロニは、けっして闘いに応えるようなしぐさは見せなかった。

しかし、そんな無防備な姿勢もレイスには通用しない。

「私に指し示された道をはばむ者に、容赦はしない！」

勝手に息巻いている。

おそらくカイルたちの姿が、きちんと見えていないのだろう。

やがてレイスは、剣で攻撃してきた。

「うわっ、ロニ！　どうするの!?」

「どうするって、お前！　よけろよ！」

「そ、そうだね！　うわあーっ！」

もたもたしていたカイルが、目前に迫ったレイスの剣先を見て血相を変える。慌てて

体を動かす。普段から鍛えた反射神経がものをいった。かろうじて剣の突きをかわし、カイルは地面に転がった。ごろごろっと充分な距離を取ったあと、脇腹にさげた鞘に手を伸ばし、抜刀の構えをとりながら身を起こした。

「くそぉ！　ヤル気なのか！」

思わず、頭に血が上って叫んだ。

すると、

「レイス!?　やっぱりレイスだ！　迎えに来たよ！」

闘いの場に似合わない女の子の明るい声が、どこからともなく響いた。

「えっ？」

カイルは固まったまま、きょとんとする。脇を見ると、エターニア伝説のファラが、その元老騎士の許に駆け寄っていた。——ファラが危ない、と彼女を止めようと立ち上がったが、すぐ目の前にロニが割って入って止めた。

「……ロニ？」

「まわりを見ろよ。みなさん勢ぞろいだぜ」

「えっ？」

ロニに言われて、カイルは後ろを振り返った。

エターニア伝説のファラだけでなくメルディ、デスティニー伝説のウッドロウにリオン、そして派手な格好をした弓使いの女の子、さらにフリオとキャロもいた。
その様子を見て、カイルは理解した。時の吹きだまりで、正気を失った英雄を元に戻す方法を——みんなは試しているんだと。
「ファラ？　またキミは、他人を手助けしている最中のようだな？」
レイスは、穏やかな表情になって訊ねた。同じエターニア伝説に属するファラを前にして、それまで見ていた幻覚が晴れたかのようである。
ファラも安心して、普段の会話のようにレイスに答えた。
「うん！　私が、がんばることで——誰かが幸せになってくれたら、ホッとするんだもん」
「私はキミのそういうところに、興味をそそられるよ」
「人を珍しい動物みたいに言わないで！」
レイスに対して、ファラは目をつり上げた。
元老騎士は苦笑したあと、
「どうやら、キミたちとともに行くことが——今の私に、指し示された道らしい」
と、フリオたちのほうを見た。

それからも、時の吹きだまりに迷い込んだ英雄たちの救出は続いた。
次に発見されたのは、シンフォニア伝説のリーガルだった。
「我が盟友の姿を借りるとは……その罪、つぐなってもらおう！」
彼はそう言って、フリオたちに襲いかかってきたのだ。
愛する人の命を奪ってしまった悔恨により、自ら両手を手枷で縛るリーガルは、主に足技をくり出してくる。一見すると不利な攻撃体勢のように思えるが、接近戦に持ち込まれると手堅い攻撃の数々――それをかわすのは容易ではなかった。
「やめろ、リーガル！」
フリオたちは間合いを詰められないよう、逃げ回りながら呼びかける。
彼と心の通じた親しい者でないと無駄だとわかっているが、それでも少しばかりの時間稼ぎになるのならと、フリオは呼びかけた。
「リーガル、目を醒ますんだ！」
いつの間にか全員が四方に散らばり、リーガルを取り囲んでいた。退路を塞ぎ、攻撃することなく、彼を逃さないよう見守り続けた。
「くそっ、まだかよ？　遅いぞ、キャロ！」

フリオは思わずつぶやいた。
ほかの場所で仲間の探索を続けるシンフォニアチームのロイドとジーニアスを、キャロが呼びに行ったのだ。しかし、なかなか戻ってこない。何をやっているのか。
長引けば長引くほど不利だというのに。
リーガルとの戦闘で、仲間を誰も傷つけたくないと思っていたフリオは焦った。
——早く、連れて戻ってこいよ、キャロ！
その願いが届く前に、リーガルがフリオに狙いを定めてきた。
「私には、このようなところで留まっているヒマはないのだ！」
獲物を見据えたような視線で、こちらに駆けてくる。
（ヤ、ヤベェ！）
フリオは《格闘家の服》になりきりチェンジして、持ち堪えようかと思案した。
そして、変身しようとしたときである。
「ア、アリシア⁉」
迫ってきたはずのリーガルが、いきなり足を止めた。
目の前に飛び出してきた女の子に、驚愕したのだ。
フリオがあらためて確認すると、それはドリーム号の中で休んでいるはずのプレセア

であった。プレセアが、フリオを庇うようにリーガルとの間に割って入ってきたのだ。
「プ、プレセア？　どうしてここに！」
なりきりチェンジの構えを解きながら問いかけると、彼女はリーガルのほうを向いたまま静かに答えた。
「この人の、声が聞こえたんです……哀しい声が……」
「リーガルの、声が……」
それを聞いてフリオは思い返す。
いつも読んでいた英雄伝説によると、かつては華やかな貴族だったリーガルは、プレセアの妹のアリシアと恋に落ちた。そして不幸な事件によりアリシアの命を奪（うば）わざるを得なかったという。
一方、その妹を殺したリーガルを探すため、ロイドたちの旅に同行したプレセアも、やがてリーガルと出会い、妹が亡くなった事件の全貌（ぜんぼう）を知って、彼と和解することになるのだ。
英雄伝説によって先にすべてを知っているフリオは、向かい合う二人を神妙な顔で見つめた。
「いや、プレセアか……当然だな、アリシアは私がこの手で……」

リーガルがつぶやきながら、過去の痛みをよみがえらせる。
その苦悩した表情に、プレセアは語りかける。
「……リーガルさんが苦しむと、死んだ妹が哀しみます」
外見は幼くても実は二十八歳というプレセアは、リーガルの心に呼びかける。
「確かに過去は変えられないです。でも、未来は変えられます」
「……………」
リーガルは無言で聞いていた。
プレセアが話を続ける。
「だから私は、自分の足と自分の意志で、未来に向かって歩きたいです。それは、リーガルさんも同じだと思います」
言い終えたあと、しばらくの間、静寂(せいじゃく)があたりを覆った。
リーガルは、やっと口を開いた。少しだけ笑みがこぼれていた。
「そうだな、ありがとうプレセア……私も未来へ目を向けるとしよう」
閉ざされていた彼の心が、開いた瞬間だった。
見届けたフリオもホッとした。
危機は去った。またこれで、英雄のひとりが救われたのだ。リーガルを取り囲んでい

た一同にも安堵感が訪れ、やれやれという表情になった。
そんなところに、
「フリオーっ、お待たせぇーっ！」
今頃になってキャロが、ロイドとジーニアスを連れて戻ってきた。
だが、もう事件は解決してしまっている。
「……あれ？」
駆け寄ってきたばかりのキャロはその状況を察したのか、な～んだという顔をする。
本当は自分の行動が無駄になったことを残念がるのではなく、無事にリーガルを救えたことを真っ先に喜ぶべきなのだ——フリオが大人ぶって、そのことをキャロに説教してやろうかと思ったときだった。
「いい度胸ですね！　ボクの子分に化けるなんて！」
霧に視界を閉ざされたすぐ近くから、新たに英雄らしき人物の声が響いた。
再び、フリオが緊張する。
誰だろう、あの声は——。
子供っぽいような気もするが、しかし時の吹きだまりにいる以上、伝説の英雄のひとりであることには間違いない。

「よし、行ってみよう！」
フリオは、その声がしたほうに向かって駆け出した。
「もう～、また走るのぉ～」
休む間もなく走らされて、キャロがうんざりした声でついてくる。
しかし現場は、すぐ近くだった。
霧の中を走り抜けて到着すると、顔半分が隠れそうなほどの大きな帽子を被った、背の低い子供が立っていた。しかも、あのデスティニー伝説のリオンと向かい合っている。
なんとなく嫌な予感がした。
「あ、あれは――」
フリオは近づいて気づいた。
リオンと向かい合っていたのは、エターニア伝説のチャットである。
「大海賊アイフリードの血を引くこのボクに、かなうはずありません！」
「フン、闘いに血筋などは関係ない――前口上が過ぎる奴ほど、口ほどでもない」
冷徹な顔でリオンが言い返す。
対峙する二人の間には、異様な空気がみなぎっている。
嫌な予感が的中した。

二人は、まさに決闘しようとしていたのだ。
「お、おい、やめろよ——二人とも！」
フリオが呼びかけるが、そんなことでやめてくれるような雰囲気ではない。
二人の目は本気だった。
特にリオンのほうは、止めることのできない恐ろしげな気迫に満ちていた。伝説の英雄であろうがなかろうが、自分に対して敵意を向けてくる者は容赦なく斬る——それが自分のスタイルであるとでも言いたげに、剣を抜いて静かに構えている。
「いけない、こりゃマジだ——」
リオンの顔つきから、フリオは焦った。
二人の間に漂うピリピリとしたムードが、近づきがたい壁となっている。
「ど、どうすりゃいいんだ！」
フリオはひとりでオロオロした。振り返ると、キャロはまだ来ていない。たぶん走り疲れて、途中で休んでいるのだろう。こんな重大なシーンを見逃すなんてもったいない——いやいや、止めるための方法を一緒に考えろっていうんだ。
そうこうしているうちに、二人に動きがあった。
真剣な表情になった決闘者は、互いに睨み合い、じりっじりっと間合いを詰めていっ

た。
「ボクとしたことが、こんなザコを相手にするなんて……しまりませんね」
チャットが挑発する。
リオンはそれには乗らず、闘いを始めるタイミングを計っていた。
相手の隙を狙うのではない。
自分の気が乗ったときに仕留めてやろう——と、待つ楽しみを味わっていたのだ。
やがて周囲に人の気配が集まる。フリオに続いて、キャロや英雄たちが到着したのだ。
彼らも二人の闘いが始まる様子に驚いている。
リオンは——気が散る、と思った。せっかくの楽しみを邪魔されて、胸の内で子供のように腹を立てた。そしてその込み上げる怒りのままに、剣を振り上げた。
ついにリオンの形相が、獲物を仕留める獣のごとく変貌した。
チャットに襲いかかる!?
まさに、その時——。
「チャット！　やっとこチャットが見つけたナ！」
のうてんきな声が、横から飛び込んできた。
「!?」

斬り込もうとしたリオンの気分が、激しく害された。
思わず脇に目を向けると、英雄たちの輪の中からメルディが飛び出してくるところだった。
「メルディさん？」
リオンと一騎討ちするはずだったチャットも、その駆け寄ってきたメルディに気を取られてしまった。
「チャットー」
「メルディさん！」
さっきまでの闘志はどこへいったのか？
信じられないくらい、表情が朗らかに変わり果ててしまっていた。
「さすがボクの子分！　助かりまし……ハッ！　メルディさんがいるということは、まさか……」
とたんにチャットは、あたりを警戒する。
「ククク、クィック、クィッキー！」
フワフワした青いフサフサの毛をした小動物が、いきなりチャットめがけてジャンプしてきた。

クィッキーである。

「うわ～ッ!!　やっぱり！　クィッキーのアホも一緒ですか！」

「クィッキー、よかたナ！　お友だちが増えたヨー！」

「うわ～ん！　何度言えばわかるんです。ボクは、このフサフサが苦手……」

「ククク、クィッキー！」

クィッキーは、チャットにスリスリする。

「ぎゃ――――――ッ!!」

チャットの悲鳴が霧の中に轟いた。

このとき、決闘するはずだったリオンの姿はもうどこにもなかった。

＊＊＊

「お～い、オレェ！　みらいのカギを手に入れちゃったぞ～っ！」

忘れられていたかのように――久しぶりにその声を聞かせたのは、何をかくそう競争相手の悪フリオだった。

「こんな幕切れ、つまんないぞォ！　お前の実力は、その程度かァ～！　情けないぞ

〜！　じゃあな〜！」
と、言うだけ言って、霧の中に立ち去ろうとした。
しかし、
「うっ――」
「逃がすもんか」
悪フリオの行く手に立ち塞がったのは、クレスとミントだった。
「くっ――だったら、こっちだ！」
慌てて向きを変えて、悪フリオは別の道に駆け出す。だが、そちらにも霧の中から人影が現れる。
ウッドロウとリオンだった。
「どこへ行くのかね？　悪いが、ここから先は行かせないよ」
「気をつけろよ。今の僕は、少々苛立って（いらだ）いるんだ――」
ウッドロウとリオンが、悪フリオを睨みつけてくる。
「くそっ！　なら、こっちだ！」
とっさに別の道に走った。だが、そちらにも霧の中から人影が現れる。
カイルとロニだ。

「おっと、すまねえけど――ここから先は、オレたちが通さねえ」
「ロニの言うとおりだよ！　もう逃がさないからな！」
またもや退路を塞がれた。
気がつくと、悪フリオは伝説の英雄たちに取り囲まれてしまっていた。
油断してまた近づいてくると、フリオたちは読んでいたのだった。
「おい、鍵をこっちに渡してもらおうか――」
フリオが、英雄たちに取り囲まれた悪フリオに近づいてくる。
もはや袋のねずみ状態だった。
しかし悪フリオは、平然と笑いだした。
「やれやれ、わかっちゃいないね――ミナクルの町が無事なうちに魔王を倒さないと、とんでもないことになるって言ってるのに。まだわからないのかよ？」
往生際の悪いその一言に、フリオがカッとなった。
「うるせェ！　だいたい魔王を復活させるから、世界が大変なことになっちゃったんだろうが！　自分たちの腕だめしかなんだか知らないけど、眠ってる魔王をわざわざ叩き起こすバカがどこにいるんだよ！」
「そうよそうよ！　フリオの言うとおりだわ！」

隣でキャロも勢いづいた。

「何百日後の私たちか知らないけど、最初に魔王を復活させたのが間違ってたのよ——未来の不始末を、過去に戻って私たちに押しつけないでよね！」

「うんうん、そうだそうだ！　キャロの言うとおりだ！」

フリオが腕を組んで、同感とばかりに頷いた。

勝利者の余裕だった。

そして最後に、決め台詞のように言い放つ。

「だから未来は——私たちがやり直すわ！　魔王はどんなことがあっても復活させない！　さあ、鍵をよこしなさいよ！」

キャロが手を出して、悪フリオに迫っていく。

すると、そのときであった！

悪フリオがいきなり、まばゆい光に包まれた。

「う、うわっ！」

あまりの眩しさに、フリオたち一同が顔をそむける。

不意を突かれてしまった。おかげで全員が、悪フリオの姿を見失ってしまう。

だが、なんとか——悪フリオの姿を視界に捉えようとした。

そして、光り輝く天使の姿を認識した。
「な、なんだって！」
フリオは戦慄（せんりつ）した。
光の中から現れたのは、ユグドラシルだったのだ。
信じられないことに――悪フリオは、《ユグドラシルの服》を手に入れていたのだ。
「フハハハハッ！」
黄金の髪に、純白の衣（ころも）をまとうユグドラシルが、その翼を大きく広げて舞い上がる。
「あっ、待て！」
フリオが捕まえようとして駆け出す。そのまま床を蹴ってジャンプするが、ユグドラシルの体を捉えることができない。さらに上空へと舞い上がったユグドラシルの近くには、なんと時空転移してきたドリーム２号が現れた。
「何っ!?」
着地したフリオが驚いて見上げる。
上空で静止したドリーム２号のハッチが開き、ユグドラシルがその開いたハッチの上に降り立つ。その瞬間、ユグドラシルは悪フリオの姿に戻った。
「へへーんだ、ご苦労さ～ん！　これで、もうすぐ魔王の封印を解くことができるぜ！

鍵は、あとひとつだからな！」
時の吹きだまりに勝ち誇った悪フリオの声が響く。
元々こうなることを予想して、ドリーム2号に乗った悪キャロをどこかで待機させていたのだろう。逃げるための段取りがきちんとできていたのだ。
ハッチの上に立って見下ろす悪フリオが、眼下のフリオたちに告げた。
「でも、正義の味方としちゃあ、今回の作戦は自慢できないよなァ～。なんか盛り上がりに欠けてつまんないぜ。だから最後にチャンスをくれてやるよ！」
「最後にチャンスだって？」
フリオが悔しそうに睨み上げる。
続いて悪キャロの声が聞こえた。どうやらドリーム2号の機能を使っているらしい。拡声されて、みんなに聞こえるように響き渡る。
「遺跡の地下四階！　扉の前で待ってるわ――今度は、フリオとキャロ、あなたたちだけで来なさい！」
「わ、私たちだけで――」
見上げるキャロが険しい表情になる。
「なりきり師四人！　オレたちの勝負に、世界の命運をかけようぜ！」

悪フリオは高らかに宣言すると、ドリーム2号の中に消えた。
何を考えているんだ、あの二人は――。
本当に、魔王を倒したいのか。
それとも、百日前のフリオたちをからかいたいだけなのか。
よくわからなくなる。
そんな思いで見上げていると、ドリーム2号は時空転移して時の吹きだまりから消え去った。
霧で覆われた世界に、静寂が戻ってくる。
誰もが無言（むごん）だった。
いよいよ最後の闘いが近づきつつあった――。
フリオとキャロは、それを覚悟しなければならなかった。

第八章　運命を変える冒険

＊＊＊

「もうダメだ——オレたちは終わりだ！」

フリオは古代史研究所の机に伏せて、頭を抱えた。

帰還したドリーム号から降り立つと、押し黙ったままブラウン博士とホワイト博士のいる研究室に入り、余った机に倒れ込むように突っ伏したのだった。そして、しばらく泣いているかのようにそのまま動かなくなった。

完膚なきまでにやられた。

結局、悪フリオたちに敗北し、とうとう最後の《きぼうのカギ》まで奪われてしまったのだ。

「も、もうダメだよ……かあちゃん……オレ、負けちゃったよ……ううっ……」

「お母さんなんて、会ったこともないくせに——」

追いかけてきたキャロが、研究室の入り口に立ってつぶやいた。
情けない話だが、これが現実だった。
今日は勝負を挑(いど)まれての冒険――フリオとキャロが『超古代都市』と『浮遊要塞(ふゆうようさい)』の二手に分かれて、魔王封印の最後の鍵(かぎ)を手に入れるべく闘ったのだった。
それなのに、二人とも途中までは善戦したのだが、最後の最後で悪(わる)フリオたちに負けてしまった。
歴史は彼らの味方をしているのだろうか。
そんなことを考えてしまうくらい、悪フリオたちの思うとおりに事(こと)は進んでいた。
「キ、キャロ……」
ブラウン博士とホワイト博士が立ち上がって、こちらを見つめている。その表情は両博士とも、がっくりと沈んでいた。たぶん説明しなくても結果がわかるのだろう。キャロは申し訳なさそうに俯(うつむ)いて、フリオのほうに歩み寄った。
「これで、魔王の復活は……彼らの自由自在ね……」
隣で、あきらめるかのようにつぶやいた。
フリオはかぶりを振り、ドンと机を叩(たた)いた。
「そんなことさせるかよ!」

「だけど――」
キャロは辛（つら）そうにつぶやく。
こんなことを言いたくはないけど、もう言わざるを得なかった。
事態は、そこまで切迫（せっぱく）していたのだ。
「私たちに残された、最後の手段といったら――」
そう、それは悪フリオたちと同じことをすることだった。
同じこととは――ドリーム号に乗って過去に戻り、奪われたカギを先にこちらで手に入れてしまうこと。それが彼らに勝つ最後の方法だった。
「でも、それじゃあ……私たちも、あいつらと同じになっちゃうわね」
キャロがそれだけは嫌だと、首を振った。
理由はどうであれ、同じことを繰り返してはならない。
魔王を倒（たお）し損（そこ）なって――過去に戻って、やり直す。そもそも、こうした未来の自分たちの行動が歴史をおかしくさせてきているのだ。
悪フリオたちに負けたくないからと、自分たちまで同じ手段を選んでしまったら――
このミナクルの町の歴史はさらに複雑化し、ワケがわからなくなっていく。
「ひょっとしたら、彼らも似たようなきっかけだったのかもね……」

ぽつりと、キャロが言った。

悪フリオたちも、未来の自分たちに負けたくないからという動機で過去に戻ったのかもしれない。そうやって延々と繰り返されてきているのかもしれない。だとしたら、それは悪しき連鎖だ。

できればこんな連鎖は、自分たちの時代で断ち切りたい。

「やっぱり、もう一度行こう——『レミ遺跡』の地下に！」

フリオが決意したように立ち上がった。その目に、再び闘志が宿っている。

敗北を認めたくない表情だった。

「キャロ——未来の自分たちの責任は、やっぱりオレたちが取ろう！」

「フリオ……」

「あいつらを倒す——もしあいつらが魔王を復活させてしまったら、その魔王と闘おう！」

大胆な提案だった。

あっさり言ったが、それは大変なことだった。

未来の自分たちにさえ勝てないのに、その彼らが最も恐れている魔王との決戦を覚悟するとは——あまりに無茶な考えだ。

本気なのか。

本気で勝つ気でいるのだろうか。

負けた悔しさがフリオをヤケにさせているのかと思ったが、しかし彼の目は真剣そのものだった。

だからキャロは、思わず訊ねてしまった。

「死ぬ気なの、フリオ？」

真顔でキャロに問われて、フリオは一瞬目をそらした。キャロまでをも巻き込もうとしている自分を恥じているような横顔だった。痛いほど、その気持ちが伝わってくる。

だからキャロは何も言わずに、彼の言葉を待った。ちらりとこちらを向いた視線に、キャロは薄く笑みを浮かべて頷いた。

——言って欲しい。

今考えていることを。

心の中で願い、それをフリオに無言で伝えた。

彼はわかってくれたらしい。振りしぼったように勇気を出して、フリオがキャロに訊ねてきた。

「……やれるか？　この町のために」

それはキャロにとっても一大決心を促(うなが)す質問だった。

正直、ためらってしまう。

しかしキャロの脳裏(のうり)には、これまで闘ってきたフリオとの歩みが思い出された。

最初は、リフィル先生に叱(しか)られてばかりの二人だった。だけど今は、自分たちで判断し、答えを出そうとしている。

いつもフリオは、怯(ひる)まずに挑んできた。

だから今がある。

今の彼の強さ、決断力、そして意志のすべては、昨日までの経験が物を言ってるのだ。

だからここで、自分も答えを出さなければならない。

自分の気持ちに素直になって。

「……いいわ。フリオとだったら、何処(どこ)へだってついていく」

キャロは返事した。

一大決心をこんなにも早く口にしてしまっていいんだろうかと思うくらいに、あっさりと、そして微笑(ほほえ)みさえ浮かべて、彼に答えたのだった。

「だって、明日は今日より大変なんだからね――」

と、キャロが笑ったときである。

「お前たち――」
ブラウン博士とホワイト博士が、そろって声をかけてきた。
振り返ると、両博士がそばに来ている。大人が何もできず子供に任せてしまっている、その辛さが表情に滲み出ていた。
「おそらくこれが、本当に最後の闘いになるじゃろう……わしらも覚悟はできておる」
「存分に闘ってくるがいい。わしらは、お前たちのことを信じておるからな」
そう励ますのが、精一杯の様子だった。
フリオとキャロは力強く頷いた。
二人とも、博士を責める気も甘える気もない。
むしろ自分たちが、町の未来を背負うほどにまで成長できる機会を与えてくれたことに感謝していた。
「そうじゃ、最後に聞いてくれるかのう――」
ホワイト博士が思い出したように記録書を開いた。
「例の石版だが、続きがまた少しだけ解読できたんじゃ」
「本当ですか？　スゲェ！」
「ホントに博士って、研究熱心なんですね！」

フリオとキャロが盛り上がる。

聞いたからといって、べつに悪フリオとの闘いで勝利するわけでもないが——今の二人には、過酷な試練を少しでも忘れられる話題が欲しかった。

「ジャババという科学者が、未来から過去の世界に逃げたが——誰も追跡できなかったという話を以前にしたが、覚えているかね？」

横からブラウン博士が訊ねてきた。

「ああ、覚えてるぜ！」

フリオが明るく言った。

するとホワイト博士は、記録書をめくりながら説明した。

「その続きによると、追跡を志願した若い男女が一組だけいたようなんじゃ」

「若い男女が？」

フリオとキャロは、お互いを見つめ合った。

まさか自分たちと同じようなコンビが、未来にもいたとは——。

二人はクスッと笑い合う。

そう聞いただけで、何か親近感のようなものが湧いてきた。

「そして、ついに遠い過去の世界で、その若い男女は科学者を発見！　だがしかし科学

者は、過去の世界では〝魔王〟と呼ばれる絶対君主だったのだ――と、あるな……」
「やっと話がつながったわね！　《なりきり服》を着た未来の若者たちは――魔王軍を倒して、魔王ジャバババを封印！　めでたしめでたし、と続くのよ♪」
キャロが自分で物語を創作して、勝手に盛り上がる。
今に始まった行為じゃない。英雄伝説を読んだキャロの感想は、いつも書かれていない行間を埋める想像力へと発展していた。でも、さっきのはいささか強引で飛躍しすぎに聞こえた。未来の男女が魔王に勝ったなんて、博士は言ってないのに――そう決めつけようとしていた。
まるで無理して、明るく振る舞おうとしているみたいだ。
いや、おそらく自分を勇気づけたかったのだろう。
そんなキャロの姿をフリオは感心して見つめた。
見つめているうちに、いじらしいとさえ思った。
「……でも、その若い男女って……その後どうなったんだろ？」
その疑問だけが、頭の中に残った。

＊＊＊

「へへっ……あいつら今ごろ、オレたちからの果たし状を読んで驚いてるだろうな」
樹海の中から悪フリオの声がする。
眼下に広がるのはミナクルの町。川にぐるりと囲まれ、水色やオレンジ色の豊かな色彩の屋根が並んでいる。緑と調和のとれた美しい町だった。
悪フリオの視線は、その中の一軒に注がれていた。
――あすなろ園。
フリオとキャロの住む孤児院である。
今からちょっと前の時刻に、悪フリオはそのあすなろ園の前までこっそり赴き、入り口に一通の手紙を投げ込んできたばかりだった。
手紙の内容は『明日、記念すべき魔王復活の日――レミ遺跡の最下層にて、最後の勝負を待つ』という、いわゆる決闘の申し込みである。
くっくっくっ……どんな顔して読んでいやがるだろうな。
そのレミ遺跡の上に覆い繁った森の中に戻るなり、悪フリオはフリオたちの姿を想像

して楽しんでいた。

「結局、出してきたのね？」

後ろから、悪キャロの声がした。

振り返ると、彼女は整備中のドリーム2号の中から出てきたところだった。

草を大量に載せて隠した時空転移装置。その脇には丸太や木材で作った小さなログハウス、外に二つ並んだ椅子とテーブルがある。悪キャロが《プレセアの服》に着替えて作ったそれらは、売りに出せるほどの見事な出来ばえだ。

一方の悪フリオは《商人の服》に着替えて町で商いをし、食材を買い込んでレミ遺跡の上に繁る森に戻り、ワンダーシェフになって調理——と、ここはちょっとした二人の生活空間、いや、アジトのひとつになっていた。

見晴らしのいいレミ遺跡の上からなら、あすなろ園の様子も、そして古代史研究所に向かうフリオたちの姿も確認できる。絶好の監視場所だ。

「喜べ！　明日は、またあいつらと遊べるぜ！」

悪フリオは監視していた樹木の陰から離れ、ドリーム2号の表面の汚れをきれいに拭いている悪キャロに近づいた。

「もう、何回チャンスを与えれば気が済むわけ？」

悪キャロはうんざりした口調だった。気のせいか、ドリーム2号の汚れを拭く手も速まり、苛ついてるように見えた。

「な、なんだよ？」

悪フリオは意外そうな顔をする。

「……楽しくなかったのかよ」

ふてくされたように言って、悪フリオは草でカムフラージュしたドリーム2号の脇にあるテーブルに近づいた。

ログハウスの前にしつらわれた二人の憩いの場所——そのテーブルの上には、彼らが被っていた、赤と青の仮面が仲良く置かれている。

悪フリオは椅子に腰かけ、二つの仮面を何気なく眺めた。

……オレは、楽しかったぜ。

多分、もう二度と使うことのない仮面を指先で触れながら、悪フリオが心の中でつぶやいたときだった。

ふいに、

「――私も楽しかったわよ」
ぽつりと、悪キャロが言った。
顔を上げると、彼女はドリーム2号の拭き掃除の手を止め、こちらに近づいてきた。
「楽しかった――ずっとずっと、繰り返したいくらいにね」
それを聞いた悪フリオが慌てる。
「おいおい、よせよ。『ねこにんの里』みたいになるのはゴメンだぜ？」
釘をさすように言った。
「もうこれ以上、失敗するわけにはいかないんだからな」
「わかってるわよ――」
ため息をついて、悪キャロは自分も悪フリオの前に座った。そしてしばらく考えたのち、いたずらっぽい笑みを浮かべる。
「本当は、負けてみたかったりして……」
「えっ？」
「フフッ、負けてみるのも一興かもね？」
「だ、誰にだよ？」
「あいつらによ――」

冗談とも本気ともつかない言葉に、悪フリオは引きつった顔になった。
すると悪キャロは真顔になって、策略家のように声をひそめてきた。
「今やたくさんの英雄たちを集めて、ガンガン本気になってきてるわよね？」
悪フリオはムッとした表情になる。
彼女の言いたいことはわかる。おそらく試してみたいのだろう。
連鎖する現象に終わりが訪れ、ひょっとしたら自分たちは別の存在として新たに生を受けられるかもしれない。
そう期待したまなざしだった。
「こ、困らせるなよ……」
「困らせてるわよ……」
彼女にそんなふうに寂しげにつぶやかれると、気持ちがつい揺らいでしまう。
いけない、いけない……。
悪フリオは自分を見失わないよう、かぶりを振った。
そんなに都合よく運命が流れるはずがないのだ。
――とにかく、あいつらと遊ぶのは明日が最後だ。
遊びは遊び。そのけじめは、どこかでつけなきゃいけない。

そのことを自分に言い聞かせようと努力した。
「フフッ、ごめん……もう言わないわ」
悪キャロは、そんな悪フリオの様子に気がついたように謝（あやま）った。
たぶん、迷って悩み始めた表情を読み取ったのだろう。
二人の気持ちが同じだということを理解しているはずなのに、自分だけワガママを口にしてしまった甘えを反省しているかのようだった。
「バカ……」
悪フリオは愛情をこめて、そう言うしかなかった。
そして、意味深（いみしん）につぶやいた。
「これから、いい方向に変わってくれりゃいいんだけどな……」
そこには、できることなら運命の連鎖を変えてみたいという思いがこめられていた。
それにキャロも気づいた。
「大丈夫よ。私たちが連鎖の中で、頑張り続けているかぎり……いずれ、何かが変わるはずよ……」
「それはただ、苦しくなるだけかもしれないぞ」
忠告するように悪フリオは言った。

　すると彼女は、いつもの言葉を返す。
「いいわよ。明日は今日より大変なんだから――」
　二人は笑った。
　そして一緒にワンダーシェフに変身し、夕食の準備に取りかかった。
　陽は、すでに落ちていた。

＊＊＊

「なあ、キャロ……なんでだ？　最後の鍵を手に入れたのに――あいつら、なぜすぐに魔王の封印を解こうとしないんだ？」
　あすなろ園に投げ入れられた果たし状を読んだあと、フリオはどうも解せない顔で訊ねた。
　古代史研究所から、捨て身の覚悟でレミ遺跡の地下に突撃しようとしたときだった。
「こんなものが届けられたよ～」
　と、あすなろ園の子供のケンとリンダが果たし状を二人に持ってきたのだ。
　悪フリオからだった。

文面は、『明日の朝、レミ遺跡の地下に来い——最後の決戦をしようじゃないか』というものだった。キャロはそれを読んで、だったら明日にしようと予定を変更してしまった。ブラウン博士とホワイト博士も、向こうがそう言うのだから今日は休息をとったほうがいいと助言してきた。フリオだけが、なんだか落ち着かなかった。

あいつらのことを、そんな簡単に信じてしまっていいのだろうか？

いや、なぜ悪フリオたちはさっさと目的を達成しようとしないのだろう。

どうしてオレたちのことを、そこまで気にするのか——。

さっぱりわからなかった。なんだか意気込んだ気持ちを削がれてしまったが、フリオはとりあえずキャロとあすなろ園に戻り、夕食を終えてから、また悪フリオが出してきた果たし状を読み返してみた。

そしてやっぱり疑問が消えなくて、キャロに訊ねたのだった。

夕食の片づけを終えたキャロは、フリオのそばにやってくるなり「まだそんなこと気にしているの？」という顔をした。

「——気にならないのかよ？」

「だって、なんとなく……あいつらの気持ちがわかるんだもの」

「えっ？」

キャロはエプロンを外しながら、フリオの向かいの席に座った。そして果たし状をフリオからもらい、自分も読み返すと、
「もしかしたら、魔王を復活させたくないのかもね」
と、あっさり笑顔で言った。
「おいおい、それってどういう意味だよ?」
フリオは何もわからない子供のような顔をして、首をかしげた。
ひょっとして、わかってないのは自分だけなのか。そんな心配にかられた。
最後の鍵を奪われて、魔王がいつ復活してもおかしくない状態なのに——ブラウン博士もホワイト博士も、それからキャロも、安心しきっているかのように落ち着いている。わざとそうしているのか、それともフリオが知らない何かに気がついたのか、果たし状を読んで以来、雰囲気(ふんいき)がそれまでとまるで違うのだ。
「あいつらの目的は、魔王の復活じゃないっていうのかよ?」
フリオはさらに問いかけた。
しばらく黙(だま)って果たし状に視線を落としていたキャロは、顔を上げて考え込んだのちに言った。
「よく　わからないけど……まだどこかで迷ってるんだと思うわ」

「迷ってる？」

「うん……そうとしか思えない」

確信を持った言い方だった。

フリオはたまに、こうしたキャロの自信にあてられることがある。

「だから私たちを倒して、過去に踏ん切りをつけたいのよ」

「踏ん切り……」

「そうよ。迷いを断ち切りたい——だから、向こうのほうが一日置きたかったのよ」

つまり、決心するための時間だということだ。

キャロは、そういう迷いが敵の側にあると、果たし状の行間から読み取ったのである。

なるほど、言われてみると納得できる。

敵が今までとは違い、からかったりふざけたりせず、本気でトドメをさしにくる——その気持ちの切り替えのための時間。今夜はそのために必要であり、特別な意味があったということなのか。

本気で倒しに来る——。

フリオは背筋が凍りついたような気がした。

「たぶん百日分、向こうが強いから——明日は、今日より大変よ」

脅かすようなひと言だった。
しかしキャロも運命を共にするのだから、これはフリオをからかおうとかそういう類のものではない。自分に向かっての言葉でもあるのだ。
「……負けないけどな」
フリオは強気で言い返した。
「負けないけどね……」
キャロも強気で答えた。
と、そのときである。食堂の窓をトントンと、誰かが叩いた。
びくっとして、二人とも顔を見合わせる。
「こ、こんな時間に……誰だろ？」
「用があるなら玄関から入ってくればいいのに――」
怪訝そうな顔をして、キャロが席を立つ。
気になるのでフリオも立ち上がって、一緒に窓際に向かった。
「ま、まさか、悪フリオじゃ――」
緊張して言うと、
「まさか――」

キャロは自分もよぎった恐怖を打ち消そうと、思いきって窓を開けた。
ガラッ。
すると、開けた瞬間――驚くべき光景が目の前に広がった。
「……み、みんなっ⁉」
「どうして……」
フリオもキャロもびっくりして、途中までしか言葉が続かない。
あすなろ園の庭に、伝説の『テイルズ オブ』世界の英雄たちが勢ぞろいしていたのだ。
クレス、ミント、チェスター、クラース、アーチェ、すず、スタン、ルーティ、リオン、フィリア、ウッドロウ、チェルシー、マリー、コングマン、ジョニー、リッド、ファラ、キール、メルディ、フォッグ、チャット、レイス、カイル、ロニ、リアラ、ナナリー、ハロルド、ロイド、ジーニアス、コレット、リフィル、しいな、ゼロス、プレセア、リーガル、クラトス……そうそうたるメンバーの三十六人が集結していた。
しかもみんな、フリオとキャロのほうを見つめて微笑んでいる。
「ど、どうしたんだ……みんな？」
「……何かあったの？」

フリオとキャロは、二人して窓から全員に話しかけた。
最前列には、一同を代表してクラトスとリフィルがいた。
「二人に向けられた果たし状なのだから、私たちが手出しするべきではない——最初はそう考えていたのだけれどね」
リフィルが、ちょっと困ったような表情を浮かべて言った。
「だが、たとえ住んでる世界は違えど——今まで仲間として、冒険を共にしてきた。最後まで見届ける義務がある」
謎の傭兵として、ロイドの父という正体を隠すクラトスが、リフィルの隣で言った。
「さ、最後まで見届けるって——」
フリオが震える声で訊ねると、
「そう、最後までだ。もちろん君たちの決闘では、手出しをしない——」
渋い声のクラトスが答える。
「だけどね、そのレミ遺跡の地下にたどり着くまでの間——あなたたちがモンスターとの闘いで消耗しないよう、私たちが手伝わせてもらうわ」
と、リフィルが決意したように続ける。
それは、少しでも役に立ちたいと願う彼らの気持ちだった。

「……あ、ありがとう……みんな……」

キャロはその気持ちに打たれたかのように、涙ぐんで礼を言う。

「二人とも、自らが正しいと思う道を信じて、まっすぐ進むがいい」

「さあ、この闘いのけじめを――つけてらっしゃい！」

先生らしくリフィルがしめくくる。

「うん！　オレたち、結果を気にせず最後までやるよ！」

窓から顔を出していたフリオがみんなに誓った。

「明日は今日より大変！　みんな、よろしく頼むわね――」

キャロは感謝の気持ちをこめてお願いする。

あすなろ園の庭に集結した一同は、快(こころよ)く頷(うなず)き返(かえ)した。

そして夜が更(ふ)けた。

＊＊＊

――魔王の復活か？

それとも未来の自分を倒せるのか？

いよいよ決戦の日がやってきた。
ついに運命が決する日だ。
その日の朝——フリオとキャロはあすなろ園を出発し、町外れにあるレミ遺跡へと向かった。
もちろん、三十六名の『テイルズ オブ』世界の英雄たちも一緒である。
フリオとキャロを含めると、総勢三十八名に及ぶ大編成だ。
それが今、レミ遺跡の入り口に到着したのだった。
崩（くず）れかけた石柱が並び、見上げると神殿の屋根の上には、覆い被さるように鬱蒼（うっそう）と繁った森が見える。
地震の影響によって発見されるまでは、ここは山の中に隠されていたのだ。
掘り起こされた神殿の玄関柱廊に入ると、いつもよりおびただしい魔の気配（けはい）が漂ってくる。おそらく魔王復活を予期した異界の存在が、こぞって集まり始めているのだろう。
「よし、行こう」
フリオは先陣（せんじん）を切った。後（おく）れを取るまいと、後続の英雄たちが続く。
薄暗い階段に、一同の足音が響く。
まずは地下一階のフロアにたどり着く。壁面に飾られた、王家の紋章（もんしょう）や壁画が目に

ついた。さっきより、魔の気配は濃くなってきている。

「気をつけろよ、来るぞ！」

ファンタジア世界のクレスが剣を振りかざす。

その刹那（せつな）、ファントムナイト、クリミナル、トールマン、ノクターナルフライといった強靱（きょうじん）な魔物が寄り集まってきて、侵入者の一団を取り囲んでいく。

「ここはオレに任せろ！」

言うなり床（ゆか）から台座の上へと跳び上がり、キラリと剣を抜いた。

リッド、コングマン、マリーがこれに続く。

真っ先に台座の上に跳び上がったクレスは、迫りくるセージに斬り込んでいく。

グアアアァッ！

と倒れる地響きが奥で眠っていた怪物どもを、さらに呼び起こした。あちこちから獣（けもの）の唸（うな）り声（ごえ）がフロアに響き渡り、とたんに周囲が騒がしくなる。闘いの火蓋（ひぶた）が切って落とされたのだ。

「奥だ！　奥へ進め！」

騒ぎの中でクラトスが叫んだ。

それと同時に、何人かがフロアの奥にある隠し階段へと向かった。

　怪物は、次々に柱の陰から飛び出してくる。たちまち全員が魔物の群(む)れにつかまり、乱戦となった。誰も奥の隠し階段へ進めない。

　フリオとキャロは並んで駆けた。

「キャロ、遅れるなよ！」

「わかってる！」

　石畳(いしだたみ)の広間を突っ切って、奥の隠し階段をめざすが、脇から現れたサンダーソードに行く手(ゆくて)を塞(ふさ)がれる。

「くそっ、邪魔するな！」

　フリオはすぐさま《剣士の服》に着替え、そいつを剣で打ち払った。

「きゃあっ！　こっちもよ！」

　脇から現れた獅子(しし)の姿をしたガローに襲われ、キャロが悲鳴を上げる。しかしそれも束の間(つかのま)のことで、彼女は身を翻(ひるがえ)しながら片手を高く突き上げ、《ナースの服》になりきりチェンジする。

「行くわよ！」

　叫ぶなり手に抱えた極太(ごくぶと)の注射器を、そいつの脇腹に刺した。

「ええーい、たっぷり注入してあげるわ！」

今度は獅子のガローが悲鳴を上げた。
だがキャロが勝利の声を上げる間もなく、新たな怪物が次々に群れとなって目の前に現れる。どうあっても先に進ませない気だ。
「くそっ！　キリがないぜ――」
「どうするの？　フリオ！」
さすがに二人で立(た)ち往生(おうじょう)した。
だが、そのときだ。
ファンタジアチームのメンバーが駆けつけ、フリオたちの目前に居並(いなら)ぶ怪物どもを蹴(け)散(ち)らしていく。
――活路(かつろ)が開けた。
「今のうちだ！　さあ行け！」
「私たちが、ここで盾(たて)になります！」
クレスとミントが、叫んだ。
フリオは言葉を返せなかった。
「み、みんな……」
彼らの目は、本気だった。

まずクレスが言った。

「フリオ、キャロ、僕はいつも思ってた――一番の敵は、常に自分自身だって。本当に自分自身と闘うなんて――ちょっとヒニクだけど、せいいっぱい闘っておいで！」

「お二人のご無事（ぶじ）を、ここでお祈りしています！」

と、ミント。

「フリオ、キャロ、楽しみにしてなさいよ！　あいつらに勝ったら――あたしの手料理でおめでとうパーティだからね☆」

と、アーチェ。

「私なら大丈夫だ。私には、まだ証明したい理論も――待ってくれている者もいるんでね。こんなところで死にはしない！」

と、クラース。

「忍者は、任務（にんむ）から必ず生きて帰ってくるもの。私はそう教えられて育ちました。我（わ）がイガグリ流の教えです――フリオさん、キャロさん、必ず生きて帰ってきてください！」

と、すず。

無口なチェスターも、ついに口を開く。

「誰かが誰かを守らなきゃいけない世界なんて、まっぴらだ！　フリオ、キャロ、お前たちはこの世界をそんなふうにしないでくれ！」
願いが伝わってくる。フリオは頷き返す。
すると彼らは左右に背を向けて立ち、防壁のごとく並んだ。それは奥の隠し階段までの通り道のようにも見えた。
「オレたちの間を突っ走れ！」
「魔物は近づけさせません！」
「みんなも続け！　フリオたちを頼んだぞ！」
「おうっ！」
クレスの声を受けて、ほかのチームがフリオたちを囲むように集まってくる。
「行くぞっ！」
「すまねえ、助かるぜ！」
一同がフリオとキャロを守りながら前進する。クレスやミントたちに挟(はさ)まれながら奥の隠し階段へ向かうと、当然のように怪物が左右から襲いかかろうとしてくる。
それをクレスやミント、チェスターやアーチェたちが近づけさせないように必死で守り抜く。フリオたちは周りを英雄たちに囲まれながら、古代文字の刻(きざ)まれた石壁へとた

どり着いた。

「キャロ、頼むぞ！」

「任せておいて！」

キャロは《学者の服》に着替えると、すぐさま壁の穴に手を突っ込み、扉を開けるスイッチを押す。

ゴゴゴゴッ……。

石が床を擦る音がして、扉が開いた。中には隠し階段の入り口が見える。もう何度も訪れた場所だ。フリオとキャロは脱兎のごとくその中に駆け込む。英雄たちも続いた。ファンタジアチームもその隠し階段の入り口近くまで寄ってきて、迫りくる魔物を次々に追い払っていく。

「ミント、扉を閉めるんだ！」

「はい、わかりました！」

学者の服を着たキャロがやったようにミントは古代文字の刻まれた石壁に体を寄せ、逆のスイッチを押した。

ズズズズッ……。

今度は扉が閉まっていく。

それを見た魔物が、怒りも露（あら）わに吠（ほ）えた。
「お前たちを、ここから先へは行かせんぞ！」
クラースは召喚（しょうかん）の術を唱（とな）えた。
「みんな、全力でこの扉を守り抜くぞ！」
クレスが叫びながら、扉に迫る怪物どもに向かっていった。

＊＊＊

「オレはいつも、大切な人を守りたいから闘ってるだけなんだ——フリオ、キャロ、お前たちも同じだよな？　だったら、自分と仲間を信じて、最後まであきらめずにがんばれ！」
そう訴えてきたのはスタンだ。
今度は、デスティニーチームのメンバーが盾になると宣言してきたのだ。
「あ〜あ、あたしのガラじゃないわね。またお金にならないことしちゃって！　フリオ、キャロ、わかってるでしょうね？　負けたら、タダじゃおかないわよ。絶対勝ちなさい！」

と言ったのは、ルーティだ。
そしてフィリアも——。
「フリオさんとキャロさんのお力になれたこと、うれしく思います。祈るばかりで、何もできないわたくしですが——お二人に神のご加護のあらんことを！」
ウッドロウも——。
「人には、それぞれ役割がある。フリオ君、キャロ君。二人とも、自分たちの役割はわかっているだろう？　自信を持ちたまえ。世界は今、キミたちを必要としている！」
マリーも——。
「胸の奥で、誰かがお前たちを守ってやれと言っている。記憶をなくした私にも、その声が正しいことだけはわかる。さあ、先を急ぐがいい！」
コングマンも——。
「このオレ様を足止めに使うとは、おめェらもエラくなったもんだな？　グズグズしてると、おめェらのエモノ、オレ様がいただいちまうぞ！　とっとと行って、ぶっ倒してきやがれ！　負けたらしょうちしねェからな！」
チェルシーも——。
「せんえつながら、ここは私にお任せください。これでも私、弓の名手とうたわれたア

ルバ＝トーンの孫娘ですよォー」
　ジョニーも――。
「ここが人呼んで〝蒼天（そうてん）の稲妻（いなずま）〟ジョニーのステージってわけか！　モンスター相手にしびれるジョニーナンバーを聴かせてやるぜ！　さあ、お前たちにはお前たちのステージで出番が待ってる！　ミュージシャンが観客を待たせちゃいけないぜ、べいびー」
　リオンまでも――。
「僕は、お前たちのことを仲間だと思ったことなどない！　だから――僕たちのことは気にせず、自分の闘いだけに集中しろ！　さあ、早く行け！」
　デスティニーチームの全員がフリオとキャロに声をかけ、そして闘いに赴いていく。
「ありがとう、みんな！」
　目頭（めがしら）が熱くなるのを抑え、フリオたちは隠し階段の入り口へと進んだ。
　地下三階に降り立った。
　そこは迷路のようになったフロアだった。残っているのはエターニアチームと新デスティニーチーム、そしてシンフォニアチームである。彼らもフリオとキャロの周（まわ）りを護衛するように取り囲み、行く手をはばむ魔物の群れを打ち払っていく。
「ここが、ヤマ場のようだな？」

「ああ、そうだね。連中も必死さ——ここから先に行かせまいと、うじゃうじゃ寄ってきてやがるよ！」
ロニのつぶやきに、ナナリーが答えた。
「とにかくやるしかないぜ！」
先陣を切ったのはロイドであった。剣を抜き放つなり、突進してくるクラーケンやワイバーンの攻撃を払い、さらに後続のルーターの槍を払い、ついに踏み込んで、上段から力まかせにシャドーサーバントの肩を斬り下げた。
が、転がったままのシャドーサーバントは、まだ生きている。胸部を特殊な鎧で覆っていたのだ。ロイドはさらに斬り下ろそうとしたが、ワイバーンが脇を狙って飛びかかってきた。とっさに跳ね退ける。と同時に、そいつの首筋へ背後からクラトスが激しく撃ち込んできた。間一髪だった。
「ロイド、脇が甘いぞ——」
ワイバーンをバラバラに斬り裂いたクラトスが、低く言った。
ばつが悪そうにロイドは頷くと、
「くそっ、負けてられるか！」
と、クラトスに対抗するかのように自分から魔物の群れへと飛び込んでいった。

気がつくと、ここでも乱戦になっていた。

伝説の英雄たちは円を描くような陣形をつくり、その輪を広げていく。輪の中心にいるのはフリオとキャロだ。その二人のそばにも護衛の英雄たちが残っている。

「さあ、今のうちよ！　奥まで突っ走って！」

護衛のひとりであるリフィルが叫んだ。

フリオとキャロは一瞬ためらった。

なぜなら残った全員が、ここに残る覚悟を決めた様子だったからだ。

「み、みんな……」

フリオは胸が痛んだ。

ここでも皆が、宣言してきたのだ。

二人の盾になり、魔物の足止めをすることを――。

闘いながら彼らは、フリオとキャロにそれぞれ餞（はなむけ）の言葉を贈ってくる。

「めんどうなことはさっさと終わらせて、メシでも食おうぜ！　もちろん、メシはファラのオムレツで決まりだな！」

エターニア伝説のリッドは相変わらず、ぶっきらぼうだ。

「私、自分ががんばることで、誰かが幸せになってくれたらホッとするの――フリオと

キャロも、きっと同じなんだよね？　そうよ、今まで頑張ってきた二人だもん。絶対、大丈夫。イケる！　イケる！」

と、ファラが続く。

「メルディ、フリオもキャロもケンもリンダもナオミも――ミナクルが町のみんな大好きナ！　だから、助けるが当然！」

と、メルディ。

「僕たちが残り、お前たちが進むことで得られる時間的アドバンテージは、敵の戦略を無効にし得るはずだ――ただ、こちらの戦力を分散せざるを得ないというデメリットが発生し……」

いつまでも喋っていそうなキールは、

「つまり個々の戦力を……って、おい！　人の話は最後まで聞け！」

やはり無視されていた。

続いて、

「人には誰しも、生まれ持って指し示された道がある。フリオ君、キャロ君、この先がキミたちの進むべき道だ。すべての世界の命運をキミたちに、委ねよう――」

と、レイス。

「ガハハハハ！　安心しろ！　これしきでアレするオレ様じゃねェ！　フリオ、キャロ！　ここは、オレ様がアレしといてやる！　だから、アレだ！　アレ！　くたばるんじゃねーぞ！」
　と、フォッグ。
「セレスティア人のボクには理解できない習慣ですが――シスターポーラから祈りというものを教わりました！　フリオさん、キャロさん、ボクは、お二人の勝利を祈ります！　ま、ボクの子分であるお二人に、負ける気づかいはありませんけどね！」
　と、チャットがしめくくる。
　続いては新デスティニーチームだ。
　激しい戦闘を続けながらも、彼らは器用にフリオたちに声をかけてきた。
「フリオ、キャロ、誰がなんと言おうと、オレが保証する！　キミたちは、もう立派な英雄だよ！　歴史に残るような……ううん、違うよ！　歴史を変えるほどの大英雄さ！」
　と、得意気なカイル。
「みんなと出会う前の私は、迷ってばかりだった――でも今は違う！　悩む前に行動して、決してあきらめたりしない！　フリオ、キャロ。結果をおそれないで！　たとえ後

悔しても、何もしなかった世界よりは、きっといい世界だから！」
　と、リアラ。
「フリオ、キャロ。このオレのカッコよさ、よ〜く目に焼きつけろよ！　そんでもって、もしこの先に美人のお姉さんがいたら——ロニさんのおかげで、ここまで来れたって、伝えといてくれよな！」
　と、冗談まじりのロニ。
「どうしたんだい、そんな顔して！　いっちょ前に緊張かい？　情けない顔すんじゃないの！　ケンとリンダに笑われるよ！　あの子たちのお手本になれるよう、頑張ってきな！」
　と、ナナリー。
「自分とケンカできるなんて——あんたたち、最高じゃない！　自分対自分！　あたしなら、ああして、こうしてェ……フフフ……こんな楽しみ、譲(ゆず)ってんだから、ぜ〜ったい、負けんじゃないわよ！」
　と、ハロルドがしめくくる。
　最後は、シンフォニアチームだ。
　彼らも器用に闘いながら、二人に声をかけてくる。

まずは、ロイドが――。
「照れくさいから一度しか言わねェぞ！　ドワーフの誓い第一番！　平和な世界が生まれるように、みんなで努力しよう、だ！　あ～ッ！　やっぱ恥ずかしいぞ！　ほら、早く行けよ！」
コレットも――。
「私ね、ロイドの『おかえり』って言葉がすごく好きなんだ～。ロイドが『おかえり』って言うから、戻ってきたって実感できるの！　私も『おかえり』って言いたいから、必ず帰ってきてね、約束だよ？」
リフィルも――。
「フリオ、キャロ、あなたたちは、とてもよい生徒だったわ。ふふふっ……まるで卒業式を迎えるような気持ちね。さあ、この闘いのけじめを、つけてらっしゃい！」
ジーニアスも――。
「フリオ、キャロ。ボク、別の世界にも友だちができるなんて、ちっとも思わなかったよ！　二人に会えて、本当によかった！　言いたかったのは、それだけ！　ほら、早く行けよ！」
クラトスも――。

「正しいことを行おうとする者には、それに伴(ともな)う力が必要だ。フリオ、キャロ。今のお前たちには、その力がある。自らが正しいと思う道を信じて、まっすぐに進むがいい！」

しいなも――。

「あたしのイガグリ流の教えは、任務から必ず生きて帰ること！　あんたたちも必ず、生きて帰ってきな。約束だよ！　守らないと、うちの里の伝統にのっとって針を千本、飲ませるからね！」

ゼロスも――。

「ここはオレ様に任せとけって！　ド～ンと泥船に乗ったつもりでな！」

「それを言うなら、ネズミの逃げ出す船だろ？」

思わずフリオが言い返す。

「どっちも沈む船じゃない？　すごく不安なんだけど！」

キャロがツッコミを入れる。

「うひゃひゃひゃひゃ！　グズグズしてねェで、行った行った！」

と、ゼロスは手で二人を追い払う。

そして、フリオたちが離れたのを見届けてから、

「……二人とも、死ぬんじゃねェぞ」
ゼロスはマジな顔でつぶやいた。
そしてプレセアは――。
「大丈夫です、私がモンスターの足止めに成功する確率は１００％――ちなみに、お二人の最終決戦の予想勝率は…………」
「えェ～ッ！　なんで、そこで黙っちゃうんだよォ！」
「こういうときは、ウソでもいいから１００％って、言ってよォ！」
フリオとキャロが焦る。
すると、
「……私なりの冗談です。予想勝率は……１２０％です！」
と、プレセアが薄く微笑む。
リーガルは――。
「一度、口に出した言葉には、その者の意志の力が宿る――だから、キミたちの口から聞かせて欲しい」
「絶対、勝ちます！」
フリオとキャロが答える。

「ふふふ、頼もしい限りだな。さあ、行くがいい！」
満足そうにリーガルは見送る。
フリオとキャロは駆けた。
隠し階段の入り口が、もう目の前だ。

＊＊＊

――しんとしていた。
レミ遺跡の最下層は、薄気味悪いほどに静かだった。
そこにたどり着いたのは、フリオとキャロの二人だけである。
最下層のフロアは地獄の底かと思えるほど不気味に、けばけばしく朱い蛍光色に輝いていた。魔王の気がもれてきているのだろうか。肌がピリピリするような、禍々しい気に満ちている。まるで猛毒に侵されそうな身の危険を、ヒシヒシと感じさせる気だ。
そのせいか最下層には、魔物の存在がない。さっきまでの喧騒が嘘のようだ。もしかすると魔王の存在に近すぎて、寄ってこられないのかもしれない。
フリオとキャロは、そんな中をそろって歩んだ。通路は単純。正方形の部屋が均等に

並び、その間を通っているだけだった。
「私たちだけに、なっちゃったね……」
ふいに、キャロが沈黙を嫌ったかのようにつぶやく。
ちょっとしんみりしていて、まるで初めて二人っきりになったみたいな口ぶりだ。
なぜかそれを聞いて、フリオは胸がどきどきした。
闇の中へと突き進む運命を共にしているという事実を前にして、
やっぱり、キャロだな……。
と思っていた。
べつに相手を選んだわけじゃないけど、気がつくと、必ず隣にいる存在——そう、キャロはフリオの中で、そのくらい自然な相手になっていたのだ。
そのことを自覚して、照れてしまった。なぜそんなことを思うのか、自分でも不思議だった。人は自分の死を予感すると、誰かに何かを伝えたくなるのだろうか。気持ちというか、心というか、自分が今この瞬間——生きているんだという証のようなものを。
このときのフリオも、ふいに何か特別な言葉をかけてみたくなっていた。彼女に言うのなら、今なのかもしれないとさえ思い始めていた。
だが、思いとどまった。

死にに行くわけじゃない。絶対に生きて帰ると、皆に誓ったのだから――。
フリオは弱気な自分を捨て去ろうと思った。
だから、現実に戻ろうとした。
「あいつら……魔王の扉の前にいるはずだ。決着をつけようぜ！」
「うんっ！」
二人は並んで、さらに奥へと歩み出す。
やがて通路を抜けて、祭壇のある広間に出た。
たくさんの蠟燭の火が揺らめき、死界への入り口を思わせるような異様な場所である。
その広間の奥には、固く閉ざされた石の門があった。おそらくその中に、魔王が眠っているのだろう。門の前には二つの影が見える。
それこそは、雌雄を決する相手――悪フリオと悪キャロだ。
ついに、その姿を視界に捉えた。
「ブルって逃げ出したかと思ったぜ――」
待ちかねたように悪フリオが迎える。
「……何か言い残すことはない？」
悪キャロも、ぞんざいな態度を示してきた。有無を言わせず、闘いに持ち込もうとす

るつもりらしい。
だが、フリオとキャロはそんなのは嫌だった。
無駄(むだ)だとわかっていても、まずは話し合ってみたかったのだ。
キャロは彼らの良心に訴えようとして、
「魔王なんて復活させる必要が、どこにあるって言うの？」
今さらながら二人に訊ねてみた。
彼らに一瞬の沈黙があった。
やがて、
――また、その話か。
という、うんざりした表情を悪フリオが浮かべる。彼らにしてみれば、もはや話し合う余地(よち)のない議題なのだろう。
しかし悪フリオはやれやれとかぶりを振ったあと、少しだけなら話に付き合ってやるかと、固く閉ざされた石の門を背にして歩み寄ってきた。
そして過去の自分たちに言った。
「オレたちがやらなくても、必ずどこかのバカが封印を解く――それは動かしようのない事実だ」

歴史という運命は動かせない。
彼らなりの理屈である。
「だから百日後、世界は滅びる……その前に魔王をオレたちが倒すんだ！」
と、悪フリオは強引に結ぶ。
「そんなの、無謀すぎるわ！」
たまらずキャロが言い返した。
「勝てない魔王に何度も挑むなんて、理不尽よ！　それこそ時空が狂って、世界を破滅させてしまうわ！」
「第一、倒すために復活させるなんて、理屈が通ってないじゃないかよ！」
フリオも続く。
すると、
「何よ――〝今日〟のあなたたちに、わかってたまるもんですかッ！」
悪キャロが怒鳴り返した。
その叫びに、フリオとキャロはハッとする。
封印の広間がしーんとなった。
ふいに悪キャロが泣きだした。

「……ケ、ケンもリンダも！　シスターポーラも！　ジュディさんも‼　そしてマホさんも‼　みんな……みんな！　誰ひとり……守れなかったのよ！」
怒りと悲しみの震えだった。
それがフリオたちに伝わってくる。
未来を見てしまった者の悔恨。自分たちが背負いきれない使命の重圧……それらの感情が、彼女の中ではじけたかのようだった。
「………」
フリオたちは言葉が出なかった。
もし、自分たちが同じ立場だったらどうなっていたのか。
ミナクルの町が消滅する瞬間を目撃したあとでも、平然としていられるのだろうか。
「……これ以上、話してもムダってことか」
ぽつりと、フリオが言った。
「さすがオレ、話が早いぜ！　さあ、そろそろおっぱじめようか？」
悪フリオが身構える。闘いのときが近い。
「じゃあ、まず小手調べは――この服からだ！」
未来の二人が光に包まれる。

悪フリオは《格闘家の服》に、悪キャロは《剣士の服》に変身していた。
それを見て、現在の二人も着替える。
「なりきりチェンジ！」
フリオとキャロは同時に叫んだ。
フリオは未来の自分と同じく格闘家の服に、キャロは《クレリックの服》に変身した。
レミ遺跡の最下層に、四人のなりきり師が向かい合う。
「——さあ、力と技の勝負だぜ！」
悪フリオたちが突進してきた。
ついに、最終決戦の幕が切って落とされたのだ。

＊＊＊

「でりゃあああああーっ！」
迫る悪フリオが拳をくり出して、フリオに襲いかかってきた。
「くっ！」
フリオはとっさにかわした。かわしたところに悪キャロが剣を突き出してくる。

「うわっ！」
慌ててよけた。反り返った勢いのままバック転する。
ひらりと回転して着地したところに、悪フリオが飛び蹴りを仕掛けてきた。連携攻撃だ。不意を食らって胸に受けた。
「ぐはっ！」
たまらず吹っ飛ばされた。体が宙を舞って、地面に叩きつけられる。
「フ、フリオ！」
クレリックのキャロが、心配して叫んだ。
「大丈夫だ、まだやれる！」
歯を食いしばってフリオは起き上がる。
離れた場所で、悪フリオと悪キャロが笑っている。余裕の笑みだ。
だがそこに、
「――《ジャッジメント》！」
キャロが大技を放った。いつの間に、術の詠唱時間を縮められるようになったのだ。
「ぐあっ！」
「きゃあっ！」

油断した悪フリオと悪キャロが、雷の裁きをまともに受けた。
「……お、おのれ！」
よろめいた悪フリオが睨み返す。
「エヘッ、装飾品の《ミスティシンボル》をつけているのよ！　だから詠唱時間はいつもの半分――」
キャロが自慢げに胸を張る。
しかしそれが隙となった。
「危ない、キャロ！　逃げろ！」
フリオが叫んだときには、もう遅かった。
《ウィッチの服》に着替えた悪キャロがホウキに跨がって舞い上がり、《イラプション》を唱えたのだ。
「きゃあああああーっ！」
溶岩と火炎弾による攻撃を受けて、キャロが悲鳴を上げる。
「ミスティシンボルなら、こっちだって装備してるのよ！」
ウィッチの悪キャロが言い返した。
「くそっ！　だったらこれだ！」

フリオは床を蹴って跳躍した。ジャンプして着替える。今度は《盗賊の服》だ。ホウキに跨がって宙に浮かぶ悪キャロに体当たりし、その隙にミスティシンボルを盗んだ。
「ああっ、なんてことを！」
悪キャロが悔しがる。
着地したフリオは、悪キャロを見上げて笑った。
「へへーんだ！　これでもう詠唱時間は短くならないぜ！」
「か、返しなさいよ！」
悪キャロは慌てて自分も盗賊の服に着替え、降下しながらフリオに飛びかかってきた。
「おっと！　返すもんか！」
よけたつもりだったが、悪キャロは着地するなり再びジャンプした。
「うはっ！」
脇から抱きつかれた。
「は、離せよ！」
「つかまえちゃったもんねえ～。離さないから！」
「よ、よせよ！　ヘンなとこ触るな！」
ミスティシンボルを奪い返されないよう、必死にもがいた。

盗賊の服を着たフリオと悪キャロが、激しくもみ合う。
「もう！　何イチャイチャしてんのよ！　ええーい《ブラックホール》！」
いつの間にかキャロもウィッチの服に着替え、さらなる大技を放つ。
超重力の塊（かたまり）を発生（はっせい）させて、フリオごと攻撃してくる。
「うわあーっ！　や、やめろよ！　オレまで巻き込むなよ！」
「いやあああああっ！」
フリオは悪キャロと一緒になってさらにもがいた。
「フリオのバカ！　未来の私とイチャイチャしてないで、すぐに離れなさいよねっ！」
空中からキャロが見下ろして怒る。
その模様を見ていた悪フリオは、
「フン、体もあったまったところで——次だぜ！」
そう言って、新しい服に着替えた。なんとそれは《ジューダスの服》だった。
「な、なんだって！」
フリオは驚いた。
それにしても、いろんな服を持っていやがる——と、心の中で感心した。
いや、感心している場合ではない。

「行くぞ――《スラストファング》！」
すぐさま、悪フリオが風の属性の術を放ってきたのだ。
たちまち無数の真空刃で、フリオの体が斬り裂かれる。
「ぐわあああああああああっ！」
傷つき、ボロボロになった体が、ドサリと床に落ちる。フリオは動けなくなった。
「フリオ！　――《キュア》！」
クレリックの服に戻ったキャロが、急いで回復の術をかける。
術の効果は絶大だった。みるみる傷口が癒え、痛みが取り除かれていく。
「……あ、ありがとよ……助かったぜ！」
フリオはそう言って立ち上がった。そしてジューダスの服をまとった悪フリオを睨みつける。
敵は自慢げだった。
さすがに、ここまでの服はお前も持っていないだろうと言いたげな笑みを浮かべている。それを見て、フリオはやり返したくなった。
「お前、その程度で喜ぶのはまだ早いぜ？」
負けじと、不敵な笑みを浮かべる。

ジューダスの服を着た悪フリオは首をかしげ、まるで信じていないように「負け惜しみを言うな」と、さらに笑いだす。
フリオも笑いだす。
「じゃあ見せてやるよ。オレのとっておきの、なりきり服を！」
そう言って、なりきりチェンジした。
フリオが選んだ究極のなりきり服――それは《ダオスの服》だった。
黄金の長い髪に、幾重にもまとった外套。枯れかけた世界樹ユグドラシルを守るため、母星デリス・カーラーンより降り立った異星人。その神々しいまでに威光を放つダオスが、突如にしてレミ遺跡の最下層に出現したのだ。
「な、なんだと！」
さすがにジューダスの服を着た悪フリオが戦慄する。
「フフッ、驚いたか――我が名はダオス。オレの自慢のなりきり服だ！」
ダオスの服をまとったフリオが、声までダオス本人になったのかと思わせる美声をふるわせる。
実はフリオは、レミ遺跡の地下二階でダオスやエルレインと闘い、そのとき勝利して《デリスエンブレム》を入手。それと《クレスの服》を、ミナクルの町にある『なりき

りショップ』で強化してもらっていたのである。
クレスの服はクレス本人から、服の《ルーツ》となる《奥義皆伝書(おうぎかいでんしょ)》を譲り受けて作った。そしてクレス本人からの勧めもあって、それをダオスの服へと強化してもらっていたのだった。
「そうか……貴様は知らないうちに学んでいたのだな」
「そのとおりだ。いつも貴様に勝とうと思って、技だけでなく、なりきり服を強化する心得も学んできたのだ」
フリオの口調が、ダオスらしい喋り方に自然と変わっている。
悪フリオはしばらく考えたのち、
「だったら、こちらもそれにふさわしい服に着替えよう――」
そう宣言した。
どのような、なりきり服を出してくるのか。
悪フリオは、そばに寄ってきた悪キャロとともに光に包まれた。
二人そろってのなりきりチェンジである。
やがて悪フリオはジューダスの服から《ユグドラシルの服》に変身した。隣の悪キャロは《シゼルの服》に着替えた。

「――それなら、私も！」
ダオスの服をまとったフリオの横で、キャロも片手を挙げて叫ぶ。
「なりきりチェンジ！」
キャロの全身が光に包まれる。
着替えたのは――《エルレインの服》だった。
ダオスとエルレイン戦で、キャロは《きせきのペンダント》を手に入れていた。それと《リアラの服》を合わせたのである。
リアラの服は、ウィッチの服に、『時の吹きだまり』で幻覚を見るリアラと闘ったときに手に入れた《きぼうのペンダント》を合わせて強化させたものである。それを、さらにエルレインの服へと強化してもらっていた。
「世界と人々を救済するため、我が力をここに授けましょう――」
エルレインの服をまとったキャロは、まるでエルレイン本人の意志が、そこに降臨したかのように神々しい美声をふるまう。
二人は、この日のために切り札となる服を用意していたのだった。
レミ遺跡の最下層で、究極のなりきり服をまとった四人が向かい合う。
彼らは絶望と希望の狭間で、それぞれの力をぶつけ合った。



ついに、最終決戦の瞬間が訪れたのだ。

「――《プリズムフラッシャ》！」

エルレインが、七色に輝く剣をユグドラシルとシゼルに降り注がせる。

彼らは床を蹴って、跳躍した。

かわしたのも束の間、

「――《タイダルウェーブ》！」

ダオスが巨大な波を放った。

瞬く間に出現した巨大な波に、着地したばかりのユグドラシルとシゼルが呑み込まれる。うわっ、と短く悲鳴が聞こえた。

「フフッ、あっけない……」

ダオスの服を着たフリオが、そのキャラクターに合わせてなりきったときである。

波の水面を割って、人影が飛び出す。

「――《プリズムソード》！」

シゼルも七色に輝く剣を、ダオスとエルレインに降り注いだ。

不意を突かれた。

慌ててフリオたちはかわし、なんとか直撃は免れた。しかし、ダメージのほどは計り

知れない。

「くっ、愚かな――」

エルレインの服を着たキャロが立ち上がる。彼女もまた、服のキャラクターになりきっていた。

二人して反撃の構えを取ろうとした、そのとき。

巨大な波が過ぎ去ったあと、ひとつの影が立ち上がった。

ユグドラシルである。

波の勢いに流されることなく、堪えていたのだ。

「――《ホーリーランス》！」

ユグドラシルは狙いを定めた。無数の光槍が飛び出してくる。

向かってきた槍に対し、

「おのれっ！」

ダオスもエルレインも防御の体勢を取る。

辛うじて光の槍を弾いたが、

「――《エターナル・ファイナリティ》！」

と、シゼルが続け様に術を唱えてくる。

天から巨大な剣が召喚され、ダオスとエルレインめがけて落ちてきた。

レミ遺跡の最下層が大きく揺れ動いた。巨大な術が連続して発動しているのだ。古(いにしえ)の建物も悲鳴を上げていく。床や壁が裂け、石柱が轟音(ごうおん)を上げて崩壊(ほうかい)する。

それでもお構いなしに四人の激闘は続いた。

「――《ディースネル》!」

ユグドラシルが唱える。

天から無数のレーザーが降り注ぎ、ダオスとエルレインを攻撃する。

もはや防御の体勢すら、ままならない。

(やられるのか?)

敵の勢いに呑まれそうになっていた。

だが、

「――《デルタレイ》!」

エルレインが叫ぶ。

三つの光弾(こうだん)が、高速でユグドラシルとシゼルを貫(つらぬ)く。二人の悲鳴が響き渡った。

キャロはまだあきらめていないのだ。

その隙を狙って、ダオスの服を着たフリオが体勢を立て直す。

「――《ダオスレーザー》！」
貫通力（かんつうりょく）のある極太（ごくぶと）のレーザーが放たれる。
すると同時に、ユグドラシルも《アウトバースト》を炸裂させた。
二つの光が激しくぶつかり合う！
目の前が真っ白になった。強烈な光が広間いっぱいに満ちたのだ。
（ヤベェ、見失うぞ！）
フリオは夢中で飛び込んだ。あとで思い出そうにも記憶がないほど必死だった。光に満ちた中でユグドラシルの姿を追った。何度も手応（てごた）えがあったのは、石柱や壁に撃ち込んだものらしい。
いない！　どこにもいない！
焦っている自分を感じた。
（どこだ！　どこに行った？）
光の中で探し回ったとき、背中を斬りつけられた。おそらくシゼルの攻撃だろう。幸い、ダオスの服の外套に当たって、さほどのダメージには至らなかったが、打撃のためにのめり込んで、ぐわっと、血ヘドを吐いた。
（くそっ）

痛みが胸の中を走る。

振り返ると、シゼルもユグドラシルの姿も見えない。術の閃光をまともに受けて、視力がやられたのだ。しかも、また光が炸裂したらしい。誰かが新たな術を使ったのだ。

さらに視界が奪われ、また真っ白い世界に誘われる。

(ちきしょう！　やられてたまるかっ)

ダオスは光の中でやみくもに術を乱用した。

その背後の隙を、もう一度シゼルが狙ってきた。

(ヤベェ！)

と背中を丸めて逃げようとした。

しかし背後のシゼルはさらに撃ち込んできた。その打撃で、横ざまに倒れたが、やはりダオスの服の防御力の高さで怪我はない。

ユグドラシルはどこだ！　キャロは何をしている！　フリオは心の中で叫んだ。

大技の術がぶつかり合ったときの衝撃と閃光で、依然として視力がはっきり戻らない。

態勢は不利だ。思わず、泳ぐように前へのめると、

「逃げる気か――臆病者めっ」

いきなり背中から声が聞こえた。ユグドラシル――いや、悪フリオのものだ。

気づいて振り返ったとき、怒りがダオスの服の全体にみなぎった。
そのとき、奇跡を生んだ。
ダオスは振り返った勢いで手を伸ばし、今度こそユグドラシルの体を捉えることに成功したのだ。
「ふわっ！」
相手が戸惑いの声をもらす。
（逃がすかっ）
構わず拳を打ち込んでやった。ユグドラシルの悲鳴がはっきり聞こえた。
胸の中で、怒りが解放に向かっていく。
――オレは、オレは！
未来を倒す！
呪文のように唱えながら彼の体に撃ち込んでいった。
速さだけが勝負だった。相手からの反撃はない。それをいいことに、いや、ここが勝負だとばかりに攻撃の手を休めなかった。さらに撃ち込んでいく。
やがて、相手がどっと倒れてくるところを、めったやたらに攻撃した。
勝利というのは意識していなかった。

ただ力まかせに、いや、力の続くかぎり、そいつを——未来を倒そうと、無心の境地になっていったのである。

やがて何度も連続していた光の炸裂がおさまり、あたりは元どおりの封印の間の情景へと戻っていった。

気がつくと、勝利していた……。

＊＊＊

「強いな、お前たち……」

「私たちが集めた、なりきり服を……受け取ってちょうだい……」

「これだけ、そろっていれば……魔王を倒せる服も……きっとある……」

倒された未来のフリオとキャロは、何かから解放されたように穏やかな表情でつぶやく。

信じられない気持ちだった。

実力からいえば、百日後の彼らのほうが断然有利だったのだ。

何が勝因だったのか、自分でもわからない。だけど、もしかすると彼らが手加減して

いたのではないかという気がしていた。
崩壊(ほうかい)しかけた封印の間の床に横たわったまま、こうして自分たちに何かを伝えようとしてくるその姿が、最初から負けるための闘いだったのではないかとの邪推(じゃすい)をよぎらせてしまうのだ。
「私たちは……明日の、あなたたち自身……世界の破滅を見てしまった……」
横たわった未来のキャロが、天井を見つめてつぶやく。
その隣で仰向(あおむ)いてる未来のフリオも、同じく絶え絶え(たえだえ)の息で言葉を紡(つむ)ぐ。
「キャロと二人でやり直そうって、百日前に戻ってきたんだ……自分たちの墓に、決意して……でもな……」
そこで、黙ってしまった。
あとの言葉を飲み込むような間があった。
「忘れるな……」
話題を変えるように言った。
「お前たちは……未来の自分に勝った……」
「……運命は、必ず変えられる……未来には無限の可能性が……きっとある……」
未来のキャロも続けた。

「そ、それを知っただけでも……オ、オレ……ま、満足……だ……」
そう言って、未来のフリオとキャロは静かに目を閉じる。
彼らの体は消滅していった。
まるで魂がどこかに旅立つかのように……。
勝利を掴んだはずなのに、フリオとキャロは泣いていた。
手には、魔王の封印を解くきぼうのカギがあった。
奪われたものが戻ってきたのだ。
しばらくして泣いていたキャロが、
「どうする、フリオ……魔王の封印を解いて、真の英雄になる？」
と、冗談のように聞いた。
「いや……」
フリオは涙を拭いて笑った。
「平和を守るのが、真の英雄の仕事だぜ……だったら、答えは……ひとつだろ……」
照れくさいけども、思ったことを口にした。
それが、あいつらの教えたかったことなのかもしれないんだから――。
命をかけて、このオレたちに……。

フリオは心の中で、そうしめくくった。
キャロも、笑顔で頷き返す。
やがて二人は《最後のカギ》を、誰にも知られず封印しようと決めたのだった。

終章　還える旅立ち

＊＊＊

「たたた、たいへん大変、大変じゃ!!」
まどろみの中でおじさんの声が聞こえた。それはいつも耳にする、なじみのある声だ。
「大変じゃ！　大変じゃぞ！」
「う、うーん……」
なんだか自分が呼ばれてるような気がして、フリオは目を醒ました。
顔を上げると、机に突っ伏したまま眠っていたらしい。そばには茶色いもじゃもじゃ頭で、眼鏡をかけた人のよさそうなおじさんが立っている。言わずもがな、古代史研究所の所長であるブラウン博士だ。
フリオはよくこの研究室におじゃまして助手として働いているのだが、時々こうして机の前に座って居眠りしてしまうことがある。特に今日は、午後の穏やかな日差しを受

けて、長い間眠っていた気がする。
　おかげで、いろんな夢を見た。
　……時空転移装置のドリーム号を遺跡から発見し、別の世界に旅立ったこと……そのドリーム号を盗まれてしまい、泥棒夫婦のポニーとクライトを捕まえるために冒険したこと……そして《なりきり服》を着て、憧れの『テイルズ オブ』世界の英雄たちとともに新たな冒険に出かけたこと……そしてここからが重要なのだが、なんと未来の自分たちに出会ってしまったという、驚くべき真実…………あれ？　それって全部、夢だったのか？
　フリオがきょとんとして、ブラウン博士を見上げた。
「あ、博士、おはようござ……」
　現実に戻ろうとしていた。
　そしてどこから現実で、どこから夢だったのか訊ねようと思った。
　するとブラウン博士は、
「フリオ、忘れたのか？　何をこんなところで居眠りしておるんじゃ？　ふむ……さては昨日、伝説の英雄たちが帰ってしまったので気が抜けてしまったんじゃな？」
「――英雄たちが帰った！」

いして、別れの挨拶を交わしたときのことだった。

「そうじゃ。あの『テイルズ オブ』世界のな……」
それを聞いた瞬間、みるみる昨日の光景が頭の中によみがえってきた。
――それはミナクルの町の広場で、憧れの『テイルズ オブ』世界の英雄たちが勢揃

フリオ、キャロ……キミたちの力で、たくさんの世界が救われた。
この町に、いつまでも平和が続くことを願ってる。
英雄伝説を繙けば、いつでもまた私たちと会える。
また会える日が来るといい……。

それはフリオたちの希望でもあった。
「……やっぱり、あれは夢じゃなかったんだ……」
もしかしてまだ夢を見ているのかとも疑ったが、起きたばかりのぼんやりした頭の中に、昨日の光景は鮮明によみがえってきていたのだ。それと同時に、あのときの感動もよみがえってくる。
フリオの中に芽生えた充実感である。

オレは、数多くの英雄たちと一緒に闘ってきたんだ――。
そのことをあらためて実感できた。
「何をしておるんじゃ、フリオ?」
「……ん?」
ブラウン博士に言われて、フリオは顔を上げた。
「今日は、いよいよホワイト博士が元の世界に帰る日じゃぞ?」
あっ、と思い出した。
そうだった――。
起きたばかりのときはたまに頭の冴えないこともあるけど、ついうっかりしていた。
それだけ闘いに勤しんで、疲れていたのかもしれないけど――今日はもうひとり、大事な人との別れがあったのだ。

＊＊＊

夕陽に染まる古代史研究所の中庭で、ホワイト博士がドリーム号に乗り込もうとしている。

見送りに集まったのは三人――フリオ、キャロ、ブラウン博士だけ。
本当はミナクルの町の人たち大勢で見送りたかったけど、でもそれはホワイト博士が遠慮（えんりょ）した。みんなを混乱させてはいけないと気遣っていたのだろう。百日後のブラウン博士が、ホワイト博士として過去に戻ってきて、二人一緒にいる――そんなややこしくて普通の人には理解しにくいことを、公（おおやけ）にする気はなかったのだろう。だから今日まで、古代史研究所の施設から一歩も外に出なかった。
思えば、寂（さび）しい帰還（きかん）のときである。
「フリオ、キャロ……さらばじゃ、あの子たちのぶんまで達者（たっしゃ）で暮らせよ……」
と、ホワイト博士が別れを告げたときだった。
キャロがふいに訊（たず）ねた。
「私……まだわからないんです」
「何がじゃ？」
「博士から聞いた、石版の最後の内容……あれって、どういう意味なのか……気になって……」
すると横から、
「オレもだよ！　ホワイト博士、教えてくれよ！　本当のところをさ。でないとオレた

ち、夜も寝られないよ～」
フリオもねだるように聞いてきた。
ホワイト博士は笑って、離れた場所に立っているブラウン博士を見つめた。
少しだけならいいじゃろう――。
そう言いたげな笑みで、ブラウン博士は頷いている。
ホワイト博士もわかったと、目で合図した。
「教えてやろう。ジャババが不死身になった理由は……本当をいうと、わしらにもわからんかった。結局は不明のままじゃったが、おそらく時空を強引に逆流した反動か？と、あの石版には記されておったのう……」
「時空を強引に逆流した反動？」
キャロが目をしばたたかせる。
「そうじゃ。実はな」
「……」
いよいよ答えが出る。
フリオとキャロは、ごくりと息を呑んだ。
「未来からの追っ手の若い男女。彼らもまた、ある意味で不死身になっていたらしいの

じゃよ――」
「未来からやって来た男女も？」
「不死身に？」
フリオたちの問いにホワイト博士が、
「そう。ただし彼らの場合……封印を守り、転生を繰り返す〝魂〟として、じゃな……つまり……」
そこまで言いかけたときだった。
そばに、ブラウン博士が寄ってきた。
「……そろそろ時間じゃな」
「ああ、そうじゃった……」
話は途中で打ち切られてしまった。フリオたちはがっくりとする。
「ご苦労じゃった」
「そちらも、ご苦労じゃった」
未来と現在の両博士は向かい合い、ひしっと抱き合って、お互いの健闘を讃え合ったあと、握手して別れた。
そしてホワイト博士は一同に手を振って、ドリーム号に乗り込んだ。

「どの時代に帰っていくのかしら……」
「ふ〜む、よくわからんが……歴史が完全に元どおりになった、ちょうどいい時代じゃろう……」
キャロのつぶやきに、ブラウン博士が答えた。
よくわからないが、博士がそう言うのだから大丈夫なんだろうと、キャロは安心した。
ドリーム号は時空転移の旅に出発した。
消え去ったドリーム号を見送っていたフリオが、ぽつりと言った。
「とうとう、終わっちゃったな……」
冒険が終わったことに、寂しさを感じている口調(くちょう)だった。
英雄たちもミナクルの町から去った。彼らは、フリオたちを英雄と認め、世界に危機が訪れたときは、また会おう——と別れの言葉を残して、それぞれの世界に戻っていった。
そのことだけでも自分はいい経験をした。
これからは、彼らとの約束を守りたいと思った。
……守ってみせる、自分たちのこの世界を。

そして、ミナクルの世界で魔王が復活することは永久にない――。
このオレたちがいるかぎり。

夕陽の空に向かって、そう心の中でつぶやいたときである。
「ねえ、さっきのホワイト博士が言った意味……フリオはわかったの？」
キャロが訊ねてきた。
もし答えがわかったのなら聞かせて欲しいという期待のまなざしを向けられたが、フリオはあっさり首を横に振った。
それを見て、キャロは「な〜んだ」とむくれた。
でも、フリオは言った。
「あれで、いいのかもな……いや、あれでいいんだよ……」
自分自身を納得させているような口ぶりだった。
「うまく言えないけど……オレがオレであることに、ややこしい理由なんて――どうでもいいいや！」
いつもの明るさを取り戻したように答えた。
細かいことにこだわらない、フリオらしさが戻ったのだ。

そのことを知って、キャロはくすっと笑った。
「フリオのそういうアバウトなとこ、少し嫌いだけど……でも、大好き☆」
キャロが、初めての告白をする。
「なっ⁉　なにぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃーっ！」
言われたフリオは顔を真っ赤にさせた。
それを見て、ブラウン博士が大笑いする。
夕陽は悠然とやさしく、その三人を照らし続けた。

（おわり）

あとがき

なりきり服というのは本当に便利なもので、例えば服を着替えるだけで小説家になれたり、映画監督になれたり、ファッションデザイナーになれたり……憧れの職業にそのときの気分で次々に早変わりできてしまうのだ。しかもこのなりきり服は将来の自分の可能性と力を、未来からそのまま現代に持ってこられるので、つまりその時点で、自分が将来どんな職業に向いているか、どんな才能を秘めているかが瞬時に知れてしまうのだ。服のパラメーターを見れば一発である。高い数値を示した服の職業こそが、将来自分が成功する職業なのだ（笑）。こんなに素晴らしい服は、かつて見たことがない！

このなりきり服があれば、もはや世の中から、

夢に挫折する若者！

――が、まるで存在しなくなる。ああ、僕もなりきり服が欲しい～。

といっても、本物が販売されるのは、あと百年ぐらいは平気でかかるのでしょうか。未来の時代に生まれる若者は得だなぁと、たまにこの時代に生まれちゃって損したなと思ったりもするのです。

未来には、なりきり服のほかにどんな素晴らしいアイテムが開発されているか、それこそドリーム号に乗って、思いっきり未来へと旅立ってみたいものです。あるいはナマの恐竜を観に、太古の時代へ舞い戻ってみるとか。そういうのができる未来の若者は、う～ん、幸せだ。うらやましいぞ……。

でも、未来に旅立って地球が破滅していたりなんかしたら困るよなぁ。時空を未来に向かってジャンプしたら、いきなり大地が消えてて宇宙空間だったなんてさ。あるいは崩壊したあとの荒れ地に変わっちゃっていたとか。

今回の物語のフリオとキャロも、そうした自分たちの故郷が未来で焼け野原になってしまっている光景を見て、そこから行動が始まったんだと思う。自分たちの故郷が滅んでしまったのはどうしてか？　未来に飛んだ二人は、そのすっ飛ばしてしまった時間に何があったのか探ろうと、少し過去に戻って原因を調べだす――すると、なんと故郷を崩壊させたのは「自分たちだった」と、知ったときのショック！

そういうのは自覚がないだけに、すごく複雑な心境になるんだろうなって思う。自分はそんな罪を冒してないと思っていても、別の時間の自分はそれをやってしまっていて、未来に飛んだせいで、その結果だけを知ってしまうのだから――これは複雑で、なんて言ったらいいんだかわかんなくなる。

今回の小説では、そこの心情を綴るのがとっても難しかったです。でも周りの皆さんの力のおかげで、何とか乗り切ることができました。

監修を務めていただいた桝田さん。本当にありがとうございます。風邪をひいた中、ご多忙中の事務所にお邪魔してすみませんでした。でもそのときに、いろんなウラ設定の話やコンセプトなどを聞けて、僕も一気にモチベーションが上がりました。ありがとうございます。

ナムコの岡部さんにもお世話になりました。『バテン・カイトス』のノベライズのときから目をかけてくださり、感謝しております。また伊達さんには出来上がったばかりの『なりきりダンジョン3』の攻略本をいち早く送って頂きまして、ありがとうございました。おかげで執筆中のデータチェックに、かなり役立てられました。

そしてエンターブレインで、〝アトリエシリーズ〟から担当してくださっている宮地さんにも足を向けて寝られません。今回風邪で一週間も寝込み、別の仕事とのスケジュール調整やらで、さんざん執筆を遅らせてしまい、大変大変、申し訳ありませんでした。

そして最後に、この本を手に取ってくださった皆さま。『テイルズ オブ』のキャラクターたちと違和感ないように心がけて書いてみましたが、いかがだったでしょうか。厳しいご指南をまたいただければと思います。どうぞ今後ともよろしくお願いします。

【追伸】最近の僕は、劇団『ボイスマジック』という新たな活動を始めました。これはスライドとアフレコショーを組み合わせた、ステージで行うスライド・ドラマです。

同世代のクリエーターたちと発足した劇団で、僕が書いた脚本に、アニメーターさんがオリジナルのキャラクターデザインを起こしたり、原画を描いてCGにしてくれたりして、脚本の物語に合わせたビジュアルを作ってくれます。それを声優さんたちが声の演技でライブ感のある音のドラマをスライドの映像と一緒に見せるものです。

まだ発足したばかりなので一回目の公演が終わり、今は次の準備に取りかかっているところです。まだまだ知られていないので、もし興味を持ってくださる方がいたら公式HPにアクセスしてみてください。詳しい公演日程などがチェックできます。こちらもぜひよろしくお願いします。それでは長々とすみませんでした。失礼します！

●劇団ボイスマジック公式ホームページ（http：//www.voicemagic.net ）

工藤治

工藤　治の著作リスト

ザールブルグの連金術師3
リリーのアトリエ
～祝福のワインを聖騎士に！～

マリー☆エリー☆リリー
～3人のアトリエ～

ユーディーのアトリエ
～グラムナートの錬金術士～

マリー☆エリー☆リリー2
～マリーの弟子～

モエかん
～緊急指令！　妹島を攻略せよ！～

テイルズ オブ ザ ワールド
なりきりダンジョン3
フリオとキャロの大冒険 上下

9784757722927
1920193006407
ISBN4-7577-2292-3
C0193 ¥640E
定価 本体640円 +税
発行○エンターブレイン

Famitsu Bunko

『テイルズ オブ』ワールドの英雄伝説を書き換えようとしていた犯人を捕らえてみたら、なんと単なる下っ端だったとは……。しかも本当の敵は、未来のフリオとキャロ!? 一体、百日後に何が起こったのか?
『テイルズ オブ ザ ワールド なりきりダンジョン3』ノベライズ、待望の完結編!!